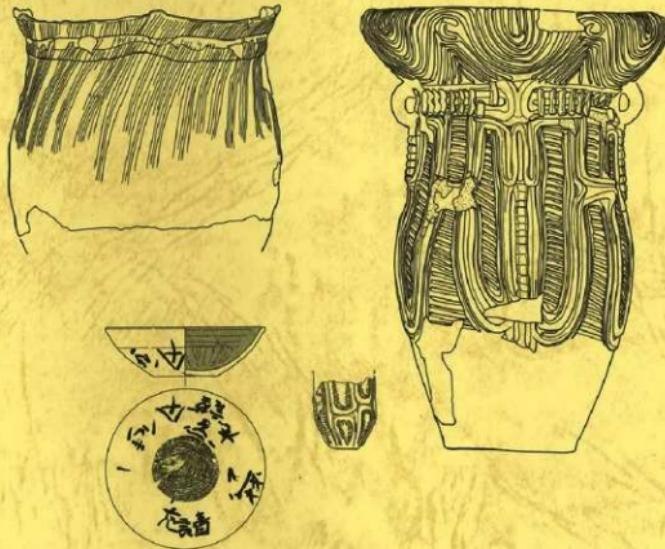


郷土の文化財 30
SHIBIRA SITE

志 平 遺 跡

国補志平川砂防激甚災害対策特別緊急事業に伴う
志平遺跡発掘調査報告書



2010年（平成22年）3月

長野県諏訪建設事務所
長野県岡谷市教育委員会

郷土の文化財 30
SHIBIRA SITE

志 平 遺 跡

国補志平川砂防激甚災害対策特別緊急事業に伴う
志平遺跡発掘調査報告書



長野県内における遺跡の位置図



志平遺跡 全景（対岸鶴峯公園より）



黒縞石埋納埋甕



小堅穴 58P コハク製垂飾出土



コハク製垂飾

序

平成 18 年 7 月、岡谷市を襲った集中豪雨は各地に甚大な被害をもたらし、尊い人命をも奪いました。その記憶は消えことなく、今もって爪痕は残されています。

今回の調査は、志平川砂防激甚災害対策事業の実施に伴い行われました。

志平遺跡は、天竜川左岸橋原区にあり、諫訪史第一巻に「志平元屋敷」遺跡として記述があり、古くから周知されていた遺跡です。川岸地区にはこのような古くから知られた遺跡が多く、後田原遺跡、長塚遺跡は昭和 40 年代前半に調査されています。昭和 53 年から始まった橋原遺跡の発掘調査は足かけ 3 年という長期に及びました。多くの住居址とともに多量の炭化米が発見され、弥生時代後期の大集落であり、また、水稻耕作を中心とした人々の生活に迫る重要な遺跡として全国に知られるところあります。

今回の調査では、市内でも数少ない縄文時代前期初頭の遺構と遺物が発見されました。また縄文時代中期の集落が天竜川の水辺近くに営まれていたこと、平安時代の人々がここに暮らしていたことなど多くの成果が得られました。特に、土器に埋納された黒耀石は県内 2 例目、全国でも数例という貴重な発見となりました。

これらの調査成果が地域郷土史に新たな 1 ページを加え、地元に残るはるかな原始古代の文化を知り地域を愛する心を育む一助となることを願っています。また、広く研究者の皆様には、より研究を深めるためのお役に立てれば幸いです。

災害対策事業という一刻も早い事業遂行が求められるなかではありましたがあ、文化財保護にご配慮ご理解いただいた橋原区長、災害対策委員長さんはじめ地元橋原区の皆様に感謝いたします。また、長野県諫訪建設事務所の皆様にもお礼申し上げます。

末筆となりましたが、整理作業の土器復原をボランティア活動としてご協力いただいた土師の会の皆様にもお礼申し上げます。

平成 22 年 3 月 10 日

岡谷市教育委員会

教育長 岩下 貞保

例　　言

1. 本書は、岡谷市川岸の国補志平川砂防激甚災害対策特別緊急事業に伴い、平成 20・21 年に発掘調査を実施した志平遺跡の調査報告書である。
2. 調査は岡谷市が長野県諒訪建設事務所より委託を受け、岡谷市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は平成 20 年 5 月 12 日から 9 月 5 日まで、平成 21 年 8 月 4 日から 8 月 19 日まで行われた。平成 20 年 9 月から平成 21 年度にかけて整理作業を行い報告書の発刊に至る。
4. 報告書は岡谷市教育委員会生涯学習課文化財担当が編集を行い、第 I 章に調査の概要を掲載し、整理作業、執筆分担を第 I 章 2 に明記した。
5. 調査の方法、資料整理及び報告書作成の基準、凡例の詳細は第 I 章に詳述した。
6. 出土品、記録類はすべて岡谷市教育委員会が保管している。
7. 出土遺物の保存処理については、コハク製品を(財)元興寺文化財研究所へ、金属製品をパリノ・サー・ヴェイ株式会社へ依頼した。
8. 発掘調査、報告書作成にあたり、下記の方々にご協力ご教示いただきました。感謝申し上げます。
(敬称略)
宮坂清・三上徹也・下平博行・鰐田明・高林重水・小松隆史・小池岳史・柳川英司・来島義明・保坂康夫・中沢道彦・小畑弘己・高見俊樹・平出一治

目 次

序

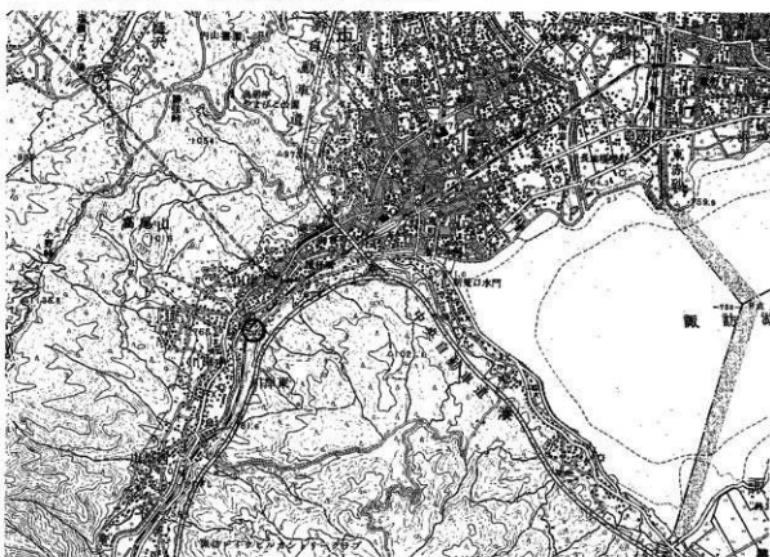
例言

第Ⅰ章 調査の経過と概要	8
1. 経過	8
2. 調査の概要	9
(1) 事業抄録	9
(2) 調査	9
(3) 発見された遺構	10
(4) 発見された遺物	15
(5) 資料整理の覚書	16
3. 調査組織	18
(1) 発掘調査の組織	18
(2) 遺構・遺物整理の作業分担	19
(3) 報告書執筆分担	19
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	20
1. 周辺の遺跡	20
2. 遺跡の位置と立地	22
3. 地理・地形の概要	23
4. 志平遺跡の土層	24
第Ⅲ章 繩文時代の遺構と遺物	25
1. 住居址と遺物	25
(1) 32・33号住居址	25
(2) 37・39号住居址	34
(3) 38号住居址	40
(4) 40号住居址	52
(5) 42号住居址	53
(6) 43号住居址	55
(7) 44号住居址	61
(8) 45・47号住居址	65
(9) 46号住居址	66
(10) 48号住居址	67
2. 方形柱穴列と遺物	71
(1) 1号方形柱穴列	71
3. 小堅穴と遺物	73
(1) 46P	73
(2) 58P	73
(3) 69P	73
(4) 132P	73
(5) 138P	76
4. その他の遺構と遺物	79
(1) 黒耀石埋納埋甕	79
(2) ロームマウンド	79
(3) 1号配石址	82
5. その他の遺物	84
第Ⅳ章 平安時代の遺構と遺物	88
1. 住居址と遺物	88
(1) 35号住居址	88
(2) 36・41号住居址	90
まとめ	92
付表 住居址一覧表	93
1号方形柱穴列一覧表	93
小堅穴一覧表	93
写真図版	95
報告書抄録	

第Ⅰ章 調査の経過と概要

1. 経過

- 平成 18 年 7 月 19 日 志平川の土石流災害発生
- 8 月 24 日 長野県諫訪建設事務所と灾害復旧工事に関わる埋蔵文化財保護協議を行う
- 9 月 21 日 長野県諫訪建設事務所、長野県教育委員会、岡谷市教育委員会にて三者協議を行う
- 平成 19 年 4 月 17 日 長野県諫訪建設事務所へ灾害復興個所の遺跡包蔵地の照会結果を報告
- 8 月 6 日 長野県諫訪建設事務所より発掘の通知書の提出
- 10 月 25 日 長野県諫訪建設事務所と埋蔵文化財保護協議を行う
- 12 月 17 日 試掘調査を実施
- 平成 20 年 3 月 14 日 長野県諫訪建設事務所へ平成 20 年度の発掘調査費用見積書を提出
- 4 月 11 日 長野県諫訪建設事務所と平成 20 年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書を交わす
- 4 月 24 日 地元へ志平川砂防激甚対策特別緊急事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施を周知
- 5 月 12 日 現地調査を開始（～9 月 5 日）



第 1 図 志平遺跡の位置図 (○印) (1:50,000)

7月 14 日	安全対策会議を行う
8月 24 日	区民見学会を行う
平成 21 年 2 月 13 日	埋蔵文化財発掘調査委託の契約変更を行う
3月 19 日	埋蔵文化財発掘調査委託完了届、発掘調査概要報告書を提出
4月 17 日	長野県諫訪建設事務所へ平成 21 年度の発掘調査費用見積書を提出
4月 17 日	長野県諫訪建設事務所、岡谷市、JR 東日本、請負業者（東鉄工業株式会社）と埋蔵文化財保護協議を行う
5月 28 日	長野県諫訪建設事務所と平成 21 年度埋蔵文化財発掘調査委託契約書を交わす
8月 4 日	現地調査を開始（～8月 19 日）
8月 21 日	長野県諫訪建設事務所と安全対策を協議
9月 1 日	出土品整理・報告書発刊作業の本格化
平成 22 年 3 月 10 日	報告書発刊

2. 調査の概要

(1) 事業抄録

遺跡名	志平（しびら）遺跡（岡谷市遺跡地図No.32）
調査の目的（事業名）	国補志平川砂防激甚災害対策特別緊急事業
事業主体者	長野県諫訪建設事務所
発掘調査主体者	岡谷市教育委員会（生涯学習課文化財担当）
発掘調査期間	平成 20 年 5 月 12 日～同年 9 月 5 日、平成 21 年 8 月 4 日～同年 8 月 19 日
遺物整理期間	平成 20 年 8 月～平成 21 年 3 月

(2) 調査

調査方法

① 発掘地区的呼称について

志平遺跡を横断する南の鎌倉街道と北の JR 中央本線を境として、鎌倉街道南側を道上区、北側を道下区、JR 中央本線の南側を線路上区、北側を線路下区とした（第 2 図）。

② グリッド表記について

道上区を除き、南北を軸として $50 \times 50\text{m}$ を大グリッド、その中の $2 \times 2\text{m}$ を小グリッドとし、南北方向を南からアルファベット、東西方向を西から数字にて設定した（第 6 図）。

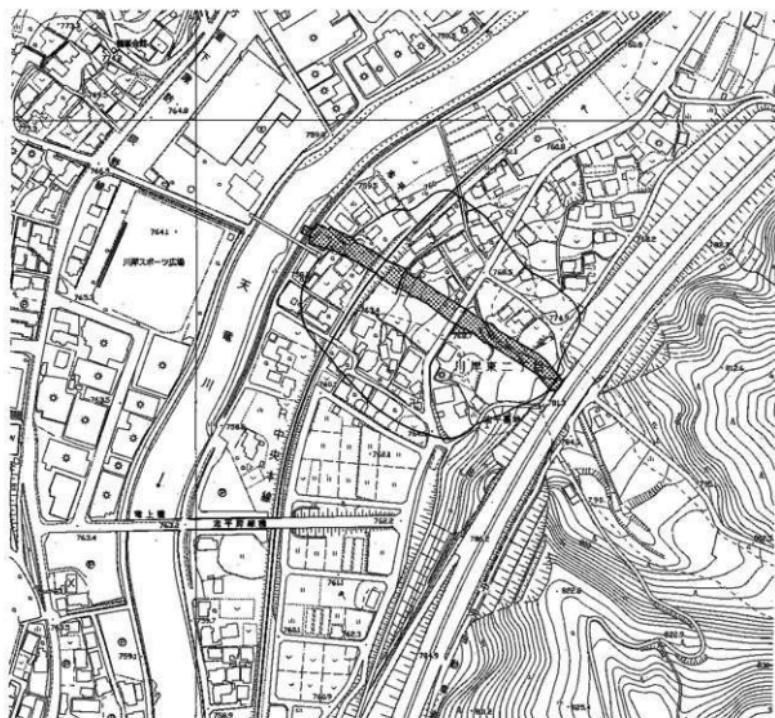
発掘調査面積

道上区	135.9 m ²
道下区	228.5 m ²
線路上区	509.6 m ²
線路下区	340.7 m ²

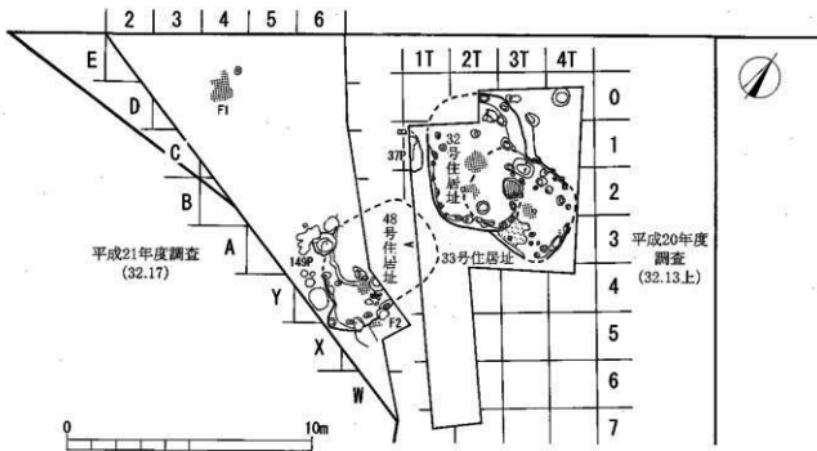
(3) 発見された遺構

- ・竪穴住居址

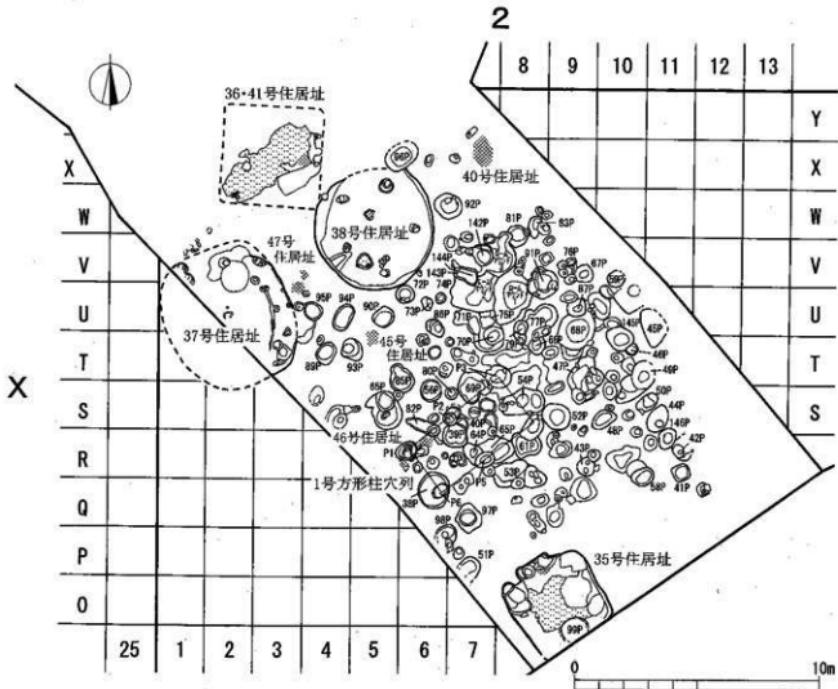
縄文時代	前期初頭	3棟
	中期中葉	7棟
	後期前葉	1棟
平安時代		3棟
不明		2棟
・小竪穴		
縄文時代	前期初頭	2基
	中期初頭	1基
	中期中葉	1基
	中期後葉	47基
	後期	14基
平安時代		3基



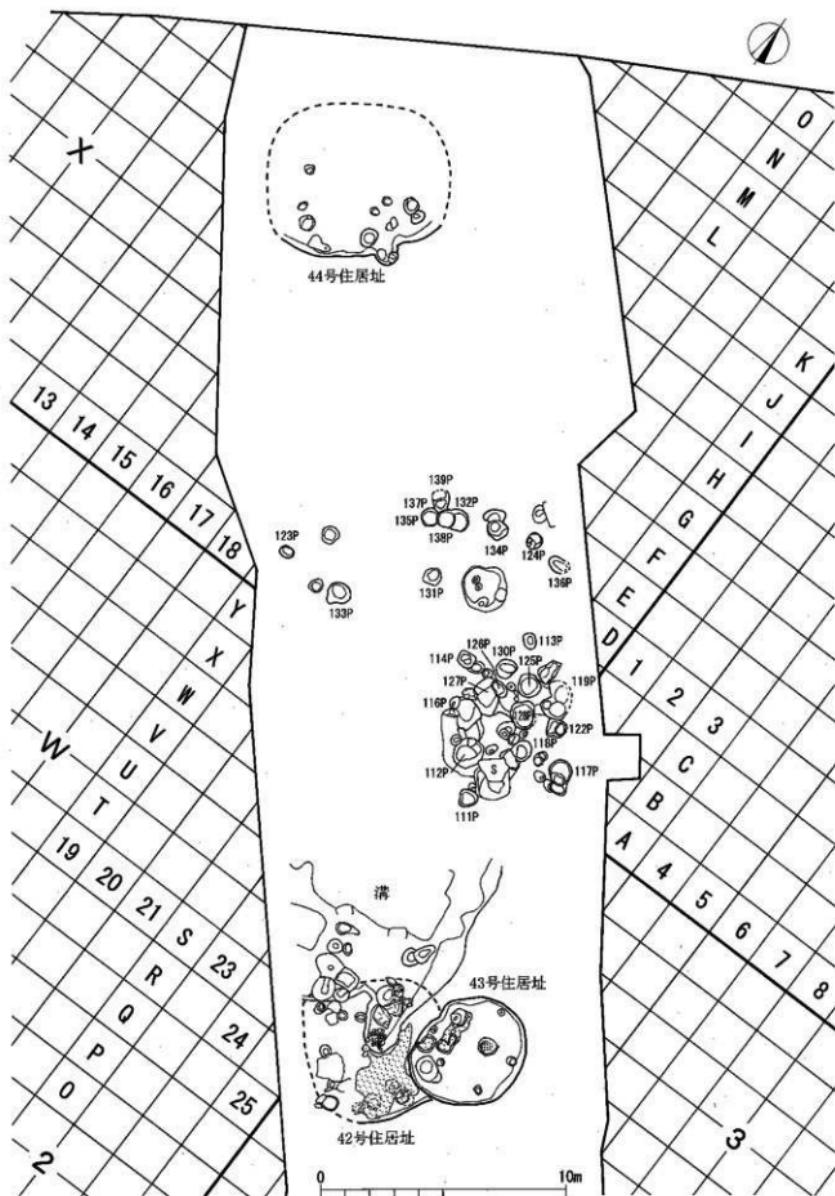
第2図 志平遺跡の立地と発掘区位置図 (1:4,000)



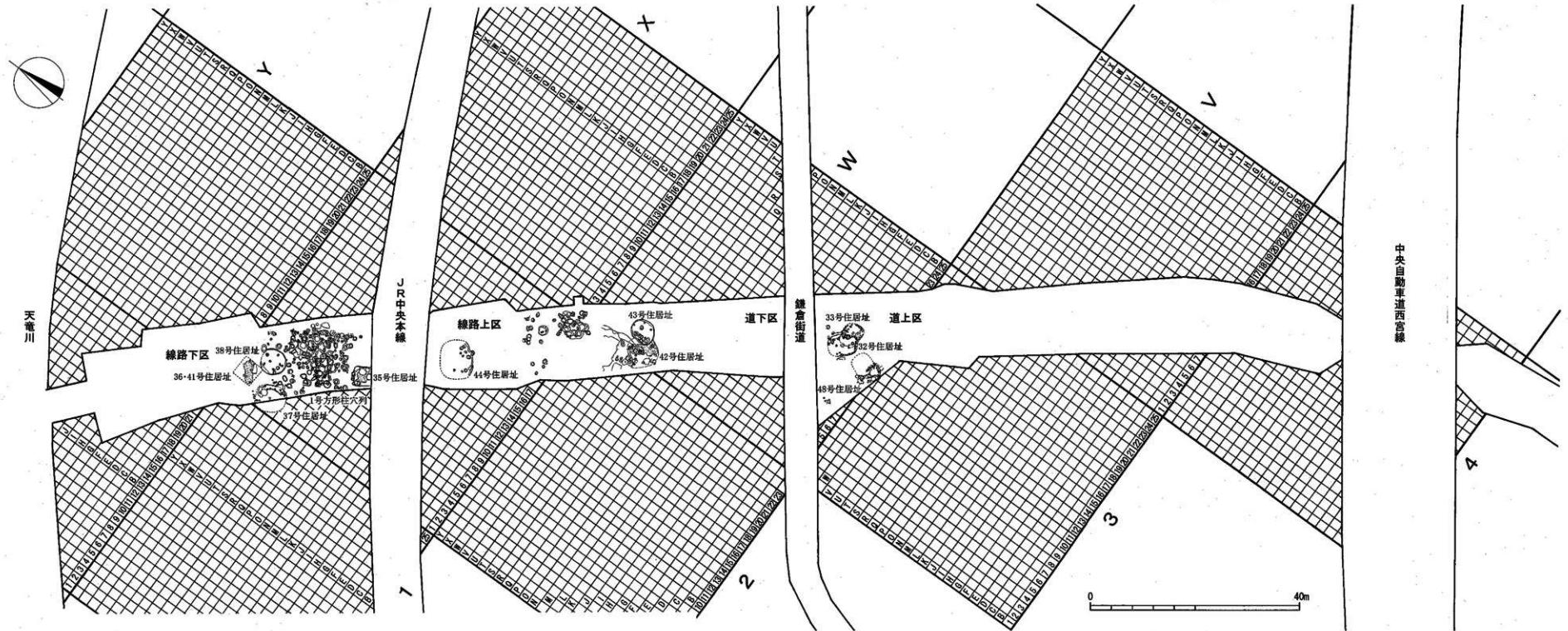
第3図 道上区遺構全体図(1:200)



第4図 線路下区遺構全体図(1:200)



第5図 線路上区遺構全体図 (1:200)



第6図 志平遺跡遺構全体図 (1:600)

不明 25基

- ・方形柱穴列
- 縄文時代 後期 1棟
- ・ロームマウンド 3基
- ・埋甕（黒耀石埋納） 1基

(4) 発見された遺物

第1表 石器の器種別点数

器種	点数	器種	点数	器種	点数
原石	273	石鏃	31	敲石	1
原石碎片	1	石匙 (ob)	8	石皿	12
石核	111	異形石器	1	砥石	14
両極 (ob)	720	石匙	6	台石	8
不定形石器 (ob)	337	打製石斧	124	石柱	2
剥片 (ob)	7,424	横刃形石器	7	石鏟	12
石鏃	171	磨製石斧	41	不定形石器	5
石鏃未成品	112	磨石	23	剥片	5
尖頭器	1	磨石類	25		
		{ 四石			

第2表 石製品・土製品の点数

石製品

器種	点数
円板	2
装身具	4
その他石製品	3

土製品

器種	点数
円板	24
土器片	7
ミニチュア土器	9
土個	1

第3表 土器片・復原土器の点数

出土個所 時期・種別	出土個所 住居跡	方形柱穴列	小堅穴	小穴	ロームマウンド	燒土 (遺構外)	遺構外	表探	合計	備考
縄文時代早期	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1
早期末～前期初頭	1,640	7	123	33	46	32	3,285	206	5,371	
中期初頭	51	-	4	-	-	-	95	9	159	
中期中葉	1,165	19	52	20	31	1	1,201	137	2,826	
中期中葉末～中期後葉初	187	22	48	16	16	-	311	150	780	
中期後葉	837	81	499	30	36	4	2,379	542	3,908	
後期	128	39	125	13	84	-	700	69	1,158	
後期	-	-	-	-	-	-	2	-	2	
弥生時代	23	-	-	-	-	-	34	6	63	
平安時代(土器器・須恵器・灰釉陶器)	282	-	8	1	-	-	283	55	629	
中世	1	-	-	1	-	-	17	7	26	
接合・復原した土器(一括土器)	(68)	(1)	(5)	-	-	-	(10)	-	(84)	
縄文施文(細別不明)	349	43	113	12	24	-	790	125	1,456	
無文()	1,309	171	659	74	218	17	4,282	607	7,427	
底錐()	110	12	43	6	17	-	309	67	564	
不明	65	23	86	15	34	3	580	165	969	
合計	5,737	417	1,760	221	506	67	14,268	2,143	25,109	
尖削器掩蔽個数	59	1	5	-	-	-	1	-	66	

金属製品 刀子 1点

(5) 資料整理の覚書

①注記 —— 遺物・図面

遺跡No. 志平遺跡 32

遺物No. 遺跡No.・調査次数・大区グリッド（または発掘区）・小区グリッド・遺物取上げNo.・出土遺構No. 及び層位

なお、報告書中の一覧表（属性表等）では遺跡No.と次数を省略している場合がある

略号 注記上の略号

グリッド	大区、小区グリッド名をアルファベットと数字で示し、グリッドのGは省略している	
遺構略号	住居址	H
	小堅穴	P(数字の後ろに付す)
	柱穴・小穴	P(数字の前に付す)
	方形柱穴列	方柱
	ロームマウンド	rm
	配石址	ハイ(配)

層位（土層名）略号

遺構内	遺構外	
覆 土	P	黒色土
床面直上	床	黒褐色土
炉(穴)	Fまたは炉	暗褐色土
柱 穴 内	P	褐色土
		茶褐色土
		漸移層
		砂礫層
		表 土
		搅 亂
		溝
		耕 作 土
		コウ

② 石器実測図と属性表

石器全点の実測ができなかったため、遺構内出土について全点の実測及び図の掲載を行った。

図化にあたっては、一部はスケッチグラフを使用し、打製石斧は（株）シン技術コンサルによりスリット写真を撮り実測しているが、その他は手実測である。属性表にみる観察項目、計測値の凡例については「梨久保」第V章第2節（昭和61年3月 岡谷市教育委員会刊）によっている。石皿については「花上寺」第V章第2節（平成8年3月 岡谷市教育委員会刊）に準拠する。

石材の略号は以下のとおりである。

黒耀石 ob	緑色片岩	緑片	硬砂岩	硬砂	玄武岩	玄
チャート ch	緑色岩	緑	砂質片岩	砂変	千枚岩	千

シルト岩	sh	頁岩	頁	花崗岩	花	角閃岩	角
安山岩	安	泥岩	泥	蛇紋岩	蛇	黒色雲母岩	黒雲
凝灰岩	凝	粘板岩	粘	軽石	軽	礫岩	礫
緑色凝灰岩	緑凝	砂岩	砂	滑石	滑	ホルンフェルス	ho

その他、計測値の()は残存値であることを表す。

③ 土器実測図と観察表

土器は、遺構の所属年代を明示する意味で、図化できる程度の遺存状態にあるものは極力実測図化・掲載に努めた。図化にあたっては、文様の拓本による図示、無紋土器の実測の一部を除いて、すべて(株)シン技術コンサルの写真実測(スリット写真トレース)によっている。委託は写真撮影まで、図化はすべて自力で行っている。

文様表現は沈線と隆線の違いを線の太さによって表現している。刺突文は施文具の違いや、刺突と押し引きの差、また、縄文は捺りの違いなどを完全に表現できていないので、観察表の説明を併読されたい。復原部分の文様は、わずかな欠損や文様が明らかな部分は復原トレースしているが、推定部分などはトレースの線を変えている。断面については、推定または部位を変えてつないでいる場合、線を切って示している。

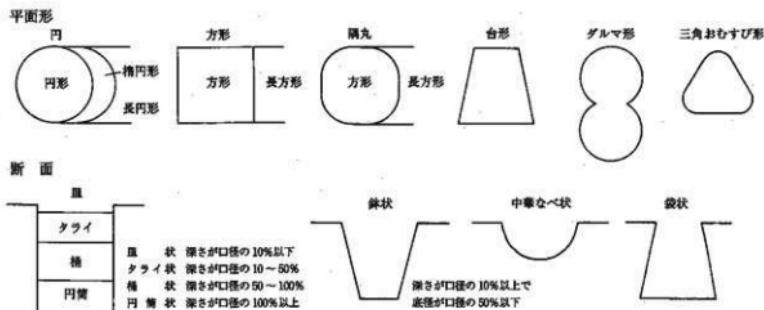
土器の観察表は図版中にそれぞれ掲げた。計測値の()は推定値ないし残存値である。高さは口縁部まで、把手のある場合は頂部までを併記し、口径・底径は最大値である。省略記号は「縦」は縦文時代を意味し、「前」は前期、「中」は中期、「後」は後期の意である。縮尺は図版ごとに明示している。

④ 住居址一覧表

記載内容に特記事項はない。

⑤ 小窓穴一覧表

特殊な例を除いて一覧表にまとめた。数が多いため番号順に並べている。平面形、断面形については分類基準を基本的に「扇平」(昭和49年3月 岡谷市教育委員会刊)、具体的に「梨久保」(前掲)によるが、図示すると第7図のとおりである。



第7図 小窓穴平面形及び断面形の模式図一覧

⑥ 遺物集計表と石器実測図

土器・石器・石製品・土製品について、遺構別点数を一覧にした。

土器破片は縄文時代六期区分にしたがい、各期はさらに細分しているが、これは「梨久保」（前掲）の時期細分に準拠している。なお、完全な判別是不可能であり、また、点数表現が適切でないことも自明の理であって雑駁な数値として、一つの目安であることを断わっておく。

石器については「梨久保」の分類によっている。黒耀石製の石器実測図では、今まで自然面の表現方法として石の質感を出しながら自然面と節理面の2種類を表現したが、加えて、岩脈から遊離して自然の中に置かれた状況での剥離面や、遺跡に持ち込まれた原石にさまざまな要因で衝撃が加わり偶発的に生じた剥離面など、より自然な面（自然剥離面という言葉を使った）については、それが観察して区別可能な限り、石器製作時に生じる剥離作業面とは分けて点描写で表示した。

黒耀石以外の石器においても、自然面と捉えられるものは点描写で表示した。

⑦遺構図

各遺構図中の略号は以下のようにした。柱穴内の数値（マイナス表示）は近くの床面から測った深さを示している。

F	焼土及び炉	■ 焼土
S	石	▨ 貼床
P	土器	
数字 P	小堅穴	
P 数字	柱穴または小穴	

⑧報告書執筆にあたって

- ・本文遺構別の文章中では、一度明示した時代についてはそれ以降時代名を省略している。
- ・住居址は「住」と略している場合が多い。（例 1住→1号住居址）

3. 調査組織

(1) 発掘調査の組織

事務局

教育長	北澤 和男（平成 18～20 年 9 月）	岩下 貞保
教育部長	小林 利男（平成 18～20 年度）	松本 哲郎
生涯学習課長	宮坂 春夫（平成 18・19 年度）	垣内 博樹
副参事	会田 進（平成 18 年度）	
主幹	長崎 元廣（平成 19・20 年度）	小坂 英文
主査	小坂 英文（平成 18～20 年度）	両角加代子
主事	宮坂 昌代（平成 18・19 年度）	小口 啓美
臨時職員	宮坂 美樹（平成 20 年度）	花岡 有香（平成 20 年度）
嘱託職員	森本 肖一	
調査員	山田 武文 河原喜重子	山崎めぐみ 林 賢 賴田美枝子
	服部 久美	
調査補助員	清水 弘子	

作業員	今井 敏男	小口 吉重	新美 淳夫	桃沢 良三	伊藤 雪子
	今井 陽子	鮎沢 功	小池 文代	田中 良作	堀内 恒雄
	田中 稔	宮澤 光男	林 順子	横内 友美	井口 ゆき
	笠原 鈴子	奥石 雅子	奥石 甫	藤森 芳	金原 美佐
	宮坂 清子				

(2) 遺構・遺物整理の作業分担

黒耀石製石器・剥片・未成品・原石	河原喜重子	林 順子
黒耀石製以外の石器・剥片	山田 武文	会田 進
石製品類	山田 武文	
土器	山田 武文	山崎めぐみ 会田 進
	林 順子	伊藤 雪子
土製品	山田 武文	山崎めぐみ
土器復原	宮澤 光男	笠原 鈴子 土師の会
土器実測・トレース	山崎めぐみ	林 順子 横内 友美
石器実測・トレース	河原喜重子	山田 武文 服部 久美
	山崎めぐみ	林 順子 今井 陽子
	横内 友美	
石製品実測・トレース	山田 武文	横内 友美
土製品実測・トレース	山崎めぐみ	横内 友美
遺構図トレース	清水 弘子	
拓本採取	宮坂あさ子	
図版作成	山崎めぐみ	清水 弘子 山田 武文
	今井 陽子	井口 ゆき

(3) 報告書執筆分担(主たる記述)

a 石器・石製品

黒耀石製石器及び未成品・属性表・集計	河原喜重子	林 順子	井口 ゆき
石器(黒耀石製以外)・石製品・属性表・集計	山田 武文	林 順子	井口 ゆき

b 土器・土製品

土器観察表	会田 進	山田 武文
土製品	山田 武文	

c 遺構

住居址・小窓穴・方形柱穴列・ロームマウンド	山田 武文
-----------------------	-------

d 本文執筆

第Ⅰ章 1. 経過	両角加代子
第Ⅰ章 2. 調査の概要、3. 調査組織、第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ章、まとめ	山田 武文

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

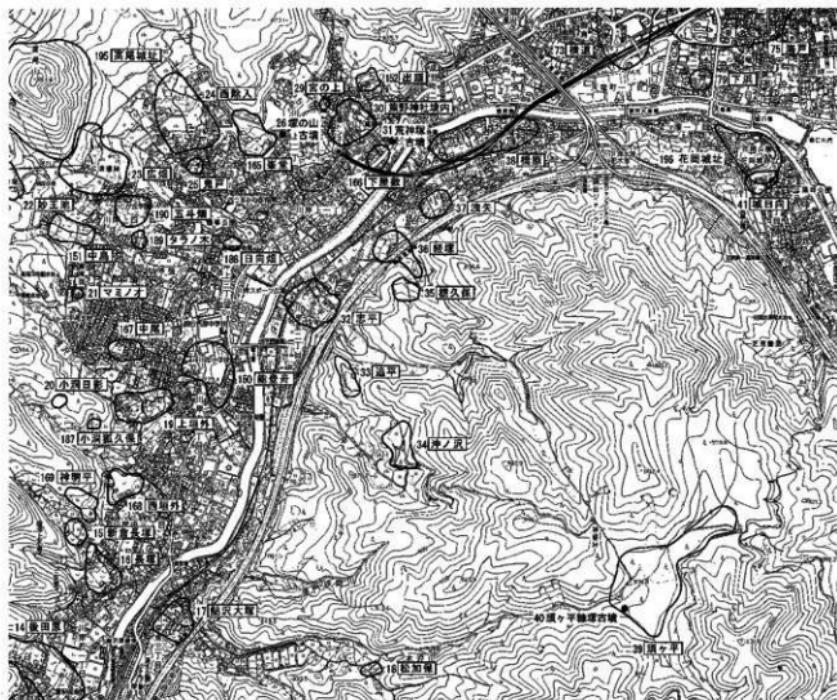
1. 周辺の遺跡

天竜川両岸にあたる川岸地区は、山麓及び低地に多くの遺跡が存在する。

以下に、志平遺跡周辺の遺跡について、各々の概要を述べていく（遺跡番号順）。

19 上垣外遺跡：表面的分布調査では広範囲に遺物があり、量も豊富である。採集資料のうち黒耀石製の小型円形搔器は、旧石器時代及び縄文時代草創期にみられる石器であり、槍先形尖頭器破片や最古の縄文土器の一群ではないかと思われる土器細片など、市内でも最古級の遺跡である可能性がある。また、住居の床と思われる硬いローム面やそこにつぶれていた弥生式土器など、弥生時代の遺跡としても優れた内容をもつ。

24 西除入遺跡：鶴峯丘陵の北東に並んで走る丘陵上に、かなり広範囲にわたって遺物が散布する。昭和42年の分布調査では、短時間に10点ほどの打製石斧と数十点の土器片を採集した。縄文時



第8図 周辺の遺跡 (1:20,000)

代中期中葉と中期初頭の梨久保式土器が確認された。

25 鬼戸遺跡：白山権現神社境内に湧出する泉は、ヨモギ沢を流れ下るが、その最末端部に南面する急傾斜の崖面に鬼戸古窯址が発見された。

昭和 26 年、川岸村誌編集会の企画により 2 基の窯跡が発掘調査された。2 基はほぼ同規模の登り窯であり、その中から多量の遺物を採集している。

このような登り窯で還元炎焼成された土器は「須恵器」と呼ばれ、古くは「朝鮮土器」といわれていたように 5 世紀前後に朝鮮半島から渡來した土器である。律令期には一郡一窯制のもとに各郡に窯が開かれ、鬼戸古窯も同様であったと思われるが、ごく短期間のうちに終焉している。ここで生産された須恵器は、諏訪郡街などに使用された可能性が高い。また、特筆すべきは 2 号窯で出土した円筒埴輪であろう。現在、ここで焼かれた円筒埴輪がどこの古墳に使われたかは定かではない。

鬼戸古窯の存在は、古代律令期の諏訪地域社会の構造に迫る重要な位置を占めている。

26 塚の山古墳：「諏訪史第一巻」に、大正 11 年 11 月地均工事中に石室が発見されたが、直ちに取り崩されたとされている。その際、須恵器と馬具などの副葬品があったようだが、現在その所在はまったく不明である。小円墳であったようだ。

29 宮の上遺跡：土器や黒耀石片などの発見があったが、昭和 42 年の踏査の際には縄文時代中期の藤内式土器破片を採集している。

30 熊野神社境内遺跡：岡谷市出身の考古学者八幡一郎は、諏訪中学在学中に三沢区熊野神社境内で石器と用途不明の石器と土器破片を採集している。大正 6 年 8 月のことである。その後、昭和 29 年に境内整備の際に、縄文時代後期中頃の加曾利 B 式といわれる土器が発見されている。また、写真の一部にオオタニシの貝殻とその上に横たわる鹿と思われる大きな獸骨が写されている。まさに貝塚であるが写真以外には確認できない。

31 荒神塚古墳：藤島社と地元で呼ばれていた小山が本古墳である。明治 14 年に石室が偶然発見され、そのときに出土した遺物のスケッチがこされている。昭和 9 年には県道拡幅により石室は破壊され、遺物は社殿下に石をくりぬいて収納した。昭和 26 年、川岸村誌編集会の手で学術調査が実施された。昭和 60 年には遺物が市に移管されたが、雨水の侵入により鉄製品はほとんど溶解していた。平成 15・16 年に行われた調査では、石室が完全に破壊されていたこと、墳丘のごく一部しかのこっていないこと、被葬者の骨片がわずかにこされていたことが判明した（「荒神塚古墳」平成 17 年岡谷市教育委員会刊）。

33 追平遺跡：志平沢と沖ノ沢に挟まれた山林中の平坦地に立地し、縄文時代中期初頭の遺物が採集されている。次項の沖ノ沢遺跡とともに中期初頭にはこのような小規模短期間の高地性居住地が多い。

34 沖ノ沢遺跡：沖ノ沢の小さな尾根上にあり、縄文時代前期末から中期初頭の遺物が採集されている。昭和 54 年に行われた発掘調査（未報告）では該期の住居址が発見されている。また、これより下方の平坦な尾根では昭和 42 年の分布調査の際、平安時代の石組のカマドと土器が発見されている。山林中にあるこのような集落の在り方は注目される。守屋山系ではこのような事例が次々に発見され、その性格に注目される。

35 標久保遺跡：標高 850m の丘陵上とその斜面に立地し、縄文時代前期末から中期初頭の遺物が

採集されている。

36 經塚遺跡：柄久保沢が造った扇状地上にあり、「諫訪史第一巻」に厚手式土器、石斧、石鎌の発見が記載されている。昭和52・53年に中央自動車道西宮線工事に伴う発掘調査が行われ、そこでは、縄文時代前期末から中期初頭及び晩期の遺物が出土した。主体は晩期であり、当該期と思われる集石遺構も発見されている（「経塚遺跡」（昭和52・53年度 長野県教育委員会））。さらに、平安時代の住居址が2棟発見されているが、おおむね10世紀前後と考えられる。

37 洋矢遺跡：洋矢神社のある山裾の緩斜面からJR中央本線付近が範囲であり、昭和41年に畠から縄文時代中期後葉の土器が発見されている。本遺跡も中央道の調査が行われている。報告書によると、6棟の住居址と3基の土坑及び11ヵ所の焼土遺構が検出されている。縄文時代前期後葉の住居址が1棟と早期末前期初頭の土坑3基、弥生時代は遺物はあるが遺構はなく、平安時代の住居址は5棟確認されている。焼土遺構は（ア）土師器などの焼成土坑、（イ）季節的な屋外共同調理場の二説が併記されている。また、洋矢神社は対岸の藤島社とともに諫訪神の入諱伝説の地であり、洋矢はモリヤにつながり、在地の有力氏族の居住地であった可能性がある。

38 橋原遺跡：諫訪湖を流れ出た天竜川は一旦西方向に流れ、すぐに南西方向に流れを変える。その曲がり角あたりの左岸に天竜川に沿うように、橋原遺跡がある。「諫訪史第一巻」にも諫訪地方の代表的な弥生時代の遺跡として紹介され、古くから知られた遺跡である。現天竜川との比高差は1～5mとごく低く、昭和42年の分布調査では甕形土器や大型船刃石斧などが採集されている。

昭和53年からJR中央本線岡谷塙尻間の複線化工事に伴う発掘調査が始まり昭和55年まで行われ、昭和56年に調査報告書が発刊されている（「橋原遺跡」昭和56年 岡谷市教育委員会刊）。縄文時代中期住居址1棟、弥生時代後期住居址58棟、平安時代から中世住居址9棟のほか、溝状遺構、集石址、土坑などが発見されている。なかでも焼失家屋の59号住居址を中心に2斗6升という多量の「炭化米」が発見されたことは特筆される。このほかに、豆・アワ・エゴマ・アサ・ヒエ・ムギなどの雑穀類も多く見つかっている。信州の山奥にこれほどの集落と炭化米が確認されたのは大きな成果であった。このことから橋原遺跡は全国的に著名な遺跡となった。さらに、集落の構造や住居址内の居住構造についても重要な示唆を与えていている。出土した土器は「橋原式」として弥生時代後期の地域的型式として認められ、その変遷は諫訪地域の土器編年で大きく寄与している。

150 能登舟遺跡、165 峯堂遺跡、166 下屋敷遺跡、188 日向烟遺跡：この4ヵ所の遺跡は近年確認された遺跡である。能登舟遺跡は古墳時代、峯堂遺跡は弥生時代、下屋敷遺跡は縄文時代、日向烟遺跡は平安時代の遺跡と考えられている。

2. 遺跡の位置と立地

岡谷市川岸地区は、諫訪盆地と伊那谷の間約10kmを結ぶ渡り廊下のような地理的な位置を占め、西岸にあたる三沢区高尾山麓にやや開けた景観をもつ丘陵地帯を除くと、おおむね天竜川の岸近くまで急な山腹が迫る一種の地峡のような谷をなしている。その急斜面の山裾には前面を天竜川に接し深くV字形に削られた谷を背負う大小の扇状地及び崖窪、さらに侵食からのこされた丘陵・尾根などが並び、こうした地形の上に多くの遺跡が立地している。

志平遺跡はこの川岸地区橋原区にあり、天竜川左岸に守屋山系から流れ出る志平沢の造った扇状地上に広がり、南東 - 北西約 220m、北東 - 南西約 180m の範囲をもつ。扇状地下端縁辺部は天竜川の岸辺となり侵食され若干の段丘状となるが、遺跡はこの岸辺まで広がりを有する。

諏訪湖を流れ落ち、延々 216km を南下して遠州灘に注ぐ天竜川は、各時代を通じてその下流域の東海地方から先進文化流入の路となってきた。東海地方はさらに畿内文化圏と接しており、畿内→東海→伊那→諏訪という経路が確立されてきた。

志平遺跡は「諏訪史第一巻」に、土器（厚手）、石鏃、打石斧、皮剥の発見地として記述があり、昭和 40 年には鎌倉街道の拡幅の折に発掘調査が行われ、1 棟の弥生時代後期の住居址が見つかっている。昭和 42 年には、岡谷南高等学校地歴部の教材を兼ねて発掘調査が行われた。黒色土の貼床や焼土などが検出され、複数の住居が存在したと想定しているが、数は明確ではない。昭和 52 年には中央自動車道西宮線に伴う発掘調査があり、弥生時代後期の住居址 3 棟が発見されている。ここは扇状地の扇頂部にあたり、志平遺跡では高位にある。昭和 63 年には縄文時代、平安時代それぞれ 1 棟の住居址を検出し、JR 中央本線の志平踏切際にあたる。平成 5 年と 13 年に JR 中央本線の北側で行われた調査では、縄文時代中期初頭から中期中葉、中期後葉、弥生時代後期、平安時代の住居址が 29 棟発見され、その多くが複雑に重なり合っていた。この地点は現在の天竜川から約 40m とごく近く、岸辺に営まれた集落といえよう。

遺物は東海地方の特徴をもつ土器が流入している。縄文時代早期末から前期初頭にかけては特に顕著にみられる。弥生時代にも東海地方の特徴をもつ土器がみられ、平安時代には東海地方の窯産の器がもたらされている。

本遺跡が天竜川の岸辺に発達した集落であることを考へると、天竜川を往来する人々が頻繁に立ち寄るムラの一つであったことが理解できる。

3. 地理・地形の概要

諏訪盆地は、中央大河溝帯西部の盆地列のなかにある。飛騨山脈や赤石山脈の東面する大断層帯は、幾度かの断層運動によってその前面の盆地との間に 2,000m にも及ぶ比高を生じたもので、諏訪盆地はこの大地溝帯の中央に位置し、その低地に水をたたえたものが諏訪湖である。この盆地は霧ヶ峰・八ヶ岳火山群と守屋・入笠山に挟まれた紡錘形の盆地で、その東翼は塩尻峠付近から長地山地、下諏訪町高木、諏訪市大和、茅野市永明寺山に続く断層線と、西翼の塩尻峠付近から間下、花岡、小坂を経て入笠山東斜面、釜無山へ続く断層線と二つの構造線に切られて、その中间が陥没し、両側の山地が隆起してきた地溝帯で形成されたもので、この地溝の北部にたたえられた諏訪湖の北西岸に岡谷市がある。

岡谷市は、地形上北部及び西部の山地、横河川扇状地と湖岸冲積地、天竜川流域低地、湊山地と湖西断層崖地帯等に分けられる。

天竜川右岸の川岸山地は、高尾山から南部辰野町に至る壯年期の地貌する古生代の山地で、小野峠以南の山地は 1,000m 級の中山山地となり、北から大洞沢、後田沢、中沢、大沢などに侵食される。

天竜川沿岸低地は、両岸に約 200 ~ 300m の幅の狭い沖積地を形成し、山麓には小さな崖錐や扇状

地があり、その裾が天竜川の侵食により段丘状に形成された部分がある。

天竜川左岸の山地は渙山地に続き、洩矢、経塚、志平沢、沖ノ沢、本沢などの沢により小さな扇状地を造っている。

4. 志平遺跡の土層

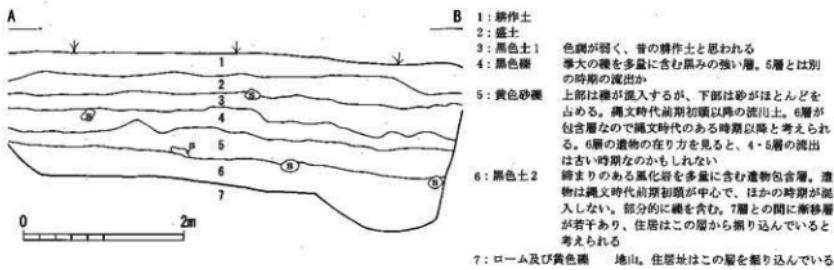
志平沢扇状地には傾斜面に畑地が広がり、現状で水田利用は見られない。

第9図は本遺跡道上区で最も残存良好な土層図である。1・2層は豪雨災害後の復旧による盛土であり、3層は以前の耕作土（時期は特定できない）、4層は拳大の石を多量に含む黒色土、5層は黄色砂礫層で上部は礫が混入し下部は砂層となる。6層は縄文時代前期初頭の遺物を包含する黒色土となり、この層には該期以外の遺物は含まない。

平成21年度の道上区の調査でもこの砂礫層が確認され、この土層中には縄文時代から弥生時代の土器片が混入している。鎌倉街道下の天竜川側にはこの土層がなく、造成による消滅、または流出方向が西であると考えられる。のことから5層の流出は弥生時代後期以後に発生していると捉えられる。

線路上・下区では、耕作土下に大小の石を混入する黒褐色土がほぼ全面にあり、この土層中には縄文時代前期初頭から弥生時代に至る遺物が含まれる。5層も同様に弥生時代の遺物が最も新しいものである。この層には前期初頭の遺物が含まれるが、5層にはないことから同時ではないことは明らかである。

以上のことから、線路上・下区に広がる大小の石を混入する黒褐色土が先に流出し、その後5層が流出したと考えられる。そしてその時期は弥生時代後期以降、平安時代以前と考えるのが妥当ではないか。



第9図 道上区1トレンチ西壁セクション図 (1:60)

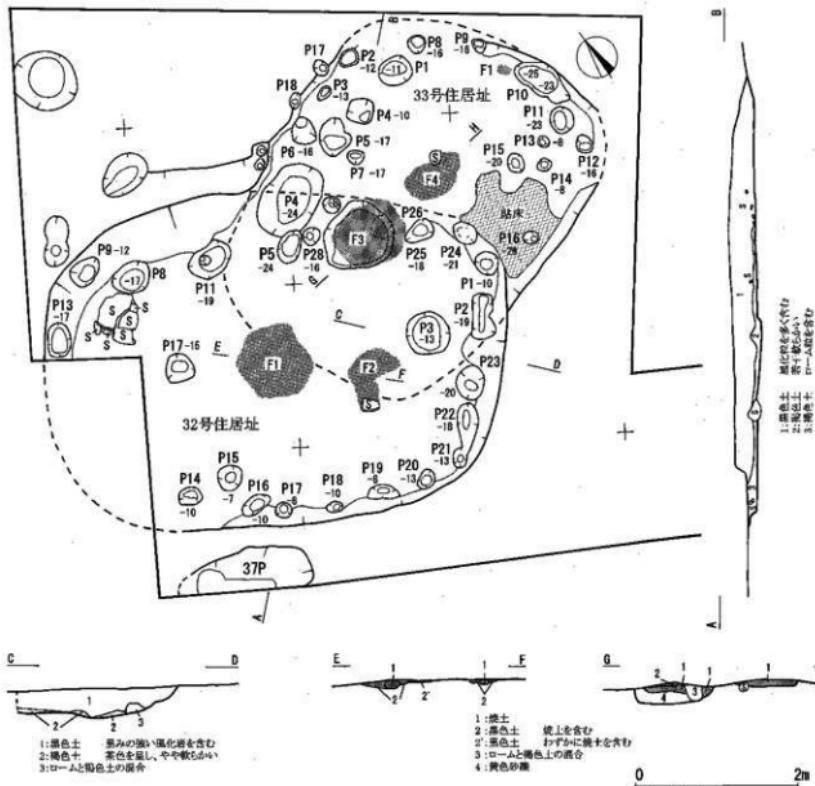
第III章 縄文時代の遺構と遺物

1. 住居址と遺物

(1) 32・33号住居址

調査の経過 道上区に検出された住居址である。黒色土を掘り下げ漸移層に至ったところで、黒色土の落ち込みを確認し、32号住居址とした。当初は東側に落ち込みが延びているように見えたため、不整形の住居を想定したが、掘り進めるうちに別住居であることが判明し、33号住居址とした。

遺構 落ち込みの検出では32・33住の新旧関係はつかめず、後に床面精査において33住の貼床を32住が切っていることが判明した。住居址覆土は黒色土で、東側では小石が混入する。床面精査で



第10図 32・33号住居址実測図 (1:60)

は32住に2ヵ所、33住にも2ヵ所の焼土が検出された。32住の北側隅には平石が置かれていた(第10図)。

32号住居址：部分的に未検出ではあるが、長軸 $5.66 \times$ 短軸 4.08 m の隅丸方形を呈し、長軸はほぼ南東～北西である。前述のように漸移層で検出され、黄色砂礫層を掘り込んで構築している。壁は最大残存高 28 cm を測り、西隅ではほとんど見られなくなる。だらだらとした緩やかな斜面をもつ。33住との重複部分では壁は明確でない。

床はタタキ締められた硬化面ではなく、黄色砂礫層が床と考えられる。南から北へやや下り傾斜をもち、 12 cm の比高差がある。

柱穴はP1～P28まで検出された。このうちP3とP7が住居内側に配置され、主柱穴と考えられる。そのほかは壁際にあり、 $20 \sim 50\text{ cm}$ の口径と $10 \sim 20\text{ cm}$ 前後の深さをもつ壁柱穴が廻る。そのなかで、P26はF3を切って穿たれ、F3が位置的に33住に伴うと考えられることから、32住が33住より新しいとする証左の一つである。

炉と考えられるのはF1、F2の焼土であり、黄色砂礫層を赤化させていることからも地床炉である。複数の炉が同時に存在したかどうかは判明しない。

33号住居址：西側を32住と重複し切られているため規模は明確ではないが、推定東西 $4.6 \times$ 南北 3.6 m を測り、長軸は東西と考えられる。平面形は不整隅丸方形を呈す。壁は南側と北側に掘り込みがあること、東側はわずかにのこる。東及び南壁の傾斜はやや緩やかな状態であり、北壁は比較的良好で最大残存高 23.9 cm を測る。

柱穴はP1～P18を検出し、このうちP1、P15、32住P5、32住P3が主柱穴と思われる。壁際に小穴があり壁柱穴の可能性がある。口径 20 cm 前後で $12 \sim 29\text{ cm}$ の深さをもつ。北壁では壁上に小穴があり、2列の柱穴列が存在している。想像を逞しくすれば、この列の間にナルを挟み壁を構築していたのかもしれない。また建替えの可能性も否定できない。

炉はF3、F4の2ヵ所があり、いずれも地床炉である。F3、F4とも下部の地山黄色砂礫層を赤化させ、ここで火焚きされたことは確実である。32住同様に一棟内に2ヵ所の炉を有している。F4においては、焼土上に発泡した黒耀石の石礫が出土した。獲物の体内に石礫をのこしたまま焼いたのかもしれない。

床は南壁際に、約 $1.2 \times 1.0\text{ m}$ の不整形に貼床が残存する。タタキ状の硬化面はないが、礫を含まないローム土を用いている。そのほかは地山黄色砂礫層となり貼床はのこっていない。

前述のとおり33住の貼床を32住が切り、F3を32住P26が切っていることから、32住新、33住古である。後述する遺物からは、それほど時期差はないと考えられる。

遺物 32・33住からは、東海木島系と含繊維土器の大別2種の土器が存在する。これ以外の土器は出土しておらず、ある時期がそのままパックされた状態であったと考えられる。

32号住居址：32住では第11図1・2が復原図化できた土器である。1は頸部にくびれをもつ深鉢で、口縁と頸部に扁平隆帯を付し、その上に胴上半部に至る櫛歯状条痕を施している。口縁部は突起状の把手を付し、波状口縁となり、胴の張った方形を呈する。器厚は $4 \sim 5\text{ mm}$ を測る。外面には口唇～胴部全体にスス・炭化物の付着がある。2は含繊維の羽状繩文を施した土器で、口唇はわずかに外反し、肥厚はしていない。口唇部から繩文が付され胴下半部に及ぶが、底部の上は無文となる。繩文は大きく菱形構成をとる。LRとRL繩文原体を結節し施文している。施文方向を変えることで羽状を作出している。

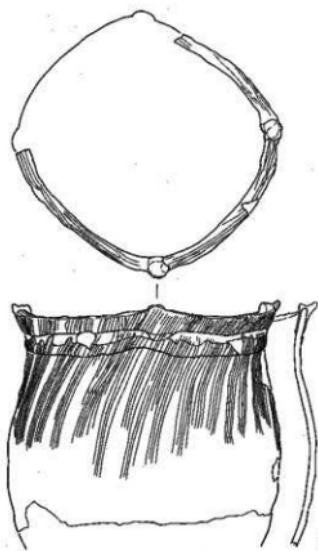


図1：整理No. / 32住・1
遺物 No. / 32.13上 1T1.9.32H フ
出土状態 / 正位で上から押しつぶれ、花びらのよう
時 期 / 漢、前期初頭
高 さ / (19.0 cm, 19.3 cm)
口 径 / 18.7 cm
胎 土 / 粘土、石英を多く含む
整形 内 / 指頭底のこる。粗いナデ
外 / 指頭底のこる。粗いヘラナデ

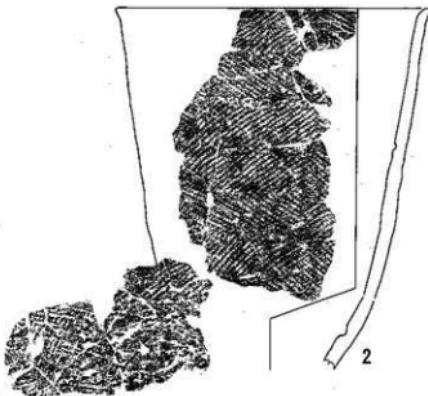


図2：整理No. / 32住・2
遺物 No. / 32.13上 3T1.7.32H ブ
出土状態 / 内面を上に横位でつぶれる
時 期 / 漢、前期初頭
高 さ / (26.7 cm)
口 径 / (25.8 cm)
胎 土 / 粘土を多量に含み、もろい。白色の微細粒が目立つ
整形 内 / ナデ
文 標 / 羽状R L・LRの羽状條文を口縁以下胴下半まで施す。
部分的に菱形構成となる。尖底になると想われ、尖底付
近は無文となる

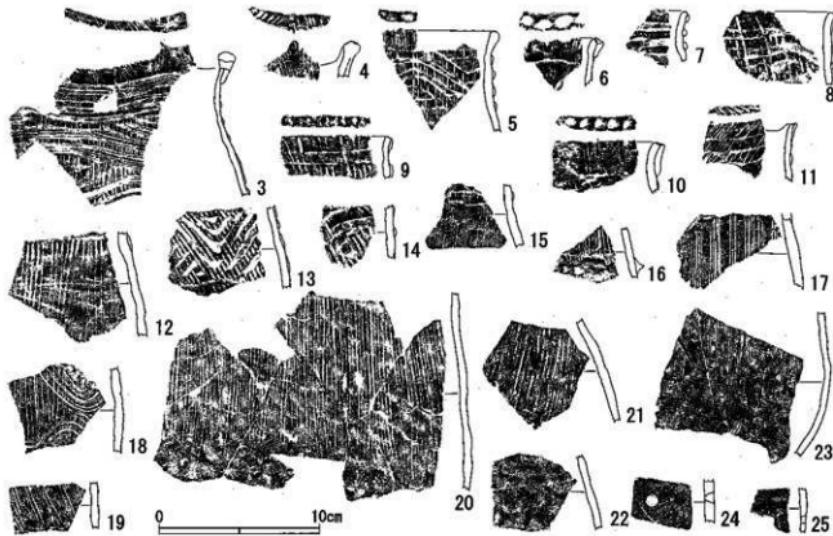
0 10cm

第11図 32号住居址出土土器実測図 (1:4)

東海木島系土器を見ると、頸部にくびれをもつ深鉢が多くを占めている（第12図3～25）。平線と波状線があり、波状線波頂部には小把手が付けられる。口縁～頸部に付けられる隆帯のほとんどは扁平であるが、7のように紐状、16のように断面三角形のものもある。口縁部は指頭押圧、条痕文、爪形刻み、貝殻条痕文などで加飾されている。条痕文はほとんどが撚糸状施文具により付けられるが、貝殻条痕文も少数ある。本址出土土器では条痕文のおおよそ10%が貝殻条痕である。

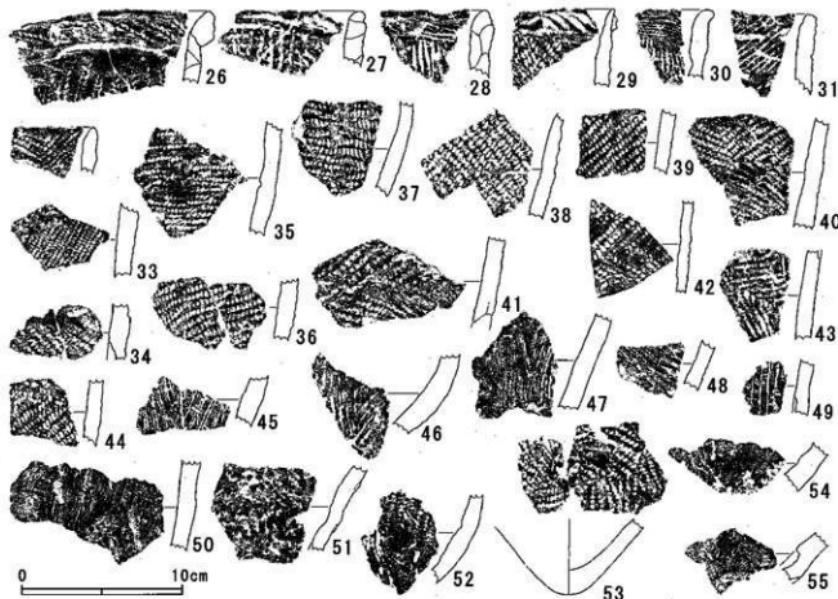
含纖維土器では、縄文と単輪絡条体回転文（撚糸文）、撚糸条痕文がある（第13図26～55）。口縁部はほとんどが平線であり、26、30は肥厚口縁である。26、27、28、30、31は口縁部に横位の撚糸文を付して同じ原体で下方に施文、29は口縁に隆帯を付して隆帯上を刻み、下に縄文を施す。胴部は羽状縄文、RとLを合わせて巻き施文する撚糸文（45、47、48）、撚糸文（43、46）、撚糸条痕文（49）がある。底部は尖底となるものが多いと考えられ、尖底まで全面施文される53と、尖底部は無文となる52、54、55がある。含まれる纖維も量に多少があり、本址では含有量の少ない土器が多い。

石器は石鏃12、石鏃未成品9、石錐3、石匙（ob）1、不定形石器（ob）16、磨製石斧1、砥石1、台石1が出土している（第14図1～第15図24）。これらの石鏃の中に、両側縁部に突起を付けるイカの



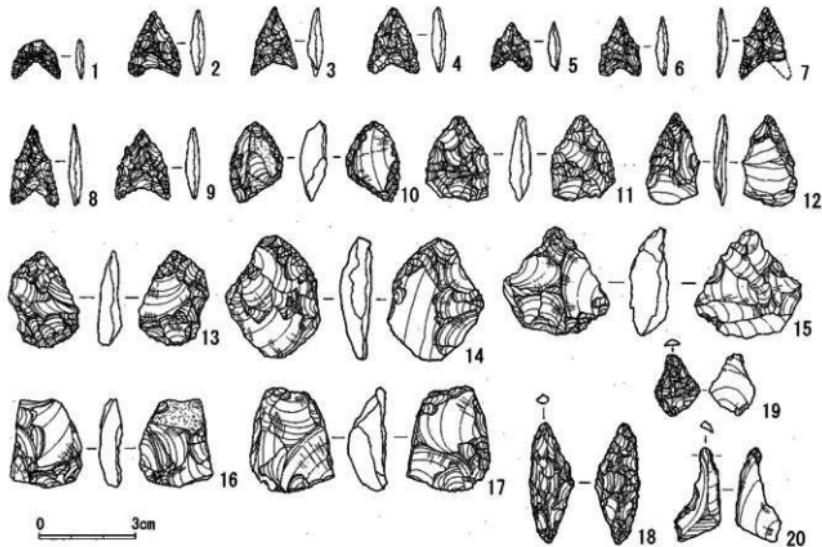
No.	遺物番号	器形	部位	文様構成要素	内面整形	備考
3	32.13上3T0.3.32Hフ	深鉢	口縁～頭部	条痕文+貼付隆帯+刻み、把手	指頭ナデ	雲母含む
4	32.13上T2.24.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯+刻み	指頭ナデ	
5	32.13上3T1.9.32Hフ	深鉢	口縁～頭部	条痕文+貼付隆帯、口唇指頭押圧文	指頭ナデ	雲母細片含む
6	32.13上3T0.5.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇指頭押圧文	指頭ナデ	雲母細片含む
7	32.13上T2.14.32Hフ	深鉢	口縁部	貼付隆帯	指頭	
8	32.13上2T1.10.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇刻み	荒れて不明	貝殻条痕
9	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇貝殻腹縁文	荒れて不明	貝殻条痕
10	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇爪形押引文	指頭ナデ	雲母細片含む
11	32.13上2T2.7.32Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇条痕文	指頭ナデ	雲母微量含む
12	32.13上2T2.7.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文+貼付隆帯	指頭	雲母細片含む
13	32.13上3T1.11.32Hフ	深鉢	胴上半部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	雲母細片含む、貝殻条痕
14	32.13上3T2.5.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文+貼付隆帯	荒れて不明	石英多量に含む
15	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文+貼付隆帯	横ナデ	雲母細片少量、石英多量に含む
16	32.13上2T0.13.32Hフ	深鉢	頭部	条痕文+貼付隆帯	ナデ	断面三角形の隆帯、雲母少量、石英多量に含む
17	32.13上3T1.11.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	横ヘラナデ	雲母細片含む
18	32.13上2T2.29.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文+波状条痕文	指頭ナデ	雲母細片含む、石英多量に含む
19	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	雲母少量含む
20	32.13上2T0.10.32Hフ	深鉢	頭部～胴部	条痕文	指頭、横ヘラナデ	雲母少量含む
21	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	横ヘラナデ	雲母多量に含む
22	32.13上3T1.11.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	雲母多量に含む
23	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭、横ヘラナデ	雲母細片多量に含む。下部、内・外面ともに炭化物付着
24	32.13上2T2.24.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	ヘラナデ	石英多量に含む、補修孔あり
25	32.13上2T2.24.32Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭	雲母微量含む

第12図 32号住居址出土土器拓影図 その1(1:3)



No.	遺物番号	器形	部位	文様構成要素	内面整形	備考
26	32.13上3T2.5.32Hフ	深鉢	口縁部	単輪絞条体(真方向) + 貼付隆帯	ナデ	細い織推少量含む
27	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	口縁部	単輪絞条体	ナデ	織推少量含む
28	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	口縁部	単輪絞条体	ナデ	織推含む
29	32.13上3T2.21.32Hフ	深鉢	口縁部	織文(羽状) + 貼付隆帯 + 押圧刻み	ヘラナデ	織推微量含む
30	32.13上2T2.14.32Hフ	深鉢	口縁部	単輪絞条体	荒れて不明	織推含む
31	32.13上3T1.11.32Hフ	深鉢	口縁部	単輪絞条体	ヨコナデ	織推少量含む
32	32.13上2T2.14.32Hフ	深鉢	口縁部	織文(羽状)	ナデ	織推微量含む
33	32.13上3T1.9.32Hフ	深鉢	頸部	織文(LR) + 貼付隆帯	ナデ	織推少量含む
34	32.13上3T0.5.32Hフ	深鉢	頸部	織文(RL)	ナデ	織推少量含む
35	32.13上3T1.9.32Hフ	深鉢	頸部	織文(LR)	ナデ	織推含む
36	32.13上2T2.7.32Hフ	深鉢	頸部	織文(RL)	ナデ	織推少量含む
37	32.13上2T2.19.32Hフ	深鉢	頸部	織文(LR)	ナデ	細い織推少量含む
38	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)	ナデ	無織推
39	32.13上2T2.14.32Hフ	深鉢	頸部	織文(RL)	荒れて不明	織推微量含む
40	32.13上3T0.5.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)、菱形モチーフ	ナデ	織推含む
41	32.13上2T0.5.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)	ナデ	織推少量含む
42	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)	ヘラナデ	織推微量含む
43	32.13上3T2.5.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)	ナデ	無織推
44	32.13上4T3.4.32Hフ	深鉢	頸部	織文(羽状)	荒れて不明	織推含む
45	32.13上3T0.5.32Hフ	深鉢	頸部	単輪絞条体(真方向)	荒れて不明	織推多量に含む
46	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	胴下半部	単輪絞条体	荒れて不明	織推含む
47	32.13上3T1.9.32Hフ	深鉢	頸部	単輪絞条体(真方向)	ヘラナデ	織推微量含む
48	32.13上2T1.10.32Hフ	深鉢	頸部	単輪絞条体(真方向)	ナデ	織推少量含む
49	32.13上2T3.9.32Hフ	深鉢	頸部	筋条体底痕	荒れて不明	織推含む
50	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴下半部	無文	ナデ	織推少量含む
51	32.13上3T2.5.32Hフ	深鉢	胴下半部	無文	ナデ	織推含む
52	32.13上3T2.13.32Hフ	深鉢	胴下半部	織文	荒れて不明	織推含む
53	32.13上2T2.7.32Hフ	深鉢	尖底部	織文(RL)	ナデ	織推少量含む
54	32.13上3T2.11.32Hフ	深鉢	尖底部	無文	ナデ	織推少量含む
55	32.13上2T3.9.32Hフ	深鉢	尖底部	無文	荒れて不明	織推含む

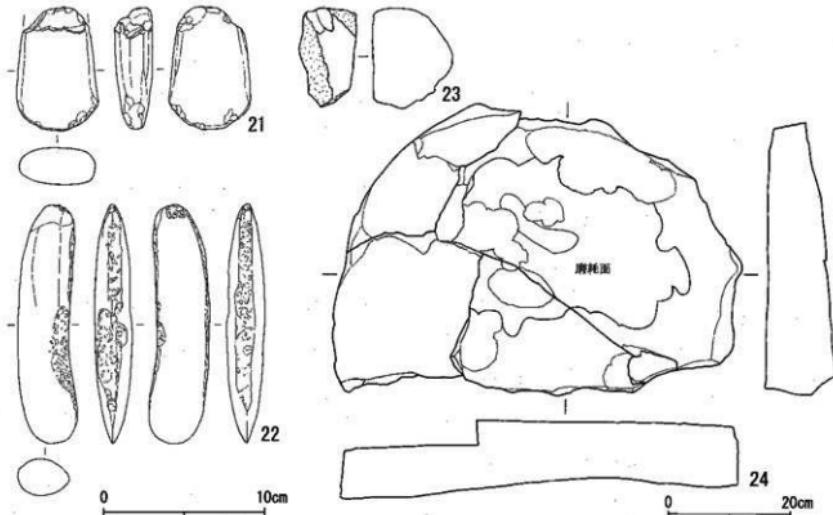
第13図 32号住居址出土土器拓影図 その2 (1:3)



0 3cm

No.	遺物番号	遺物名	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
1	32.13上2T2.9.32H7	石鏃	ob	黒系透明	11.7	14.8	2.6	0.3	先端欠損後再調整
2	32.13上3T2.19.32H7	石鏃	ob	茶系透明	19.4	15.9	3.9	(0.9)	
3	32.13上3T2.9.32H7	石鏃	ob	茶系透明	20.9	14.2	4.1	0.7	左右非対称
4	32.13上3T1.13.32H7	石鏃	ob	茶系透明	20.0	15.6	4.0	0.9	
5	32.13上2T3.6.32H7	石鏃	ob	茶系透明	14.4	12.5	3.5	0.4	両側縁に突起あり
6	32.13上2T2.21.32H7	石鏃	ob	茶系透明	(17.7)	13.1	4.0	(0.6)	両側縁に突起あり
7	32.13上2T2.12.32H7	石鏃	ob	茶系透明	21.8	(14.6)	2.9	(0.5)	一側縁からの剥離により脚部欠損。 側縁に突起あり
8	32.13上2T3.4.32H7	石鏃	ob	茶系透明	24.3	14.9	3.9	0.8	両側縁に突起あり
9	32.13上3T1.12.32H7	石鏃	ch	-	21.6	16.6	3.9	1.1	一側縁に2ヵ所突起あり
10	32.13上2T0.15.32H7	石鏃	ob	茶系透明	24.9	16.6	7.5	2.6	周縁のみ調整
11	32.13上2T1.23.32H7	石鏃	ob	茶系透明	26.0	19.3	6.7	2.5	
12	32.13上3T2.23.32H7	石鏃	ch	-	27.9	(16.1)	4.0	(1.5)	
13	32.13上3T2.18.32H7	石鏃	ob	黒系透明	29.0	21.9	7.0	3.1	
14	32.13上2T2.34.32H7	石鏃	ob	茶系透明	37.3	27.9	9.5	8.1	
15	32.13上3T0.12.32H7	石鏃	ob	茶系透明	33.6	32.5	10.9	8.1	
16	32.13上1T1.10.32H7未	石鏃	ob	茶系透明	27.0	23.0	6.5	4.6	
17	32.13上2T2.41.32H7	石鏃	ob	茶系透明	31.8	24.5	11.3	8.0	
18	32.13上2T2.6.32H7	石鏃	ch	-	37.0	13.3	9.6	4.2	紡錘形状
19	32.13上3T2.32.32H7	石鏃	ob	茶系透明	18.5	13.1	5.2	0.9	タテ長剣片の先端を利用。片面のみ調整
20	32.13上2T2.33.32H7	石鏃	ob	茶系透明	27.2	16.8	5.9	1.3	ヨコ長剣片の先端部分をわずかに調整

第14図 32号住居址出土石器実測図 その1 (1:1.5)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備考
21	32.13上3T0.7.32H7	磨製石斧	I	蛇	74.0	50.0	18.0	97.9	刃部ツブレ。使用か製作途中か?
22	32.13上1T1.4#7	磨製石斧	IV	綠片	146.0	32.0	22.0	175.0	褐色土層中だが32住に伴う遺物
23	32.13上3T0.9.32H7	砾石		砂	(61.0)	(36.0)	(49.0)	(90.7)	底面一面。破片
24	32.13上2T0.12.32H7	台石	安		654.0	467.0	130.0		

第15図 32号住居址出土石器実測図 その2 (1:3、24は1:8)

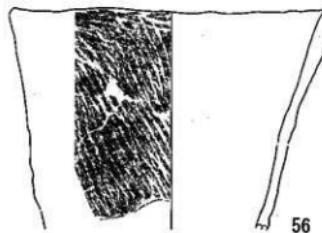
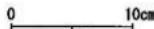
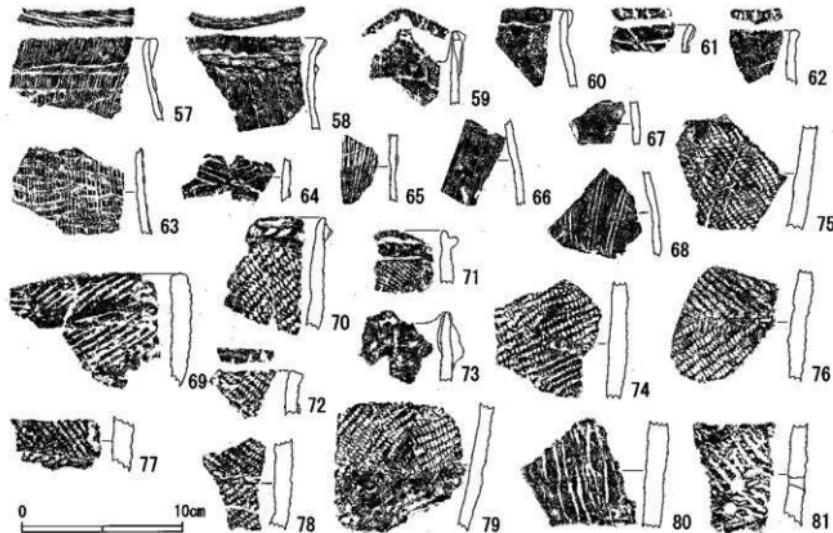


図 56：整理No. / 33住 - 1
 遺物 No. / 32.13 上.4#2.5.33H7 フ
 出土状態 / 床面上に表面を上につぶれる
 時 期 / 縄、前期初頭
 高 さ / (18.2 cm)
 口 径 / (25.5 cm)
 質 土 / 細砂、灰白色粒多く、石英・長石を含む。繊維を含む
 形 独 / 内 / ナデ、口唇部へラナゲがみられる
 文 様 / 口縁にやや斜位の擦糸文、以下は斜位の擦糸文

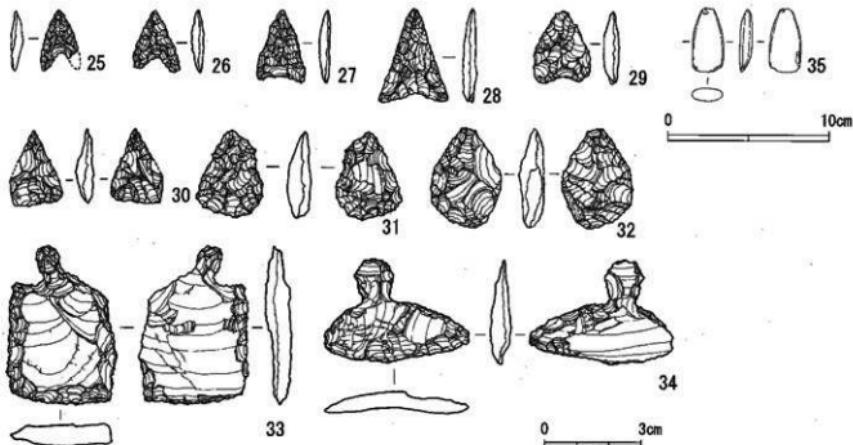


第16図 33号住居址出土土器実測図 (1:4)



No.	遺物番号	器形	部位	文様構成要素	内面整形	備考
57	32.13上4T2.1クロ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	雲母細片含む
58	32.13上3T3.4クロ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭、ヘラナデ	雲母細片含む、断面三角形の隙帶
59	32.13上4T3.1クロ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇貝殻縫縁文	指頭ナデ	雲母細片含む、隆帯一部剥落
60	32.13上3T3.1クロ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	雲母細片含む、隆帯剥落あり
61	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯、口唇貝殻縫縁文	指頭ナデ	雲母細片含む
62	32.13上3T3.1クロ	深鉢	口縁部	無文、口唇刻み	ヘラナデ	雲母含む
63	32.13上3T3.8.33Hフ	深鉢	頸部	条痕文+貼付隆帯	指頭、ヘラナデ	雲母含む
64	32.13上3T3.12.33Hフ	深鉢	胴上半部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	雲母含む、
65	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	胴上半部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	隆帯上スレ剥落
66	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭、ヘラナデ	雲母細片含む
67	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	胴部	条痕文+曲沈線文	指頭ナデ	雲母細片含む
68	32.13上3T3.12.33Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	雲母多量に含む、貝殻条痕
69	32.13上3T3.4クロ	深鉢	口縁部	絡条体条痕文	荒れて不明	織維多量に含む
70	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	口縁部	繩文(LR)+貼付隆帯+刻み	ナデ	織維少量含む
71	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	口縁部	繩文(RL)+貼付隆帯+刻み	ヘラナデ	織維少量含む
72	32.13上3T3.1クロ	深鉢	口縁部	繩文(RL)+貼付隆帯+刻み	ナデ	織維少量含む
73	32.13上4T2.1クロ	深鉢	口縁部	繩文(LR)+貼付隆帯	ヘラナデ	無織維、雲母、石英多量に含む
74	32.13上3T3.8.33Hフ	深鉢	胴部	繩文(LR)	ナデ	織維少量含む
75	32.13上4T2.5.33Hフ	深鉢	胴部	繩文(RL)	指頭ナデ	織維少量含む
76	32.13上3T3.4クロ	深鉢	胴部	繩文(羽状)	荒れて不明	織維多量に含む
77	32.13上3T3.1クロ	深鉢	胴部	繩文(羽状)	ナデ	織維少量含む
78	32.13上3T3.1クロ	深鉢	胴部	繩文(羽状)	荒れて不明	織維や多量に含む
79	32.13上3T3.10.33Hフ	深鉢	胴下半部	繩文(羽状)	ナデ	織維少量含む
80	32.13上3T3.1クロ	深鉢	胴部	絡条体条痕文	ナデ	織維や多量に含む
81	32.13上4T3.1クロ	深鉢	胴部	燃条文(單軸絡条体)	荒れて不明	補修孔貫通1、未貫通1あり

第17図 33号住居址出土土器拓影図 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	総分類	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
25	32.13上372.1.33H7	石鏃	ob	茶系不透明	18.5	(11.1)	3.9	(0.5)		
26	32.13上372.10.33H7	石鏃	ob	茶系透明	19.2	13.9	4.0	0.7	脚部左右非対称	
27	32.13上372.20.33H7	石鏃	ob	茶系透明	21.6	14.8	3.2	0.7	両側縁が若干屈曲する	
28	32.13上372.2.33H7	石鏃	ch	-	28.5	21.1	3.9	1.8		
29	32.13上472.4.33H7	石鏃	ob	茶系透明	21.8	17.2	4.8	1.5		
30	32.13上373.3.33H7	石鏃	ob	茶系透明	22.8	(15.7)	5.6	(1.1)	一面面未調整	
31	32.13上372.15.33H7	石鏃	ob	茶系透明	26.2	20.1	7.6	3.3		
32	32.13上372.16.33H7	石鏃	ch	-	30.1	22.0	8.0	5.5		
33	32.13上373.7.33H7	石匙	ch	-	51.5	36.5	7.7	12.0	タテ長形状	
34	32.13上372.8.33H7	石匙	真	-	31.8	44.0	5.2	5.7	ヨコ長形状	
35	上371.20.33H732.13	磨製石斧	III	綠片	39.0	20.0	7.0	7.9		

第18図 33号住居址出土石器実測図 (1:1.5, 35は1:3)

ような形状をしたものが多く存在する。この時代の一つの特徴である可能性がある。

台石(24)は住居北東部に平坦面を上にして、ほぼ水平に置かれていた。部分的ではあるが磨耗面がある。

33号住居址:復原図化できた土器は1点である(第16図56)。口縁がやや厚めになり、横位の撚糸文が付され、同一原体により縦方向の撚糸文が施される。纖維量は多く、特に内面は荒れている。逆三角形を呈す深鉢であろう。

33号の出土土器は32号と大差なく、東海木島系土器と含纖維土器である(第17図57~81)。木島系土器は平縁と波状縁があり、波状縁の波頂部には小把手が付される。口唇部には条痕文と貝殻腹縫文が付けられる。口縁部から頸部付近にかけ扁平隆帯が付けられ、その上を条痕文が施される。条痕文は櫛齒状施文具と貝殻の2種類があり、32号と同様、貝殻条痕の比率は10%程度である。

含纖維土器は口縁部に横位隆帯を付す70、71、72があり、73は垂下する縦小隆帯が付けられる。69は撚糸文、胴部破片は羽状繩文と斜繩文、撚糸文、撚糸条痕文が施され、胴下部付近が無文になる79もある。含纖維量は多少の差はあるが、全体に少量のものが多い。73は無纖維で、雲母・石英

を多量に含んでいる。

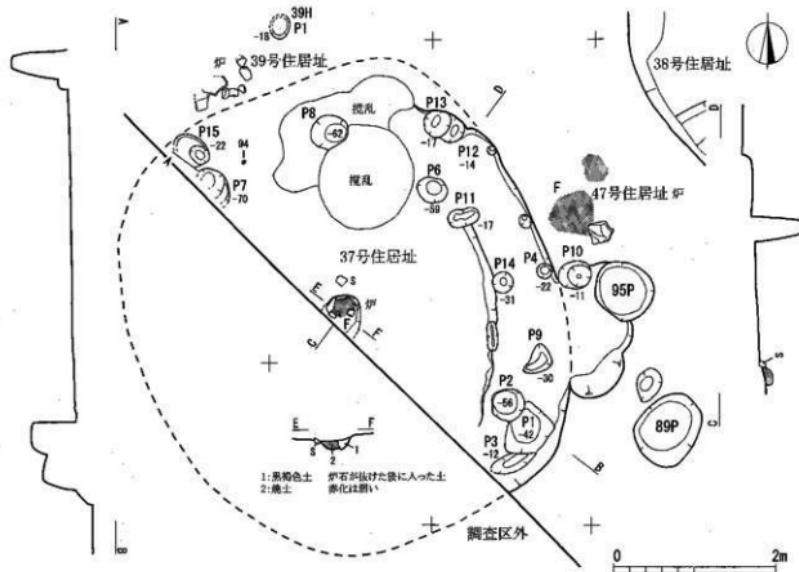
石器は石鎚5、石鎚未成品3、石匙(ob)2、磨製石斧1が出土している(第18図25~35)。本址にはF4の焼土直上に黒耀石製の石鎚が出土し、被熱して発泡していた。黒耀石が1,000°Cの熱で発泡することは知られている。どのような状況でこのような結果が発生したのかは不明であるが珍品である。磨製石斧は小型品の片刃である。

32・33住の遺物からは大きな違いは読み取れず、明確な時期差を捉えきれない。重複関係から32住が新しいことは明確であるが、その時期差もわずかであろう。

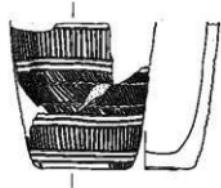
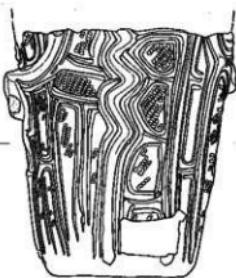
32・33住ともに縄文時代前期初頭に属すると考えられる。

(2) 37・39号住居址

調査の経過 線路下区北端付近の西側に半分ほど検出され、用地外へと続いている。遺構検出段階で褐色土とローム土の斑状である漸移層面に黒褐色土の落ち込みを確認し、37号住居址とした。遺構検出中に本址北側に径1.2mの穴を検出し、その中は花崗岩の丸い石が詰められていた。地主さんの話では雨水の排水施設ということであった。この排水施設に南西から排水路が敷設され、人頭大の石が並べられていたが、多くの土器片(一括土器)がこの石の間、または石につぶされた状態で出土した。これらはほぼ住居址中央にあたり、炉上に位置する。覆土は南に厚く、壁のこりも良いが、北側に行くにしたがいほとんど残存しない。この37号北側の調査区北西端に石匂炉が検出され39号住居址とした。若干の床と柱穴が検出されたが、平面形などは不明である。



第19図 37・39号住居址実測図 (1:60)



83



82

図 82 : 整理 No. / 37 住 - 7

遺物 No. / 32.13X2U2.48.37H フ

出土状態 / 床上に横位でつぶれる

時 期 / 晩、中期中葉初

高さ / (20.9 cm)

胎 土 / 含有物多く、雲母細片目立つ。やや脆い

整形 内 / 横ナデ痕がのこる

文様 / 縦区画文構成。施行垂下する隆筋と、部縦線横巻文
で不規則に分割。その間を小さな区画で埋めるバネ
ル文で飾る。小区画内は純文 R.L.、沈像は半截竹管
状工具で描く

0

10cm



84

図 84 : 整理 No. / 37 住 - 2

遺物 No. / 32.13X2U2.28.37H フ

出土状態 / 床上に横位でつぶれる

時 期 / 晩、中期中葉初～IV

高さ / (36.2 cm, 37.5 cm)

口径 / (27.9 cm)

胎 土 / 白色・黒色・雲母を多く含む

整形 内 / 横ナデ痕

外 / 回がのこる

文様 / 口縁部4単位の尖起が付き、押疊压痕を垂下。半截竹管状
工具で描文、頸部下に横状把手状の表現が1カ所に見られる。
基本文様構成は頸部のV字状毫縫を除くと基本的に共
通するが、かなり粗い施文である。施文順序は上から下へ
面ごとに文様単位ごとにしているか。地文純文は R.L.



85

図 85 : 整理 No. / 37 住 - 11

遺物 No. / 32.13X2U3.14.37H フ

出土状態 / 膜土中に散在 時 期 / 晩、中期

高さ / (8.8 cm 口径 / (22.8 cm)

胎 土 / 白色・赤色・灰色等の揮砂を多く含む

み黒色ないし墨褐色で堅壁

整形 内 / なめらか 外 / ていねいなナダ

文様 / 無文

第 20 図 37 号住居址出土土器実測図 その 1 (1:4)

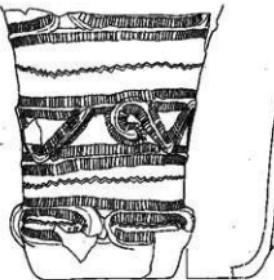


図 86：整理No. / 37 住 - 3
遺物 No. / 32.13X2U2.29.37H フ
出土状態 / 床上に横置で立ぶる
時 期 / 猥、中期中葉Ⅲ
高さ / (22.6 cm)
胎 土 / 含有物多量、白色の砂粒目立つ
整形 内 / ナデ窓をのこす
外 / ナデ、無文等のめらか
文 標 / 横格区画文の文様構成。腹部に一条の
ヘラ引き織痕状文帯、肩上部三角形
区画文帯、肩下部は斜巻文文帯を挟
んで長格円区画文。隣帶とキャタピ
ラ紋明文で描く
備 考 / 小ゼ形の櫛子仕面か、3カ所ほど認
められる

86

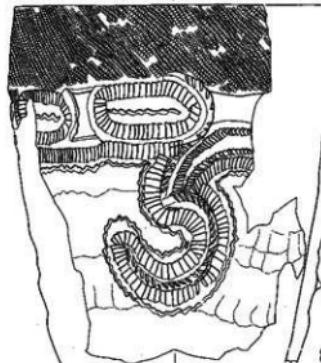


図 87：整理No. / 37 住 - 5
遺物 No. / 32.13X2U2.31.37H フ
出土状態 / 石槽に底位
時 期 / 猥、中期中葉Ⅲ
高さ / (29.4 cm)
径 径 / (26.6 cm)
胎 土 / 含有物多量、白色の大き
な砂粒が目立つ
整形 内 / ナデ
外 / 粗く指圧窓をのこす
文 標 / 口縁は圓文L。
肩部は
抽象文の一部か、キャタ
ピラ状明文、三角押圧で
浙く。織痕文はヘラ描

87

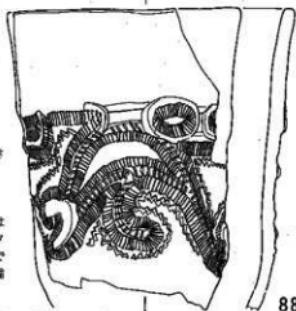


図 88：整理No. / 37 住 - 6
遺物 No. / 32.13X2U2.35.37H フ
出土状態 / 覆土中
時 期 / 猥、中期中葉Ⅲ
高さ / (24.5 cm) 口 径 / (19.0 cm)
胎 土 / 白色の細砂がわずかに目立つ程度で含有物は少
ない

整形内外 / ナデ、なめらか
文 標 / 口縁は圓文Lの肩上部に抽象文を付す。頸～
肩部の区画は土の厚みに凹凸を付ける円区
画文を配す。抽象文の綴るような織痕文は平
刀のようなヘラの押圧で描いているか

備 考 / 肩下部内面に炭化植物く付着

88

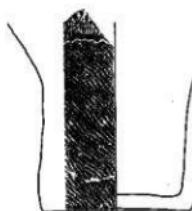


図 89：整理No. / 37 住 - 8
遺物 No. / 32.13X2U2.52.37H フ
出土状態 / 床上に載在
時 期 / 猥、中期中葉
高さ / (15.6 cm)
胎 土 / 白色の細砂を多く含み、
赤褐色で眺め
整形 内 / 横ナデ
外 / 頸部に波状のヘラ織沈
線とキャタピラ文、以
下隕文RLを描す
備 考 / 肩下部内面に薄く炭化
物付着

89



図 90：整理No. / 37 住 - 9
遺物 No. / 32.13X2U3.47.37H フ
出土状態 / 覆土中
時 期 / 猥、中期
高さ / (7.0 cm)
胎 土 / 灰色、白色等の細砂を含
み黄褐色で堅硬
文 標 / 肩部をのこすのみ、圓文
RL

90

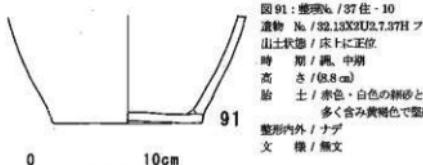


図 91：整理No. / 37 住 - 10
遺物 No. / 32.13X2U3.7.37H フ
出土状態 / 床上に正位
時 期 / 猥、中期
高さ / (8.8 cm)
胎 土 / 赤色・白色の細砂と雲母を
多く含み赤褐色で堅歯
整形内外 / ナデ
文 標 / 無文

0 10cm



図 92：整理No. / 37 住 - 15
遺物 No. / 32.13X2U3.38.37H フ
出土状態 / 覆土中
時 期 / 猥、中期中葉
高さ / (3.4 cm)
胎 土 / 細砂少なく、灰白色が多い。
長石を含む
整形 内 / ややていねいなナデ
文 標 / 圓文LRを横位に転がす

0 5cm

第 21 図 37 号住居址出土土器実測図 その 2 (1:4, 92 は 1:2)

遺構 37住は39住を切って構築されていた(第19図)。

37号住居址: 住居址の約2分の1の調査であり全体を把握してはいないが、炉が検出されていることから、推定 5.8×5.2 m の規模を有し、平面形状は隅の大きく丸い隅丸方形を呈し、胴もやや張る。長軸は N - 26° - W である。

壁は南側で残存高 27.5 cm を測り、ローム層を掘り込み崩れが少なく良好にのこっていた。東～北側にかけてはわずかに段差が付く程度の壁をのこすだけである。南壁際には P3 とした小穴があるが、これが周溝の残存と考えられ、幅 20 cm、深さ 12 cm を測る。

屋外に 9SP を包括する張り出しの回みがあり、これと P9、P14 とで入口部を形成していた可能性がある。

床はローム土で硬化面はない。東壁内側に P11 から P2 を通り南へ延びる段差があり、最大比高差は 7 cm ある。入口部付近にあたる位置にあるが、これをベッド状とみるとか、建直しとみるとかは判明しない。柱穴の在り方から、小さなベッド状構造とみるべきかもしれない。

柱穴は P1 ~ P15 を検出している。主柱穴は P2、P6、P8、P7 で、配置から 6 本柱と考えられる。これらは口径約 40 cm、深さ 56 ~ 70 cm を測る。P9、P14 は入口施設、P15、P3、P12、P4 などは壁際の小柱穴、P1 は本址の柱穴ではないと考えられる。

炉は石囲炉で住居址のほぼ中央に位置すると思われる。長軸 $40 \times$ 短軸 30 cm の橢円形を呈し、長さ 20 cm 前後の石の平坦面を上に使用していた。炉内は赤化の弱い焼土がやや厚くのこり、厚さは 10 cm ほどある。南側に炉石の抜けた跡が見られた。

37住と後に記述する 38住周辺には焼土が多く検出され、それらが炉と推測されることから、複数の住居址が切り合っていると考えられる。37・38住以外は平面形が判明せず、一部新旧関係が把握できないが、おおむね次のとおりと考える。

37住と 39住は、39住を 37住が切っていることから、37住が新しく 39住が古い。45住と 47住は

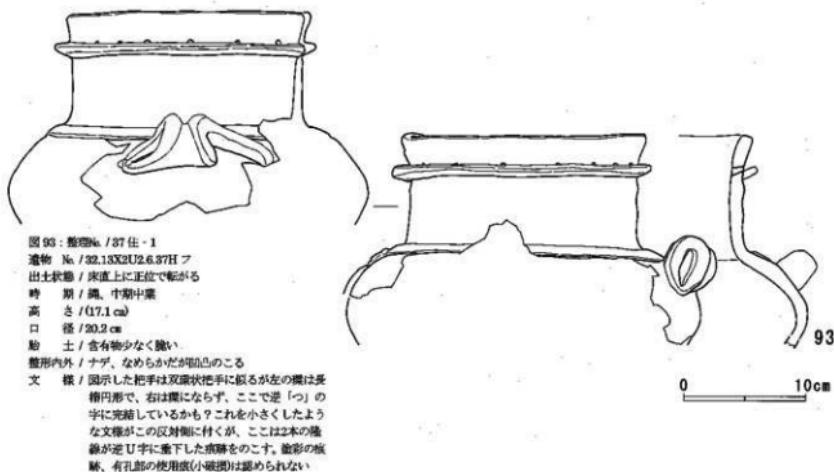
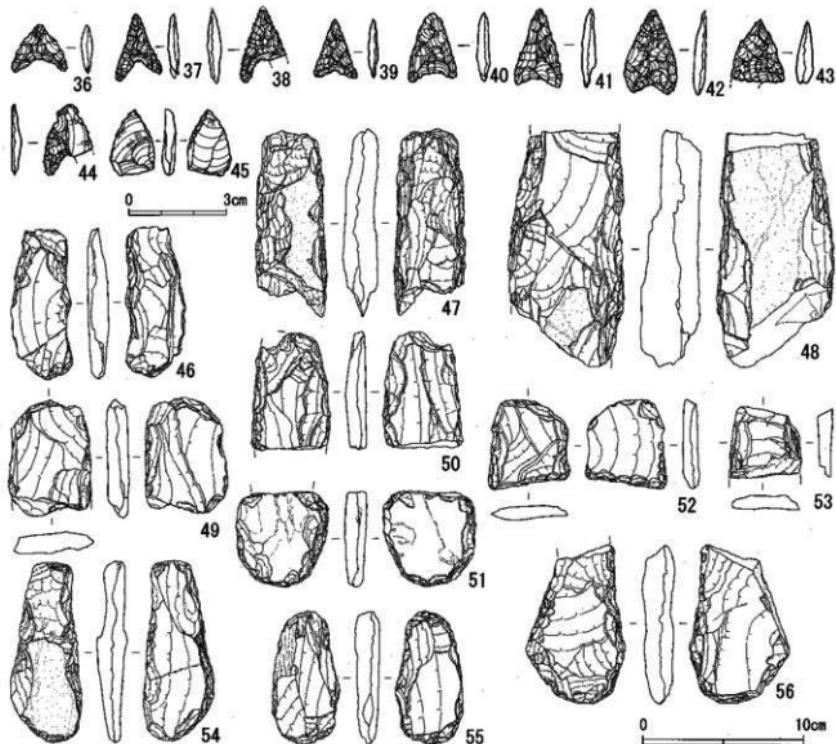


図 93: 棚塗 No. 37住・1
遺物 No. 32.13X2U2.637H フ
出土状態 / 床面上に正位で転がる
時 期 / 鎌、中期中葉
高 さ / 0.71 cm
口 径 / 20.3 cm
動 土 / 合有物少なく無い。
盤形内外 / ナギ、なめらかだが凹凸のこる
文 横 / 図示した把手は双頭状把手に似るが左の環は長
輪円形で、右は圓にならず、ここで逆「つ」の
字に完結しているかも? これを小さくしたよう
な文様がこの反対側に付くが、ここは日本の陰
線が這う字に重下した痕跡をのこす。藍色の板
跡、有孔部の使用痕(小破損)は認められない

第 22 図 37号住居址出土土器実測図 その 3 (1:4)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
36	X2U3.17.37H7	石鏟	ob	茶系透明	14.0	16.6	3.5	0.5		
37	X2U2.27.37H7	石鏟	ob	茶系透明	20.0	14.8	3.4	0.5	脚部左右非対称	
38	X2U2.8.37H7	石鏟	ob	黒系不透明	22.2	(14.3)	4.0	(0.7)		
39	X2U2.21.37H7	石鏟	ob	茶系透明	17.6	13.3	3.0	0.5		
40	X2U2.20.37H7	石鏟	ob	茶系透明	20.8	14.3	3.7	0.8		
41	X2U2.42.37HF	石鏟	ch	-	23.5	14.5	4.0	1.0		
42	X2V2.20.37H7	石鏟	ob	茶系透明	25.7	16.0	3.3	1.2		
43	X2V2.10.37H7	石鏟	ob	茶系透明	(19.5)	16.2	4.9	(1.2)		
44	X2T3.30.37H7	石鏟	ob	茶系透明	21.9	(15.1)	22.7	(0.6)	先端丸い。未成品か?(?)。側縫痕有	
45	X2U3.60.37H7	石鏟	ob	茶系透明	20.3	13.3	3.6	1.0		
46	X2U3.25.37H7	打製石斧	I	泥	92.4	36.6	12.0	50.8	全体バナ形を呈する	
47	X2U2.20.37H7	打製石斧	I	綠片	(14.9)	43.0	20.3	(117.5)	刃部欠損	
48	X2U3.23.37H7	打製石斧	I	綠片	(142.7)	70.2	34.3	(415.4)	中央部大きめに残存	
49	X2U2.46.37H7	打製石斧	I	砂	(69.8)	49.9	11.5	(64.5)		
50	X2U2.19.37H7	打製石斧	I	頁	(71.4)	47.9	11.1	(53.1)		
51	X2U3.16.37H7	打製石斧	(I)	粘	(61.1)	55.7	11.4	(56.9)	頭部か刃部か。	
52	X2U2.38.37H7	打製石斧	(I)	砂	(54.2)	48.4	8.0	(31.3)	短辺刃部調整が半分ある	
53	X2U2.11.37H7	打製石斧	(I)	sh	(42.9)	(42.6)	(8.9)	(20.9)		
54	X2T2.1.37H7	打製石斧	II	綠片	108.8	43.1	15.0	90.7		
55	X2V2.7.37H7	打製石斧	II	sh	81.0	42.3	13.6	59.4		
56	X2U2.33.37H7	打製石斧	III	砂	(97.2)	61.7	19.0	(126.3)	頭部欠損	

第23図 37号住居址出土石器実測図 その1 (36~45は1:1.5、46~56は1:3)

地床炉と考えられ、37住及び38住に切られていることから、37・38住が新しく、45・47住が古いと考えられる。これらを整理すると45・47住が最も古く、次に39住、そして37・38住の順で新しくなると思われる。

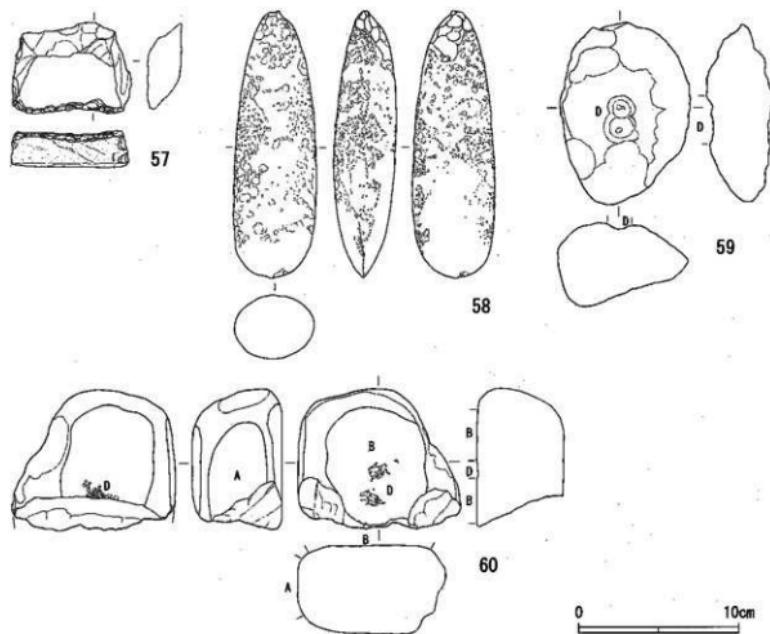
39号住居址：炉と柱穴、若干の床が発見された程度で、規模、壁などは不明である。

床はローム土でわずかに縮まりがあるが、カリカリとした硬化面はなかった。この床は37住に切られている。

柱穴はP1があるが、主柱穴かどうかははっきりしない。

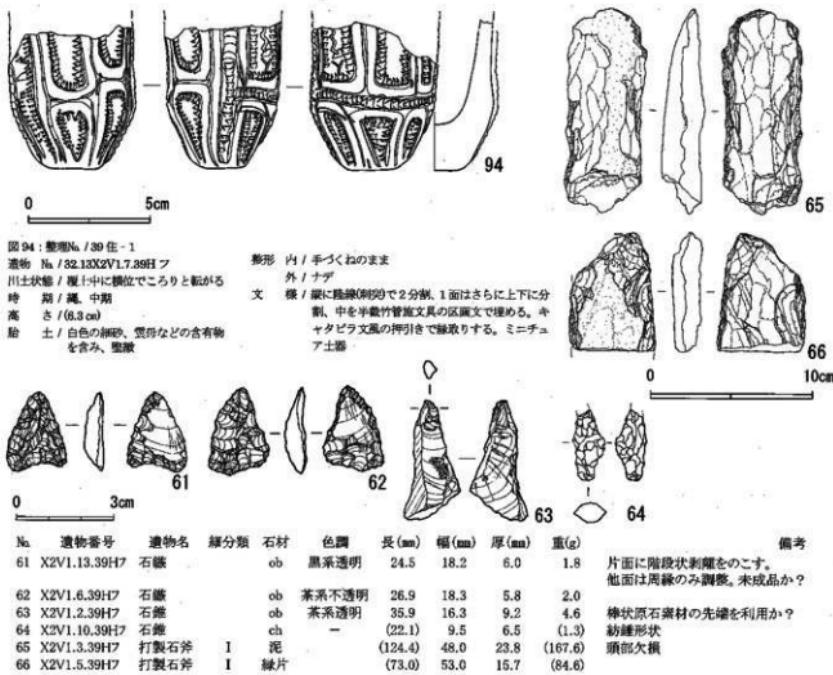
炉は石圓炉で、長さ30cmほどの平石のほかは、長さ15cm前後のやや丸みのある小石で円形に囲われている。大きさは径60cmほどである。

遺物 37号住居址：復原図化できた土器は12点ある（第20図82～第22図93）。これらはその特徴から分類され、変形区画（82）、横帯区画（83、86）、抽象文（87、88）、平出III A類（84）、有孔鈎付（93）、胸部を施文で埋める（89、90）、浅鉢（85）、無文（91）、ミニチュア土器（92）である。これ



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
57	X2U2.37.37H7	横刃形石器	砂	59.8	(73.0)	20.8	(109.6)		片面刃部調整
58	X2T3.27.37H7	磨製石斧	I 緑片	163.0	50.0	38.0	486.6		
59	X2U2.40.37H7	磨石類	凹石 安	111.3	78.5	48.4	459.4		
60	X2V3.15.37H7	磨石類	磨石 泥	(86.0)	(100.0)	55.0	(649.7)		

第24図 37号住居址出土土器実測図 その2 (1:3)



第 25 図 39 号住居址出土遺物実測図（土器 94 は 1:2、石器 61 ~ 64 は 1:1.5、65 ~ 66 は 1:3）

らの横帶区画は沈線 (83) と押引き (86) の違いがある。このようなバラエティーを有する土器群は、すべて縄文時代中期中葉に比定される。このほかに土製円板 2、土器片錐 2 が出土している。

石器は石鏃 12、石錐未成品 2、不定形石器 (ob) 10、打製石斧 11、横刃形石器 1、磨製石斧 1、磨石 1、圓石 1 が出土している（第 23 図 36 ~ 第 24 図 60）。

39 号住居址：図化できた土器は 1 点だけである（第 25 図 94）。本品はミニチュア土器で上部を欠損している。

石器は石鏃 1、石錐未成品 1、石錐 2、不定形石器 (ob) 1、打製石斧 2 が出土している（第 25 図 61 ~ 66）。

37 住は縄文時代中期中葉 III 期に、39 住は縄文時代中期中葉に属すると考えられる。

(3) 38 号住居址

調査の経過 線路下区の志平沢扇状地先端部に位置する。西に 37 号住居址、北に 36 号住居址が隣接する。

遺構検出を進めるなかで、黒色土の下が褐色土層となり、この土層から多くの一括土器が出土した。出土の在り方が廃棄状態（所謂「吹上パターン」）と考えられたが、この時点での落ち込みは明確ではなかった。

また、V-5グリッド中央付近に、住居壁にかけて1号配石址が発見された（第69図）。さらに掘り進めたところ、褐色土とロームの斑状となる漸移層面にやや黒みがかった褐色土の円形の落ち込みを確認し、38号住居址とした。

褐色土中の土器群は、住居中央付近に広範囲に散在していたことが判明した。また、本址には石皿が5点出土し、土器集中の縁辺部に散在している状況は特筆される。

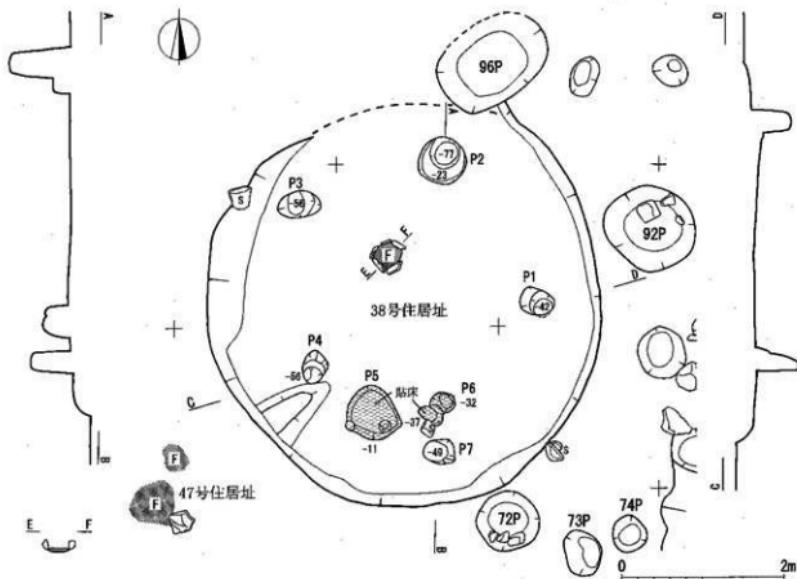
遺構 本址は、径4.9mのやや不整円形を呈する。褐色土とローム層を掘り込む。主軸は不明だが、炉が住居中央からやや北側に寄っている点や、尾根状の床の盛り上がりなどを勘案すると、南北または南西-北東に主軸があると考えられる（第26図）。

壁は南側ではやや良好にのこり、南西側で残存最大高22.6cmを測る。北に向かい徐々に残存高は減少し、北側に壁は検出されなかった。南側で良好な残存状態であった壁は、西へ北側にかけて、ごくなだらかなダラダラとした傾斜をもつ壁となる。東側は高さがないが若干の傾斜をもつ壁がのこる。

出入口と特定できる施設は明確ではない。住居南西部に尾根状の高まりがあり、床より約6cmの高さをもつ。その意図は不明である。

床はほぼ全面に硬化面が見られた。カリカリとしたタタキ床であり、地山ロームを床としている。P4に部分的に貼床が見られ、P5、P6は全面貼床されている。床は南東部が高く、北西部が低い。その差は8~16cmを測る。

柱穴はP1~P7が検出され、このうちP5、P6は前述のとおり貼床されているため本址の柱穴ではない。主柱穴はP1、P2、P3、P4、P7の5本と考えられ、40cm前後の口径と42~77cmの深さをもつ。



第26図 38号住居址実測図 (1:60)

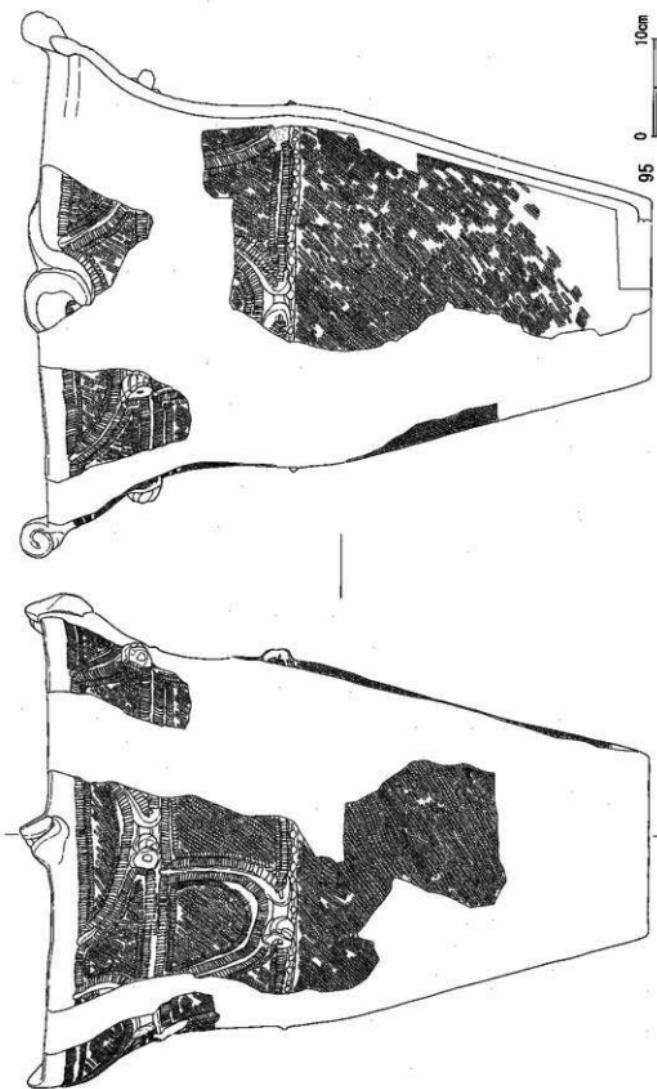
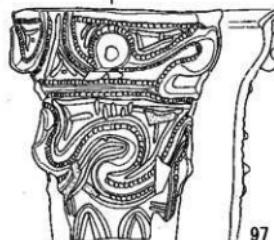


図27：縄文期 / 38号住居出土土器実測図 その1 (1:5)
 遺物 No. / 38-13300VA-13.3RH.7
 手形 内 / 様々な
 文様 / 口縁に溝状手形と二ツ山把手と各一枚、口
 縫～瓶部は、腹の溝筋手形やタテラブの模
 仿文等で認められる。区画部所にはジリ
 リングの施設が付される。開口部はL字開
 口、施設上部は縦条で分離する
 合計
 高さ / 61.3 cm. 64.2 cm
 口径 / 48.5 cm.
 土 / 細砂、石英、安息酸鉄を含む、黒色が多
 く

95 0 10cm



96



97

図 96：整理No. / 38 住 - 2

遺物 No. / 32.13XW6.12.38H カツ

出土状態 / 横土中に横穴でつぶれて散在

時 期 / 青、中期中葉Ⅱ

高さ / 16.4 cm. (26.6 cm)

口径 / 12.7 cm.

胎 土 / 白色の細砂がやや目立つ。雲母
わちかに含む。底下半は赤褐色

整形内外 / 細いナデ

文様 / 脊線による縦帯状文が胴上部に

巡る。頸部の段差と併せてキ

ヤタギ文によって三角形画面

を構成す。その中央に4重の三

角形突文と沈線を組み合わせ

た同心円文を配す

図 97：整理No. / 38 住 - 6

遺物 No. / 32.13XW6.6.38H カツ

出土状態 / 横土中に南東に向いて、内面を上に
してつぶれる

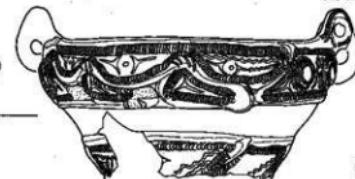
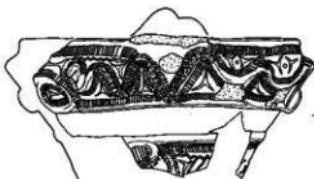
時 期

高さ / 19.2 cm. 口径 / 16.6 cm.

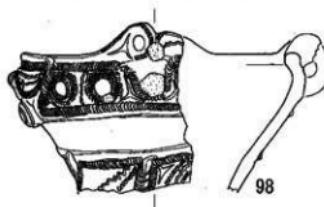
胎 土 / 白色、墨色、半透明の細砂を含み大き
きめの雲母片が目立つ。全体に赤褐色

整形 内 / 細いナデ

外 / 細いナデ、凹凸があるところ

文様 / 脊線の横幕文が口縁部に巡るが
単位数は不明。脚部は大きく蛇行す
る残線が現り、その下に沈線による
逆U字状紋を入れる。押引きは角押
文、底面上に刻印文はない

0 10cm



98

図 98：整理No. / 38 住 - 13

遺物 No. / 32.13XW6.6.38H フ

出土状態 / 横土中に散在

時 期 / 青、中期中葉Ⅱ

高さ / 10.4 cm. (14.0 cm.)

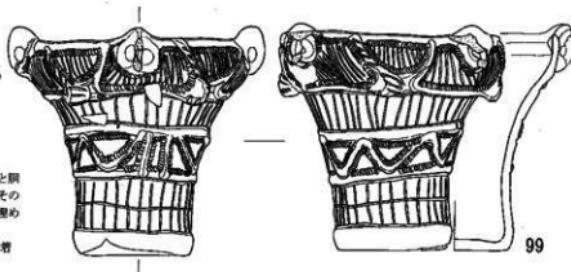
口径 / 23.0 cm.

胎 土 / 白色の細砂がやや目立つ。

全体に茶色を呈す

整形 内 / 細いナデ

外 / 無文符、ていねいなナデ

文様 / 頸部に無文符をのこす横区画文
の文様構成。口縁部に蛇行する
残線と波状、網目状に掛け、一
筋横状にキャゲビラ文、三角刺
突を巡らす。空白部には玉鉢三
叉文、三叉文を配す。斜面に落した
貼付け文はリング状か。把手
は二対

99

図 99：整理No. / 38 住 - 9

遺物 No. / 32.13XW5.27.38H カツ

出土状態 / 横土中に北東に向て複数でつぶれる

時 期 / 青、中期中葉Ⅱ

高さ / 17.6 cm. 18.6 cm

口径 / 17.7 cm.

胎 土 / 白色の細砂を含み堅歯

整形内外 / ナデ

文様 / 4 単位の双連状把手が付き、口縁部と胴
上部に横方向の区画文帯を廻らす。その
間は間の抜けた細く深い縱沈溝で埋め
る。残線脇は三角押引文

備考 / 内面の底面と脚部に薄く炭化物付着

第 28 図 38 号住居址出土土器実測図 その 2 (1:4)



100

図 100 : 簋形No. / 38 住 - 7
遺物 No. / 32.13X2W5.7.9SH クロ
出土状態 / 褐土中に内面を上に置在
時 期 / 桐、中期中葉III
高 さ / (25.6 cm)
口 径 / (21.6 cm)
胎 土 / 白色・黑色・褐色の細砂と雲母
細片を多量に含み黒褐色を呈す。
堅度
整形 内 / ていねいなナデ
文様 / 口縁部・肩部は網文R.L.、頸部は
肩縁内区画文、腹部脇にキャラ
ピラ文を付す。



101

図 101 : 簋形No. / 38 住 - 15
遺物 No. / 32.13X2W5.46.38H ブ
出土状態 / 褐土中に破片散在
時 期 / 桐、中期中葉
高 さ / (10.1 cm)
口 径 / (13.2 cm)
胎 土 / 細砂、石英を若干含む
整形 内 / ていねいなナデ
文様 / 頚部以下に網文R.L.、口縁部に
細筋帯をジグザグに付し、その
上に網文を施している

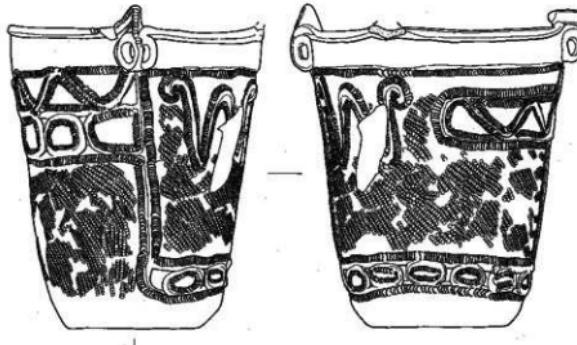
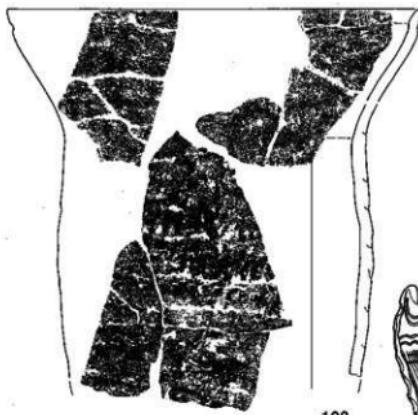


図 102 : 簋形No. / 38 住 - 10
遺物 No. / 32.13X2W5.38.38H カツ
出土状態 / 褐土中に西を向いて横位でつぶ
れる
時 期 / 桐、中期中葉III
高 さ / (24.5 cm, 26.2 cm)
口 径 / (21.0 cm)
胎 土 / 白い細砂が目立ち、雲母少量を
含む。黒褐色～褐色で堅度
整形 内 / 粗いナデ
外 / ていねいなナデ
文様 / 非对称的尖起2単位。双錐状把
手から垂下する陰窓を分割し
て側部の上下に区画文を配する。
空間はW字状文をおく。陰線部
は三角押印文を付す。地文は網
文しR.、最後に施文しているか
備 考 / 底部内面に爪痕か



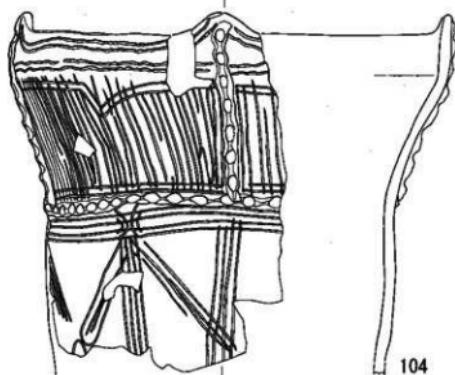
第 29 図 38 号住居址出土土器実測図 その 3 (1:4)



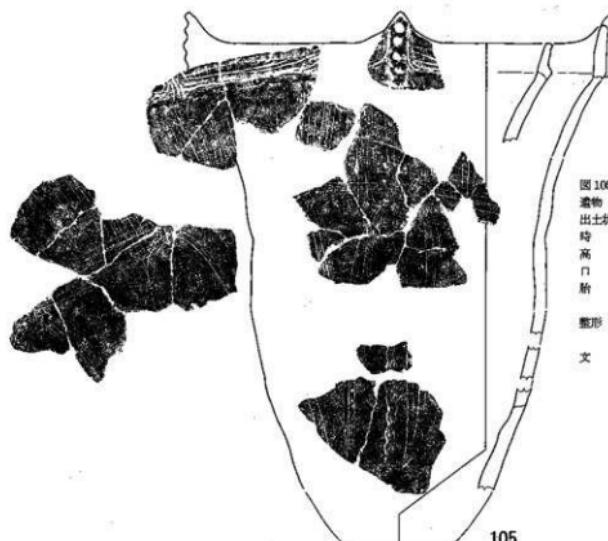
103

図 103 : 桜町 N. / 38 住 - 8
遺物 No. / 32.13X2W5.19.38H カツ
出土状態 / 内面を上に横置てぶつれる
時 期 / 錆、中期中葉
高さ / (30.2 cm)
口径 / (34.2 cm)
胎 土 / 砂、石英を含む
盤形 内 / ついでな模ナデ
外 / 軽い模ナデ(部分的に)
文様 / 無文、輪積み痕を明顯にのこす

図 104 : 桜町 N. / 38 住 - 5
遺物 No. / 32.13X2W5.61.38H フ
出土状態 / 横土中に北を向いて横置てぶつれる
時 期 / 錆、中期中葉
高さ / (27.6 cm)、(29.4 cm)
口径 / (35.6 cm)
胎 土 / 白色、半透明・青色のやや大きな砂を多量に含み、
灰~灰黑色を呈す
盤形内外 / レイナデ
文様 / 口縁山形状凸起 4 単位に付く。口縁~腹部は押花模
線で区画。中は下巻竹管状施文具の継沈摩と
文文、底面は二重底弧文、脚部は矢印状文



104

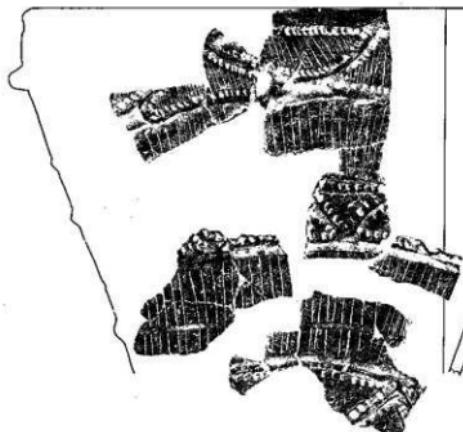


105

図 105 : 桜町 N. / 38 住 - 12
遺物 No. / 32.13X2W5.34.38H カツ
出土状態 / ややまとまって散在
時 期 / 錆、中期中葉
高さ / (39.2 cm)
口径 / (34.4 cm)
胎 土 / 細砂少なく、石英、長石、雲母を多
く含む
盤形 内 / やや粗いナデ
外 / ナデ
文様 / 波状口縁頂部に押花模をもつ短幅
隆脊を付す。先の尖った施文具によ
り沈摩を描いている。描かれている
モチーフは、平出皿△頭に特徴的に
みられる

0 10cm

第 30 図 38 号住居址出土土器実測図 その 4 (1:4)



106

図 106: 整形N_o. / 38 住・4
遺物 No. / 32.13XCV5.27.38H カツ
出土状態 / 優七川に破片数在
時 期 / 残、中期中葉
高さ / (30.0 cm)
口径 / (44.0 cm)
胎 土 / 細砂、石英少量含む
整 形 内 / ていねいなヘアナダ
文 標 / 口縁から頸部を機位陥落により3
段に分かれり、口縁部は橢形と三角形
の区画を陰帯で作出し、頸部付近は
ジグザグに陰帯を付し三角区画を
作出する。底面の断面はわけてね
三角形を呈する。陰帯窓は純角の先端
をもつ壺文具により押し引きされ、
三角や角状に施文される。沈線は先
丸の無い直文具による

図 107: 整形N_o. / 38 住・3

遺物 No. / 32.13XCV5.26.38H カツ
出土状態 / 優上中に南を向いて横置でつぶれる

時 期 / 残、中期中葉

高さ / (11.8 cm)

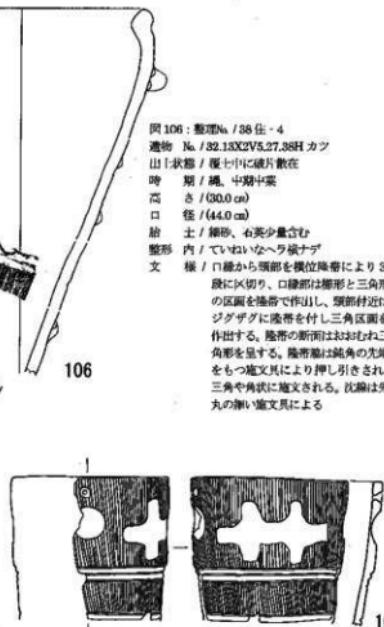
口径 / (12.9 cm)

胎 土 / 合有物少量で堅韌、黒色ないし墨黄色を呈す

整 形 内 / ていねいな窓き

文 標 / 頸部及び肩部に横区画の半截竹管状施文具の沈線を施

し、空白は擦に同様の沈線で埋め、△△と○印の新削
文を入れている。○は胎土の厚さの半分以上と深く、き
れいに削っている



107

0 10cm

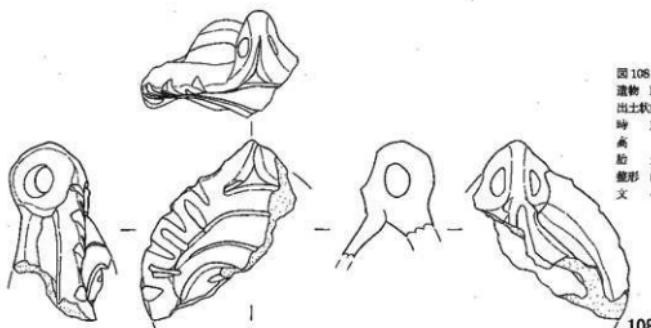


図 108: 整形N_o. / 38 住・16
遺物 No. / 32.13XZW6.79.38H フ
出土状態 / 褐土中
時 期 / 残、中期中葉
高さ / (7.3 cm)
胎 土 / 細砂、石英・長石を含む
整 形 内 / ていねいなナダ
文 標 / 底面把手部分のみ、表面と
裏面の貼り合わせで作って
いる

図 109: 整形N_o. / 38 住・18

遺物 No. / 32.13XZW5.26.38H カツ

出土状態 / 褐土中

時 期 / 残、中期中葉

高さ / (4.2 cm)

口径 / (7.2 cm)

胎 土 / 細砂、繊維少な葉肉を少量含む

整 形 内 / 直いナダ

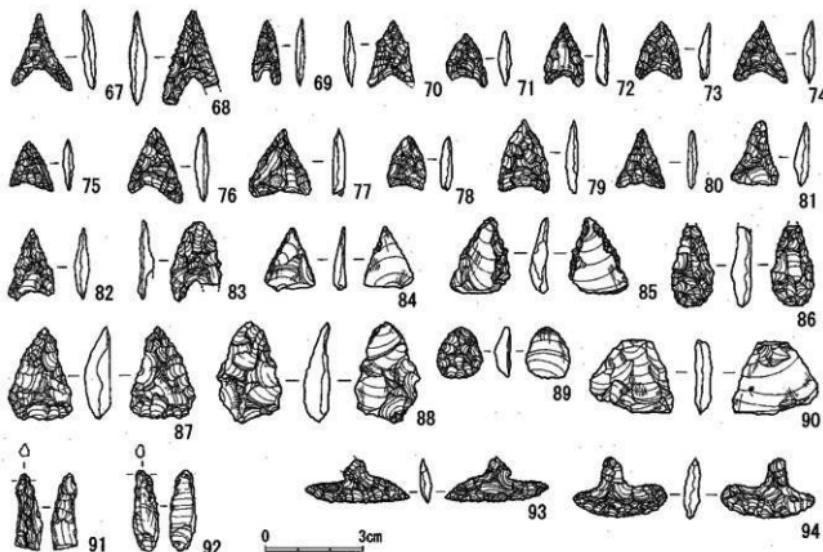
文 標 / 瓢文R Lを横位に軽がす



110

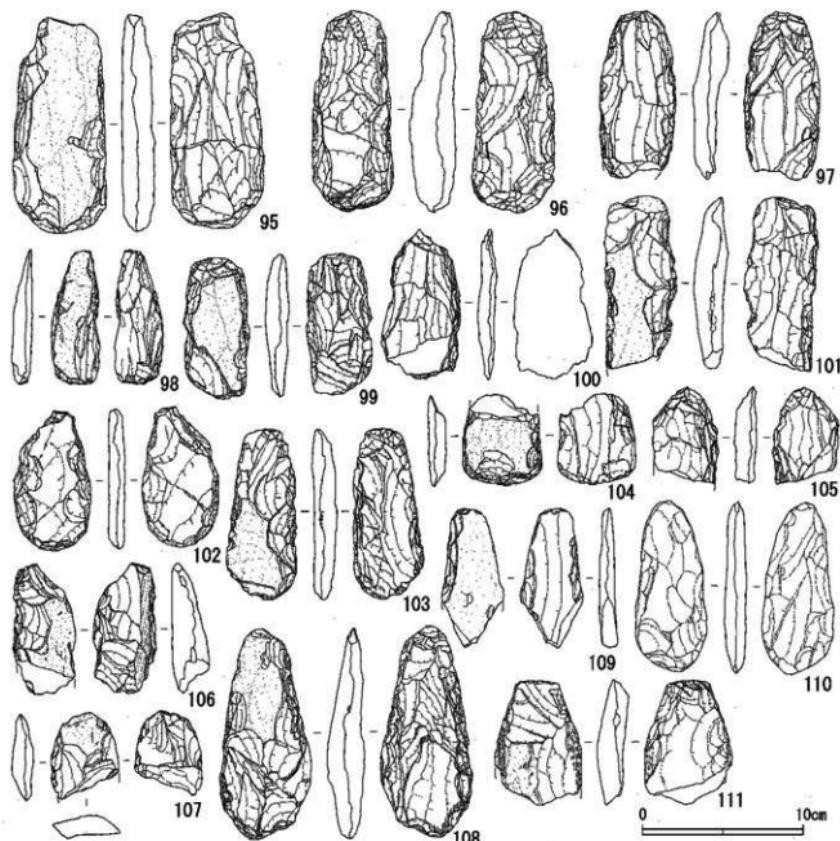
図 110: 整形N_o. / 38 住・17
遺物 No. / 32.13XZW4.30.38H フ
出土状態 / 褐土中
時 期 / 残、中期中葉
高さ / (8.1 cm)
胎 土 / 細砂、長石を含む。ごく微
量の石炭あり
整 形 内 / ナダ
外 / ややていねいなナダ
文 標 / 瓢文。底面に近い形態を
呈する

第 31 図 38 号住居址出土土器実測図 その 5 (1:4、108 ~ 110 は 1:2)



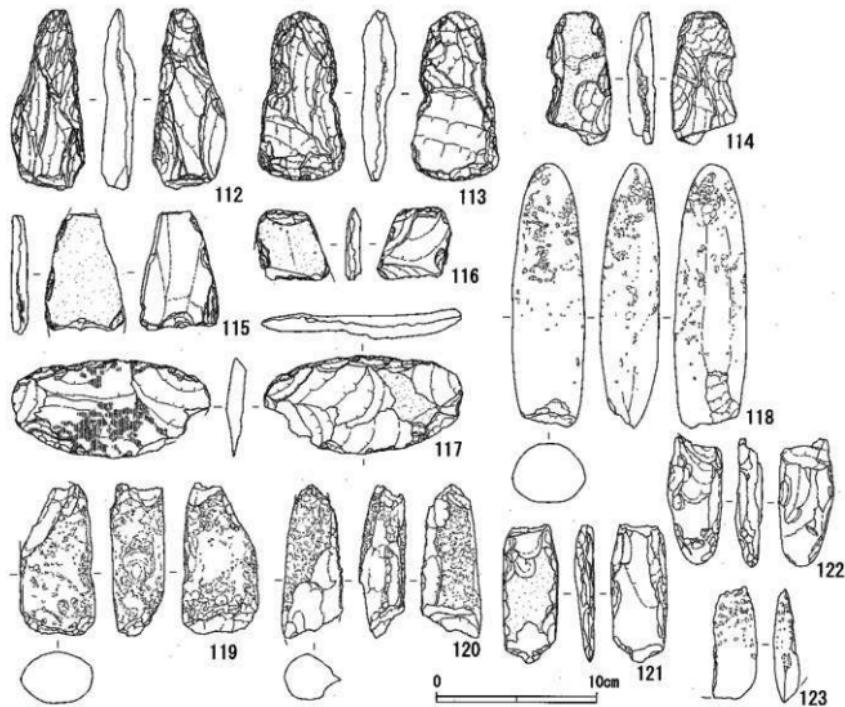
No.	遺物番号	遺物名	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
67	X2V5.23.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	23.9	18.5	4.5	0.7	身幅、各脚の幅が細い
68	X2W6.35.38H7	石鎌	ob	黒系透明	29.0	(17.0)	4.9	(1.4)	側縁鋸齒状
69	X2W5.38.38Hカフ	石鎌	ob	黒系透明	19.1	8.9	2.6	0.3	身幅が細い
70	X2W5.36.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	20.5	13.9	3.5	(0.5)	
71	X2V5.29.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	16.6	12.0	3.8	0.5	脚部左右非対称。片脚か?
72	X2V5.33.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	19.2	12.3	3.2	0.7	周縁のみ調整
73	X2W4.26.38H7	石鎌	ob	茶系透明	17.4	13.9	3.2	0.5	
74	X2W5.116.38H7	石鎌	ob	黒系透明	18.6	16.2	3.5	0.7	
75	X2V5.53.38H7	石鎌	ob	茶系透明	14.6	13.1	3.1	0.4	
76	X2V5.41.38H7	石鎌	ob	茶系透明	22.4	16.4	4.1	0.9	左右非対称
77	X2V5.32.38Hカフ	石鎌	ob	茶系白濁	20.2	19.3	3.8	1.3	片面周縁のみ調整
78	X2V5.53.38H7	石鎌	ob	茶系透明	16.1	11.8	3.5	0.6	
79	X2W4.15.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	22.2	15.9	3.7	1.0	先端が突出する
80	X2V6.12.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	17.7	14.8	2.9	0.5	
81	X2W5.56.38H7	石鎌	-	-	19.4	13.9	4.2	0.8	側縁内湾する
82	X2V5.11.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	22.2	14.2	4.5	0.6	
83	X2W6.40.38H7	石鎌	ob	茶系透明	24.5	(15.3)	4.1	(0.9)	側縁鋸齒状。一側縁の片面未調整
84	X2V5.87.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	19.3	15.5	3.0	0.6	両側縁の一部のみ調整
85	X2V5.105.38Hカフ	石鎌	ob	黒系青	23.0	18.1	4.7	1.3	受熱
86	X2W6.15.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	(24.8)	13.1	6.1	(1.7)	石鎌か?
87	X2W5.60.38H7	石鎌	ob	茶系透明	28.8	19.8	7.6	3.2	
88	X2W5.100.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	31.1	20.0	2.7	3.5	
89	X2X6.48.38H7	石鎌	ob	茶系透明	15.5	13.6	4.9	0.9	
90	X2W5.82.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	26.1	24.3	4.1	2.7	打面と打痕をのこす。剥片素材
91	X2V4.11.38Hカフ	石鎌	ob	茶系透明	23.9	9.8	7.6	1.6	
92	X2W6.72.38H7	石鎌	ob	茶系透明	25.0	7.6	4.8	0.9	両極削片素材
93	X2V4.30.38H7	石匙	ob	黒系透明	13.5	31.8	3.4	0.7	ヨコ長形状
94	X2W5.25.38Hカフ	石匙	ob	茶系透明	18.5	28.5	4.6	1.6	ヨコ長形状

第32図 38号住居址出土石器実測図 その1 (1:1.5)



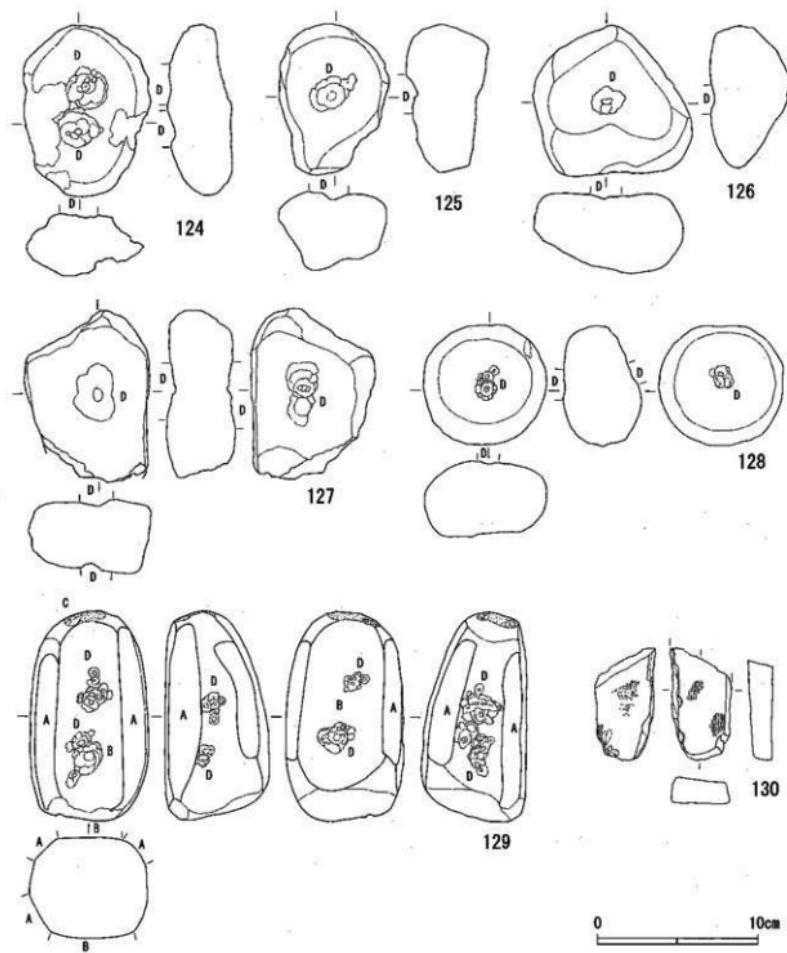
No.	遺物番号	遺物名	縁分類	石材	長(㎜)	幅(㎜)	厚(㎜)	重(g)	備考
95	X2W4.9.38Hカフ	打製石斧	I	綠片	132.4	56.9	18.0	224.5	
96	X2W5.32.38Hカフ	打製石斧	I	砂	121.6	49.2	28.0	193.6	
97	X2V4.8.38Hカフ	打製石斧	I	頁	(102.2)	45.7	14.2	(87.7)	刃部欠損
98	X2V6.15.38Hカフ	打製石斧	I	粘	(82.7)	30.0	10.4	(31.0)	刃部欠損
99	X2K5.6.38Hカフ	打製石斧	I	綠片	85.9	40.6	12.4	53.5	
100	X2W5.43.38Hカフ	打製石斧	I	綠片	(91.3)	(49.8)	(9.6)	(44.1)	頭刃部欠損の上剥離片
101	X2V5.24.38Hカフ	打製石斧	I	砂	(106.1)	43.6	18.8	(102.4)	頭頂部欠損
102	X2W5.5.38Hカフ	打製石斧	I	sh	(85.0)	46.7	9.2	(54.9)	
103	X2V6.9.38Hカフ	打製石斧	I	頁	105.1	42.7	13.6	74.3	
104	X2V5.15.38Hカフ	打製石斧	I	砂	(55.0)	48.6	9.6	35.6	
105	X2W5.9.38Hカフ	打製石斧	(I)	ho	(58.4)	(38.7)	11.4	(28.7)	
106	X2W4.22.38Hカフ	打製石斧	(I)	綠片	(78.4)	39.1	20.2	(63.4)	一側縁自然面
107	X2V5.38.38Hカフ	打製石斧	(I)	ho	(48.1)	40.8	11.2	(22.8)	
108	X2W5.21.38Hカフ	打製石斧	II	綠片	128.5	55.8	21.7	154.2	
109	X2W5.20.38Hカフ	打製石斧	II	千	(83.5)	(37.1)	8.3	(33.9)	
110	X2W5.16.38Hカフ	打製石斧	II	sh	104.9	43.0	11.9	77.9	
111	X2V6.23.38Hカフ	打製石斧	II	綠凝	(76.5)	54.4	14.7	(78.9)	

第33図 38号住居址出土石器実測図 その2 (1:3)



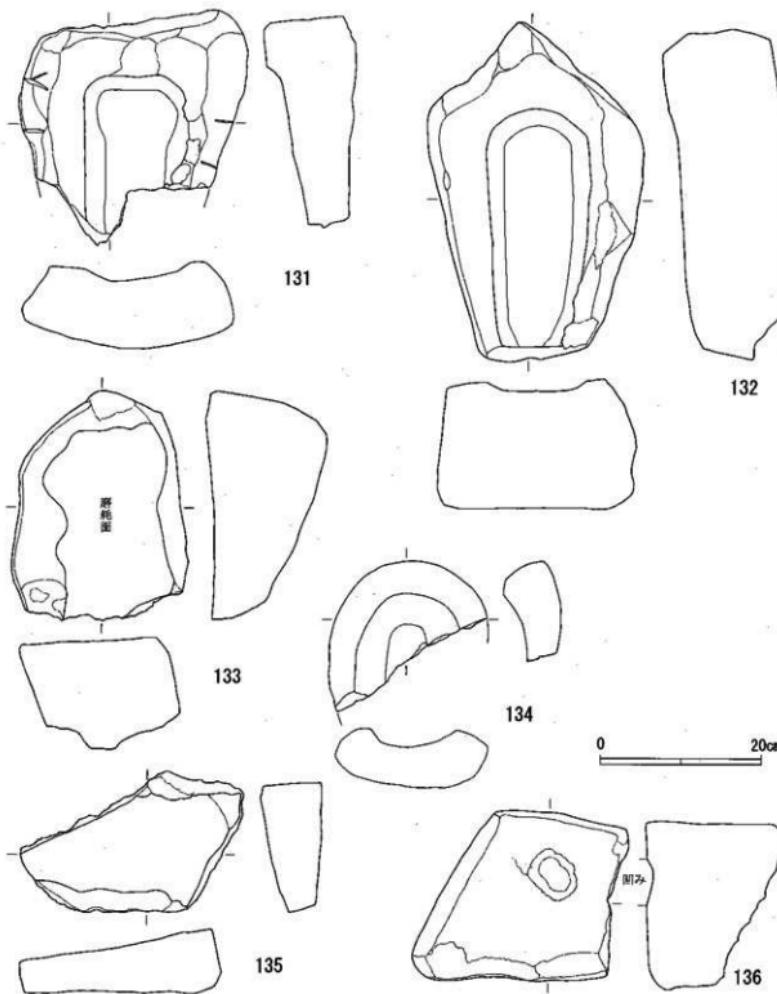
No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
112	X2V5.17.38H.P2	打製石斧	II	綠片	(111.5)	45.1	17.0	(94.8)	刃部欠損
113	X2V5.16.38Hカツ	打製石斧	II(IV)	砂	103.5	52.6	19.3	112.9	両側縁中央やや上に小さな抉りあり
114	X2V5.101.38Hカツ	打製石斧	(II)	綠片	(80.0)	(36.1)	13.5	(55.4)	一側縁欠損
115	X2V6.57.38Hカツ	打製石斧	(II)	綠片	(72.1)	(46.6)	8.8	(45.7)	
116	X2V5.39.38Hカツ	打製石斧	(II)	砂	(47.2)	(39.7)	7.3	20.2	
117	X2V5.10.38Hカツ	磨製石器		砂	60.3	121.2	13.1	103.3	背部調整あり。刃部わずかな使用剥離？
118	X2V4.25.38Hカツ	磨製石斧	I	綠片	162.0	44.0	36.0	(409.7)	
119	X2V5.33.38Hカツ	磨製石斧	I	綠片	(92.0)	(47.0)	33.0	(208.3)	
120	X2W4.7.38Hカツ	磨製石斧	I	綠片	(94.0)	(37.0)	(27.0)	(124.7)	
121	X2X6.14.38Hカツ	磨製石斧	II	綠	(83.4)	33.5	10.7	(45.8)	
122	X2W6.24.38Hカツ	磨製石斧	未成品	綠	78.8	32.3	15.1	51.2	
123	X2V5.102.38Hカツ	磨製石斧	I	綠片	(68.2)	(26.1)	(12.0)	(31.8)	

第 34 図 38 号住居址出土石器実測図 その 3 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
124	X2V5.35.38Hカツ	磨石類	圓石	安	105.0	79.0	39.0	304.7	
125	X2W6.37.38H7	磨石類	圓石	安	93.0	68.0	50.0	334.7	
126	X2W5.42.38Hカツ	磨石類	圓石	安	93.0	98.0	51.0	482.2	
127	X2W5.13.38Hカツ	磨石類	圓石	安	105.0	77.0	46.0	498.3	
128	X2W5.24.38Hカツ	磨石類	磨石	玄	73.0	75.0	51.0	247.3	
129	X2W5.68.38H7	磨石類	磨石	安	129.0	73.0	64.0	857.2	
130	X2W5.92.38Hカツ	砾石	ho	(69.0)	33.6	16.5	(59.7)	砥面1面	

第35図 38号住居址出土石器実測図 その4 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(kg)	備考
131	X2W4.23.38H7	石瓢	安	(288.0)	280.0	112.0	(9.4)	凹部やや浅め。若干磨耗している
132	X2W6.29.38H7	石瓢	安	418.0	247.0	149.0	24.2	凹部平滑。完形品
133	X2W5.48.38H7	石瓢	安	284.0	217.0	150.0	10.3	ごく緩やかな湾曲面。平滑
134	X2W5.10.38H1カク	石瓢	基	(192.0)	(192.0)	(120.0)	2.32	破片。3分の1残。凹み深い
135	X2W5.49.38H7	石瓢	基	(174.0)	(276.0)	(79.0)	(4.4)	先部分横割れ。ごく緩やかな凹部。磨耗している
136	X2W6.30.38H7	台石	安	209.0	267.0	169.0	12.25	径60mm程のやや浅めの穴あり

第36図 38号住居址出土石器実測図 その5 (1:6)

主柱穴の坑底はやや片寄っていて、若干内傾斜している。

炉は石囲炉で、東側の石が抜けている。住居中央から約60cm北に寄ったところにあり、長さ20cm前後の石をやや斜めに使用していた。炉石の上端から約10cm下に焼土があり、地山ロームが5cmほど赤化していた。

住居南側に発見された1号配石址は、38号主柱穴のP7上で38号床面より10cm高い位置にあるため、本址に付随する施設とは考えにくく、本址廃絶以降の所産と考えられる。

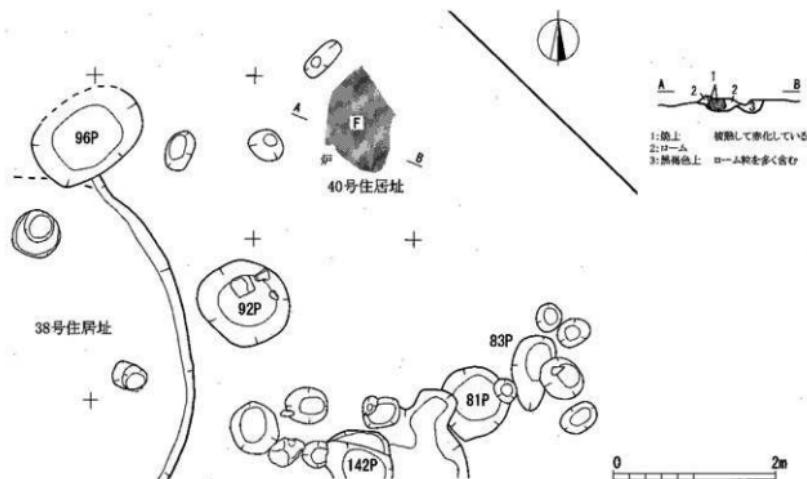
遺物 復原図化できた土器は15点ある（第27図95～第31図110）。横帯区画される（95、96、98、99、100、102、106、107）と、抽象文（97）、平出III類（104、106）、無文で輪積痕を明瞭にのこす（103）、縄文施文（101）、顔面把手（108）、ミニチュア土器（109、110）があり、95は高さ65cmと大型である。このほか土製円板4、土器片錐2がある。

石器は質量とともに多く、石鏃27、石礫未成品8、石錐2、石匙（ob）2、不定形石器（ob）31、打製石斧22、横刃形石器1、磨製石斧6、磨石2、凹石4、石皿5、砥石1、台石1、石製装身具2が出土している（第32図67～第36図136）。

本址は、出土遺物から縄文時代中期中葉II期に属すると考えられる。

(4) 40号住居址

調査の経過 線路下区北隅付近に検出された住居址である。焼土が発見され、これを炉と考え40号住居址とした。



第37図 40号住居址実測図 (1:60)

遺構検出時には焼土南側に落ち込みらしき部分が見られたが、傾斜面であることが判明した。周辺にも落ち込みは検出できなかった。焼土周辺は根痕と思われる小穴が多くアバタ状に広がる。柱穴も特定できなかった。

遺構 焼土のみでそのほかの情報はなく不明である(第37図)。焼土は長さ160×幅115cmの広がりをもち、中央に赤化の強い焼土塊が、幅16cm、厚さ12cm前後見られた。この焼土は地山ローム土を赤化していて、掘り込みはないが地床炉と考えられる。

遺物 炉及びその周辺から団化できる遺物はなく、焼土中から縄文時代前期初頭の小破片が出士している。

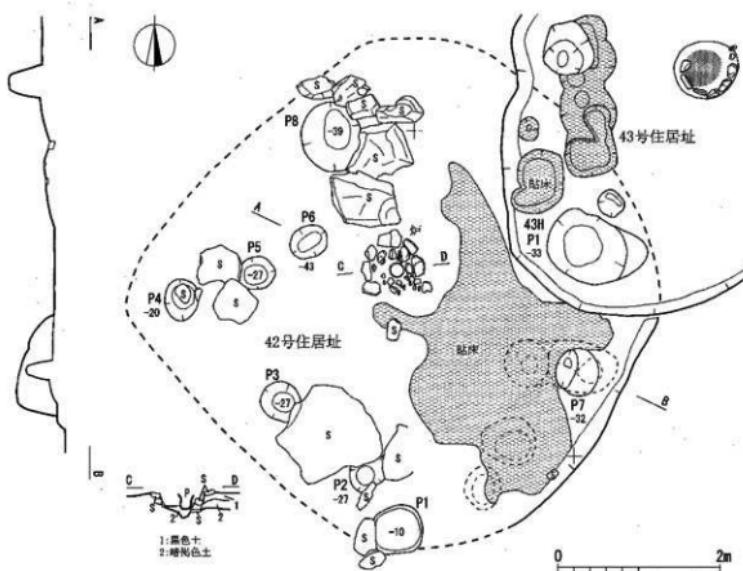
資料が少なく所属時期は明言できない。

(5) 42号住居址

調査の経過 線路上区南側に検出された住居址で、志平沢扇状地中位のやや下方部分にあたる。耕作土除去後、すぐに石團炉が発見され42号住居址とした。

本址は1mを越える大石が石團炉周辺にあり、炉の北側には溝が延びていた。住居上にこれらの大石が乗り、溝が本址を切る。この構は志平沢の土石流々路であると考えられる。

住居プランを確認しようと周辺を探ったところ、42住の北東側に43号住居址を確認し、42住は43住に切られていることが判明した。南東側は畑の土手となっていたが、ここにわずかに壁が検出

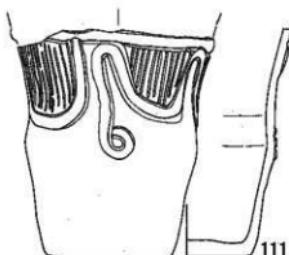


第38図 42号住居址実測図 (1:60)

され、おおよその平面形状を把握できるに至った。部分的に床の硬化面が検出できたが、耕作土下であり遺物は少なかった。貼床下に若干の柱穴が検出でき、本址も複数の建替えがあったと考えられる。

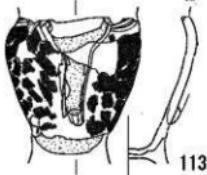
遺構 42住の南東側に本址の壁が一部確認でき、炉及び柱穴がわかるところから、推定ではあるが 5.8×5.8 m の隅丸方形を呈すると考えられる。残存部で見る限り、ローム層から下部の黄色砂礫層を掘り込み構築されていた（第38図）。

壁は南東側に 3.2 m ほどのこり、それ以外は削られていた。中央付近に最大残存高があり、 19.1 cm を測る。若干傾斜しているが比較的良好であった。



111

図 111：整理No. / 42住 - 1
遺物 No. / 32.15W3T1.7.42H.FP
出土状態 / 床内に正位
時 期 / 繩、中期中葉末
高 さ / (18.6 cm)
胎 土 / 白色、赤白の丸みのある大きめの砂粒が目立ち、黄褐色でやや脆い
整形内外 / 縦・横ナナ
文 標 / 順時針回りで縦形の隆線を 5 基位に、始まりあるいは尻尾は底する模様を付す。縦の枕筋はヘラ棒
備 考 / 底部削除



113

図 113：整理No. / 42住 - 2
遺物 No. / 32.15W2S2.5.42H.FP
出土状態 / 床上に逆位で立つ
時 期 / 繩、中期中葉一後
高 さ / (11.2 cm)
胎 土 / 含有物少ないが白色、半透明の細砂を含み、表面が目立つ。黒色ないし灰色で堅硬
整形 内 / 縦・横ナナ
文 標 / 台形土器の口縁部、台部を欠く。脚部に Y 字状の落砂と貼付痕がある。頭部に枕筋 2 本を認める。模文は R.L.

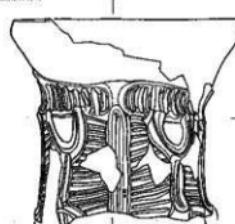
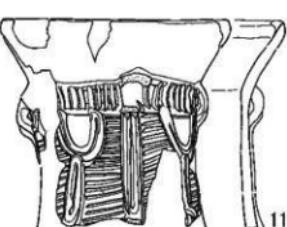


図 114：整理No. / 42住 - 3

遺物 No. / 32.15W2T2S.8 クロカツ(42住の上面)
出土状態 / 包含層中に軟在
時 期 / 繩、中期後葉Ⅱ
高 さ / (7.1 cm)
口 径 / (18.4 cm)
胎 土 / 粘土が多量に目立ち、白色・半透明、そのほかの細砂を含み難い



0 10cm

整形内外 / ていねいなナナ
文 標 / 縦縫に粘土紐貼り付けの接続部、肩部は横状把手と垂下する隆線で 4 分割、空間を Y 字(ド)は蔓草文りでさらに分割し、横沈線を全体に施す。枕筋はヘラ棒

第39図 42号住居址出土土器実測図 (1:4)

床は炉の東側から住居址南東側に硬化面があり、ローム土を用いていた。この床はカリカリとした貼床で、南北4.2m、東西最大2.6mの不整形にのこっていた。

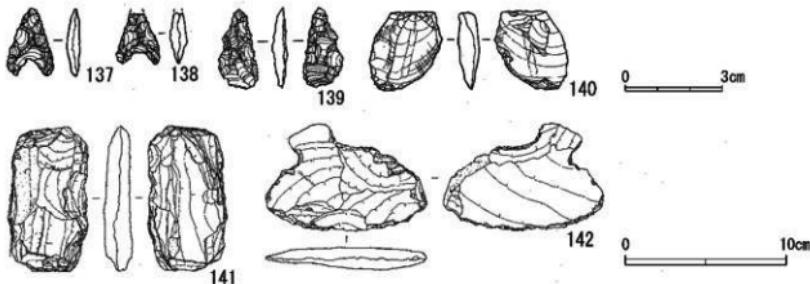
柱穴はP1～P8が本址に伴うと考えられ、そのうちP6、P4、P2、P7、43住P1が主柱穴であろう。P3は貼床下に検出された柱穴とともに、42住に重なる古い住居の柱穴とも考えられる。43住P1の上面では貼床が確認され、43住には伴わず42住の柱穴と考えられる。またP5、P6は入口部などの何らかの施設の小柱穴と思われる。

炉は石囲炉で炉中央に深鉢が正位に置かれていた。住居中央からやや北寄りに位置し、南側の炉石が抜けていたが、径80cmの円形と推測される。炉石は長さ20cm前後の平石が平坦面を上にして並べられていた。黄色砂礫層中に塗かれ、炉内は地山の石がゴロゴロとしていた。中央には深鉢が正位で置かれ、上部が欠損していた(第39図111)。下部を石で囲まれ支えられているようにも見える。焼土は見られず、被熱の痕跡はほとんどなかった。

本址は43住に切られることから、42住が古く43住が新しい。大石や溝から42住が古く、出土土石が新しいと考えられる。

遺物 復原化できた土器は4点である(第39図111～114)。111は石囲炉内に正位で置かれ、上半部を欠損している。113は台付土器で、脚部と上半部を欠損している。

石器は石鏃2、石鏃未成品2、不定形石器(ob)1、石匙1、打製石斧1がある(第40図137～142)。本址は縄文時代中期中葉末に属すると考えられる。



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
137	W3R2.1.42H7	石鏃	ob	茶系透明		20.5	14.0	4.1	0.8	
138	W3T1.1.42H7	石鏃	ob	茶系透明	(15.5)	13.4	4.8	(0.6)		
139	W3S2.2.42H7	石鏃	ob	黒系透明		23.0	(16.3)	4.5	(0.8)	先端未作成
140	W3R2.7.42H.P1	石鏃	ob	茶系透明		28.6	19.8	6.9	2.8	周縁のみ若干微調整。 素材剥片に打点のこす
141	W3S3.3.42H7	打製石斧	I	sh		90.0	49.0	14.5	89.3	
142	W3S3.2.42H7	石匙	SA	砂		98.9	65.0	11.0	72.5	先形

第40図 42号住居址出土石器実測図(137～140は1:1.5、141・142は1:3)

(6) 43号住居址

調査の経過 線路上区南端の42号住居址北東側に隣接し42住を切る。

遺構検出時に褐色土層面において黒褐色土の落ち込みを検出し、43号住居址とした。

43住居土を掘り進むと西側に人頭大の石とともに一括土器が出土し、床直上に達する土器も存在した。石と混在していたが、これらの石は意図的な投げ込みではないと判断した。

遺構 本址は長軸 $5.0 \times$ 短軸 4.4 m の規模をもち、不整橈円形を呈する。長軸は南西—北東である（第41図）。

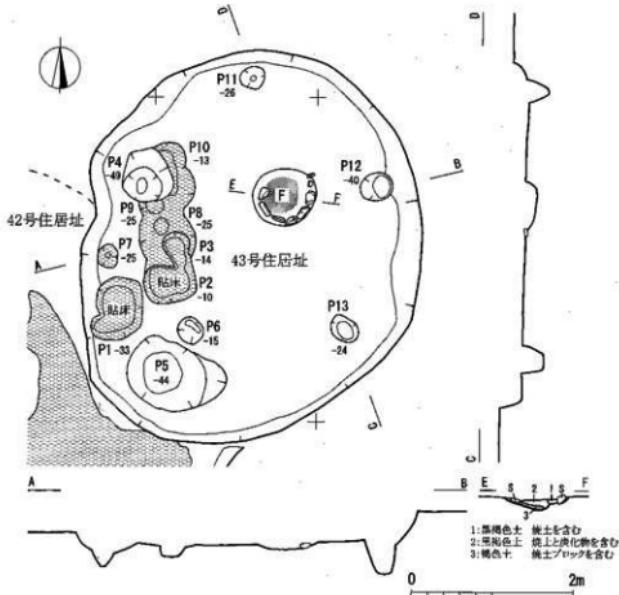
壁は褐色土へローム層を掘り込み、全体に壁が残存する。15～29.6 cmを測り東壁が最も高い。北西部分は緩やかに傾斜しているが、ほかは良好な状態であった。

入口部は特定できない。

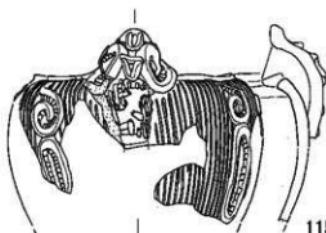
床は硬化面が見られないが、全体に縮まりのあるローム土であった。P1、P8、P9、P10は、ローム粒の多量に混入した褐色土を用いて貼床されていたが、この貼床も硬くなかった。住居南東部と北西部では最大 16 cm の比高差があり、北西部が低い。

柱穴は貼床下を含め、P1～P13が検出された。P1、P7～P10は貼床され、そのうちP1は42住の柱穴と考えられる。P4、P5、P13、P12、P11が主柱穴の5本柱と考えられる。P5は口径 100 cm と大きいが、そのほかは口径 40 cm 前後で $24\sim49\text{ cm}$ の深さをもつ。

炉は石團炉で、住居中央から北東に寄っている。 $80 \times 70\text{ cm}$ のやや橈円形で、長さ $15\sim20\text{ cm}$ の石を横長に用い、石の辺を上に平坦面を炉壁際に沿わせ円形に配しているが、北側の炉石が抜けていた。炉石は斜位に埋設され、炉の掘り込みは中華なべ状に掘られていた。底面に焼土が見られ、地山ロームは 5 cm ほどの厚さで赤化していた。炉石の上端から $7\sim8\text{ cm}$ で焼土面に至る。



第41図 43号住居址実測図 (1:60)



115

図 115 : 整理 No. / 43 住 - 8

遺物 No. / 32.13W3U3.4.7.43H フ

出土状態 / 覆土中に散在

時 期 / 鋼、中期後葉 I

高 さ / (12.2 cm)、(15.0 cm)

口 径 / (2.5 cm)

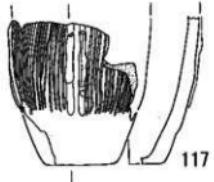
胎 土 / 灰色・赤色のやや大きめの砂鉄を含み無い

整形 内 / 粗いナダ

文 様 / 人文風の把手 4 単位。その中间に溝巻・

輪縁内済隆縁を縦に並べている。底脚部に

円押引文付す



117

図 117 : 整理 No. / 43 住 - 11

遺物 No. / 32.13W3U3.1.43H クロカツ

出土状態 / 覆土中に散在

時 期 / 鋼、中期後葉 I

高 さ / (12.0 cm)

胎 土 / 白色・半透明白なやや大きめの砂鉄が

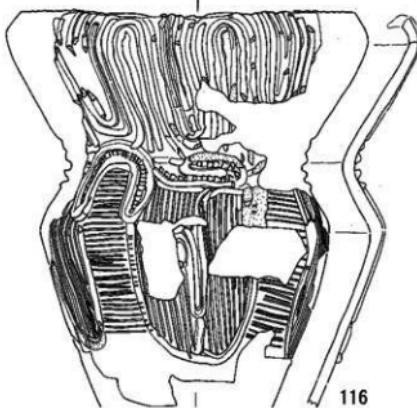
目立ち、赤褐色・黄褐色で堅致

整形 内 / 粗いナダ

文 様 / 前下半部をのこすのみ。彫下する後

縁で4分咲、空間を輪状線で埋める。

比較半截竹管状施文具



116

図 116 : 整理 No. / 43 住 - 3

遺物 No. / 32.13W3U3.9.43H フ

出土状態 / 覆土中にややまとまって散在

時 期 / 鋼、中期後葉 I

高 さ / (32.4 cm)

口 径 / (26.2 cm)

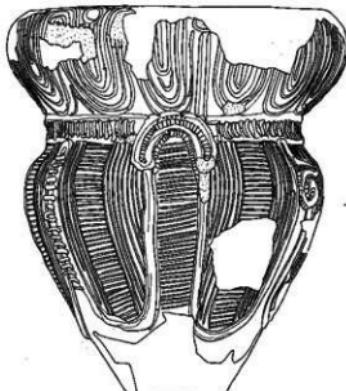
胎 土 / 灰色・白色の大きめの砂鉄を多く含み無い

整形 内 / 粗いナダ

文 様 / 口縁部は済隆縁の輪曲文。腹部に逆U字状

文・輪溝巻文、中に円押引文を付す。肩部はU字状済隆縁で区画する。比較は半截竹

管状施文具を用いている



118

図 118 : 整理 No. / 43 住 - 6

遺物 No. / 32.13W3U3.16.43H フ

出土状態 / 覆土中に北東を向き、横位でつぶれる

時 期 / 鋼、中期後葉 I

高 さ / (22.2 cm) 口 径 / (24.0 cm)

胎 土 / 白色・赤色・半透明白の大きな砂鉄が入る。

黄褐色でやや無い

整形 内 / 粗いナダ。底脚が顯著にのこる

文 様 / 口縁部は済巻き輪曲の輪曲文。頭に粘土

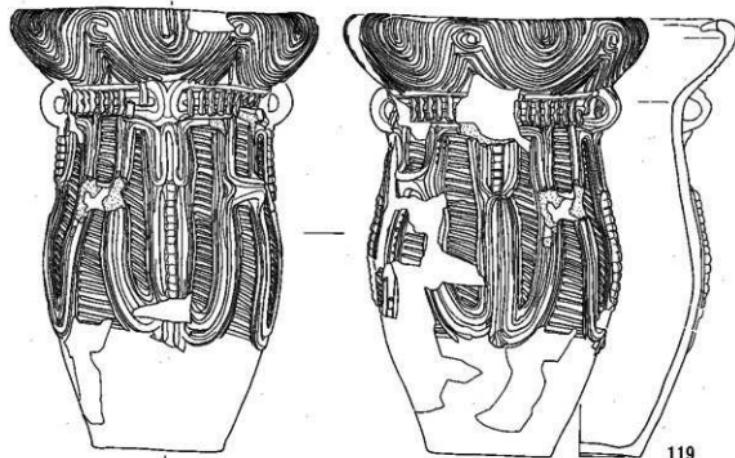
組貼り付けの痕跡。肩部はU字状済隆縁文

のアレンジで空間を縦・横十字状凹凸路で埋

める。比較は半截竹管状施文具による



第 42 図 43 号住居址出土土器実測図 その 1 (1:4)



119

図 119：整理No. / 43 住・4

遺物 No. / 32.13W3U3.14.43H フ
出土状態 / 稲土中に内面を上に横位でつぶれる
る。底部は立位

時 期 / 桐、中期後葉 I

高さ / 36.0 cm

口径 / 20.0 cm

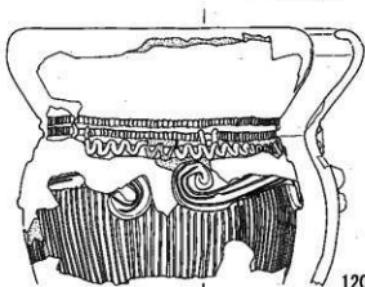
胎 土 / 黒色の陶る粒子、雲母を含む。灰色。

黒褐色を呈し脆い。

形態 内 / 桐いナデ

外 / 底部底座

文様 / 口縁部は巻管葉ぎ裏文を模倣文へラ
通風に6単位描く。颈部に短い桔子形
貼り付けと棒状把手、肩部は把手から
垂下する3本の隆起で区画、それらを
棒状把手で繋ぐ。空間を埋める比線は
ヘラ描。全体の文様イメージは楕の表
(119左圖)ないし甲虫類の背側の抽象文か
備考 / 底部網代底



120

図 120：整理No. / 43 住・5

遺物 No. / 32.13W3U3.15.43H フ

出土状態 / 稲土中に正位

時 期 / 桐、中期後葉 I

高さ / (20.4 cm) 口 径 / (22.0 cm)

胎 土 / 白色、乳白色、黒色の砂粒を含み赤

褐色で堅硬。大きな石粒が目立つ

形態 内 / 桐いナデ

外 / ていよいな底座

文様 / 口縁部葉文。頸部は円押引文で区画、

桔子形貼り付け蛇行文。肩部に通

卷管葉ぎ付し、以下垂下する半截

竹管状施文具の比線で埋める

0 10cm

図 121：整理No. / 43 住・2

遺物 No. / 32.13W3U3.3.43H フ
形態 内 / 桐いナデ

出土状態 / 稲土中に敷在
文様 / 4 単位 内形突起に波線尚巻文を行

時 期 / 桐、中期後葉 III
して波状口縁になり、そこから2本

高さ / (21.8 cm), (23.8 cm)
隆起で4分割。中间を2本横筋でさ

口径 / (21.8 cm)
らに分割する。地文繩文 R L。波線

胎 土 / 白色、灰色の大きな
断線は三角形

砂粒が目立つ。

灰～黑色で堅硬

第 43 図 43 号住居址出土土器実測図 その 2 (1:4)

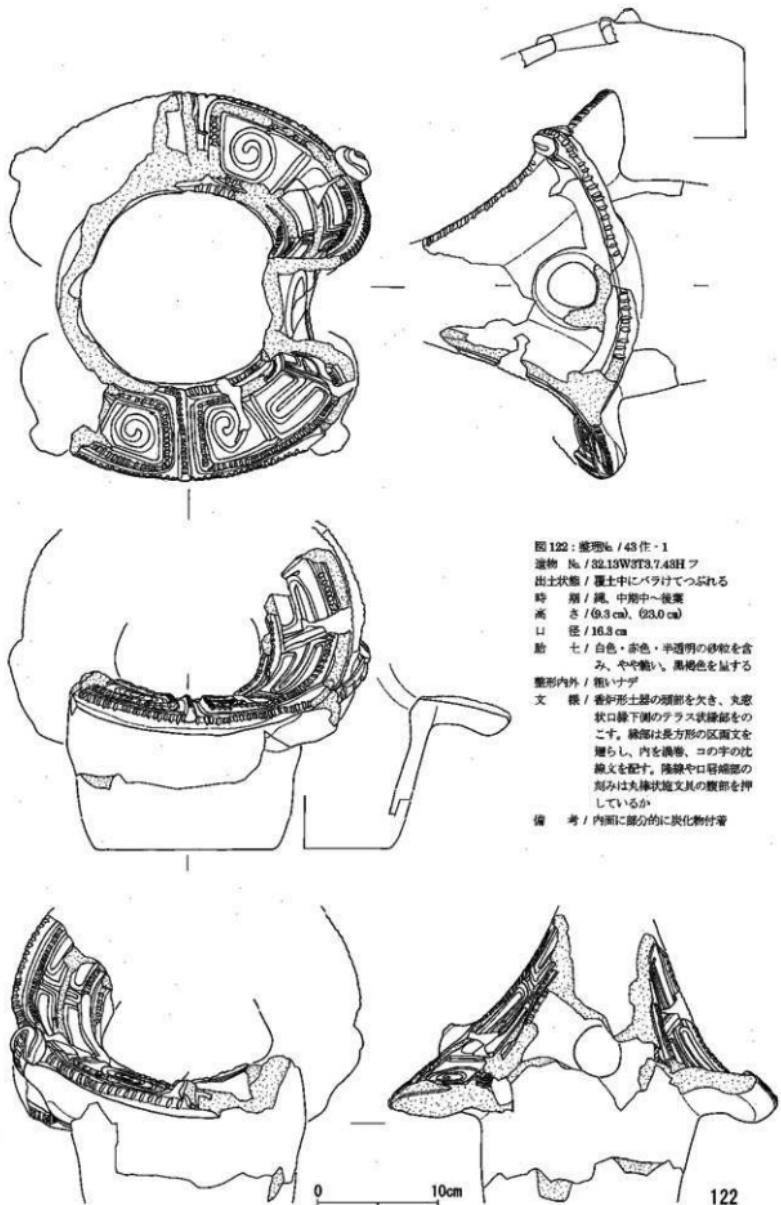


図 122：整理6 / 43 作・1
 產物 No. / 32.13W3T3.74SH フ
 出土状態 / 覆土中にバラけてつぶれる
 時 種 / 鋼、中期中～後葉
 高 さ / 9.3 cm. (23.0 cm)
 口 径 / 16.3 cm
 肩 七 / 白色、赤色、半透明の砂粒を含
 み、やや脆い。黒褐色を呈する
 整形内外 / 手いナゲ
 文 標 / 香炉形土器の頸部を大き、丸窓
 状口縁下側のテラス状縫合をの
 こす。縫合は長方形の区画文を
 連らし、内に横巻、コの字の沈
 線文を配す。隆線や口唇部の
 凹みは大輪状旋文具の腹部を押
 しているか
 備 考 / 内面に部分的に炭化物付着

第 44 図 43 号住居址出土土器実測図 その 3 (1:4)

遺物 図化できた土器は10点ある（第42図115～第45図124）。口縁部に褶曲文をもつ（116、118、119）、胴部を垂下沈線で埋める（115、117、120）、地文に縄文をもつ（121）、浅鉢（123、124）、香炉形土器（122）がある。124は表面が赤色塗彩されている。このほかに土製円板が1点出土している。

115～120を見る限り、縄文時代中期後葉I期と考えられ、121は時期を異にしている。前者が一括出土しているのに対し、121は覆土中に散在していたことから、流入した土器である可能性がある。

石器は石鏃3、石鏃未成品2、石錐2、不定形石器（ob）6、打製石斧4がある（第46図143～152）。これらから本址は縄文時代中期中葉末～後葉I期に属すると考えられる。



図 123：遺物 No. / 43 住 - 13
遺物 No. / 32.13W3U3.16.43H ブ
出土状態 / 表面を上にしてつぶれ。口縁は南西に向く
時期 / 縄・中期後葉
高さ / 0.17 cm
口径 / 0.48 cm
胎土 / 細砂多く、石灰・長石を含む
整形内 / ていねいなナゲの上を削ぎ
外 / 口縫は堅い書き、脚部はていねいなラナゲ
様 / 口縫部にU字彫痕と下に連續カマボコ状文の跡跡

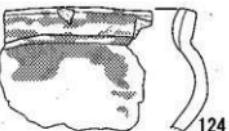
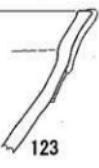
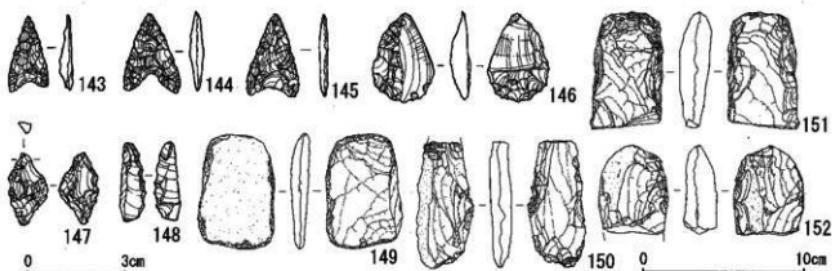


図 124：遺物 No. / 43 住 - 12
遺物 No. / 32.13W3U3.12.43H ブ
出土状態 / 覆土中に散在
時期 / 縄・中期
高さ / 0.13 cm
胎土 / 白色の細砂と粘土をわずかに含み、黒へ開色で焼い
整形内外 / ていねいなナゲ
文様 / 赤色塗彩が外面にのこる。浅鉢

0 10cm

第45図 43号住居址出土土器実測図 その4 (1:4)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	色調	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
143	W3U3.8.43H7	石鏃	ch	-	23.0	12.1	3.7	0.7	脚部左右非対称	
144	W3T2.5.43H7	石鏃	ob	茶系透明	23.8	17.1	4.1	1.1		
145	W3T4.4.43H7	石鏃	ob	茶系透明	25.1	16.0	2.7	0.8		
146	W3U2.13.43H7	石鏃	ob	茶系透明	27.2	19.0	6.1	2.0		
147	W3T3.19.43H7	石鏃	ob	茶系透明	22.0	11.9	7.2	1.4		
148	W3U3.27.43H7	石錐	ob	茶系透明	24.0	7.2	4.5	0.5		
149	W3T3.20.43H7	打製石斧	I	砂	69.5	46.6	10.5	47.2	素材剥片の厚みの著しい偏縁のみ調整	
150	W3U3.11.43H7	打製石斧	(I)	綠凝	(75.0)	(33.7)	10.4	40.0	刃部欠損あり	
151	W3U3.7.43H7	打製石斧	(I)	砂	(70.0)	43.6	16.5	73.1		
152	W3U3.5.43H7	打製石斧	(I)	綠凝	(53.2)	41.7	18.6	(53.2)		

第46図 43号住居址出土石器実測図 (143～148は1:1.5、149～152は1:3)

(7) 44号住居址

調査の経過 線路上区北側のJR中央本線際に発見された住居址である。線路上区北側は大半の地山ローム層が削られ、耕作などによる搅乱が著しい。北側に落ち込みらしいものを確認したが、当初は地傾斜と考えていた。耕作土下は石が多量に混入する黒褐色土で、線路下区においても遺構上部に確認された層位である。この土層からは、縄文時代前期初頭から弥生時代に至る遺物が出土し、扇状地に流出した土石と考えられる。

この層を掘り下げる途中で、傾斜面に平石が弧状に並んでいるのが確認でき、これを敷石住居址44号住居址とした。敷石は暗褐色土上に構築され、内側には石がなく、硬化面も確認されなかった。また炉も発見されなかった。

敷石下には大小の小堅穴と柱穴があった。敷石と重複していく同時期に存在したとは考えにくい。

遺構 本址は敷石部と掘り込みが判明し、住居の掘り込みは残存部から隅丸方形を呈し、推定長軸 $7.0 \times$ 短軸 6.0 m の住居址と思われる。敷石部は南西部が柄部と考えられ、柄鏡形を呈すると推定される。柄部は $1.3 \times 1.0\text{ m}$ の舌状で、主体部は緩やかな弧状を呈し、縁辺にのみ敷石されていた。主体部は推定 $4.0 \times 4.0\text{ m}$ である(第47図)。

壁は褐色土からローム層を掘り込み、かなり緩やかにダラダラと傾斜する。最大残存高は南側で 27.7 cm を測る。

敷石柄部が入口部と考えられ、主軸はほぼ南西—北東であり、これが長軸である。

地山黄色砂礫層上に黒褐色土または暗褐色土が $20 \sim 30\text{ cm}$ 堆積し、その上に平石が敷かれていた。鉄平石や平坦面をもつ河原石を用いて弧状に敷き、南西部は柄部と考えられる突出部となる。長さ $5 \sim 50\text{ cm}$ の石が使用されていた。敷石下部にも床らしい硬化面はなかった。

柱穴はP1～P8及び小堅穴108P～110Pが検出され、このうちP2、P1、108P、110Pが敷石直下に重複する。壁際にあるP3、P4、109Pは中華なべ状の断面形状をもち、柱穴らしくない。P6、P7、P8はその並びから、P6、P7は敷石内側にあることから、P8は外側にあることから、主柱穴とは断定できない。またP4、P5はタンコブ状の突出部にあり、地山からは $4 \sim 5\text{ cm}$ の深さであるが、壁上からは 16 cm 前後の深さの穴となる。これらのことから、不明確だがP3、P4、109PとP8が主柱穴とされたのであろうか。

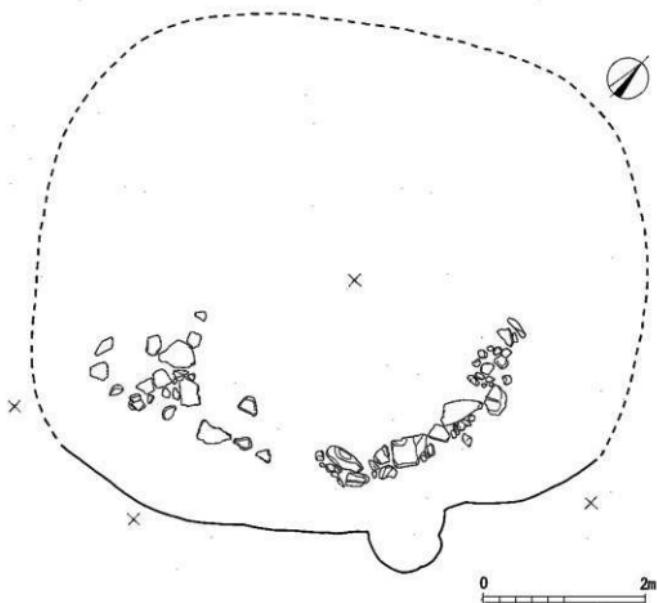
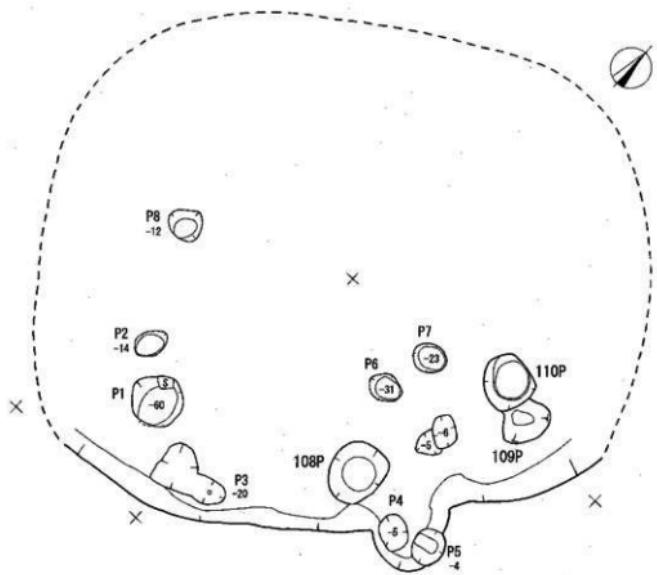
敷石下のピットは、この敷石に伴わないと考えられるが、重複する住居址があった可能性がある。P1、108P、110Pは口径が $70 \sim 80\text{ cm}$ 、深さは $59 \sim 70\text{ cm}$ だが、前述のとおり床と炉がなかった。

炉は敷石面また地山面でも検出されなかった。炉のない点では、敷石は環状列石とも考えられるが、掘り込みがある点で否定されようか。住居址掘り込みや残存敷石からは、炉があってもよさそうな所まで掘り広げてはみたのだが、焼土すら見られなかった。この点をどう考えたらよいのだろう。

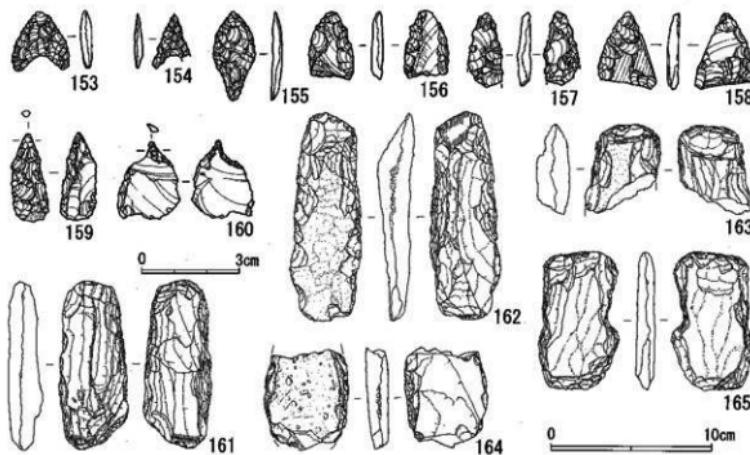
遺物 本址覆土中の土器で復原図化できたものはない。覆土が流出土石であることから、縄文時代前期から弥生時代の遺物を包含している。本址に確実に伴う遺物は明らかではない。

石器は石鎚4、石鎚未成品2、石錐2、不定形石器(ob)9、打製石斧5、磨石2、凹石2、石錘1などがあるが、本址に伴うとは言い難い(第48図153～第49図170)。

本址は敷石住居であることと、覆土中の遺物の様相から、縄文時代後期前葉と思われる。

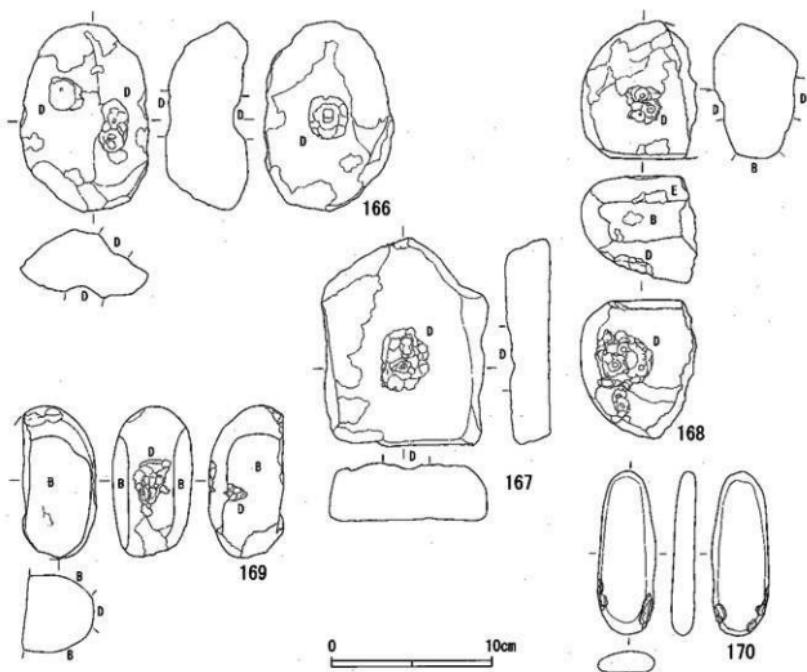


第47図 44号住居址実測図(1:60)、下:44号住居址敷石実測図(1:60)



No.	遺物番号	遺物名	組分類	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
153	X2H17.6.44Hクロカワ	石鎌	ob	茶系透明		18.8	17.6	3.5	0.8	
154	X2H16.12.44Hアソ	石鎌	ob	黒系透明		16.9	(11.0)	2.1	(0.2)	側縁鋸歯状
155	X2G15.7.44Hクロカワ	石鎌	ob	茶系透明		27.0	13.0	3.0	0.8	有茎石鎌
156	X2H16.6.44Hクロカワ	石鎌	ob	茶系透明		20.6	13.3	3.0	1.0	周縁のみ調整
157	X2H16.7.44Hクロカワ	石鎌	ob	茶系透明		(22.5)	10.7	4.1	(0.9)	周縁の押圧剥離が基部に及び破損
158	X2G15.29.44Hアソ	石鎌	ob	黒系透明		21.8	17.5	3.4	1.2	板状原石素材。 2辺を折断し調整
159	X2I17.1.44Hクロカワ	石鎌	ob	茶系透明		26.7	10.8	6.1	1.4	
160	X2G15.24.44Hアソ	石鎌	ob	黒系透明		23.5	19.1	5.2	1.8	薄い板状原石素材
161	X2H15.9.44Hアソ	打製石斧	I 緑凝			101.7	40.5	19.7	116.3	刃部ごく一部欠損
162	X2H16.2.44Hクロカワ	打製石斧	I sh			127.2	43.4	20.0	106.3	
163	X2I16.1.44Hクロ	打製石斧	(I) 黏			(54.2)	(37.7)	(21.3)	(46.9)	頭部
164	X2H16.13.44Hアソ	打製石斧	(I) ho			(61.5)	50.0	11.5	(50.6)	
165	X2H16.3.44Hクロカワ	打製石斧	IV 緑片			83.9	48.8	10.6	76.2	一側縁の抉り小さい

第48図 44号住居址出土石器実測図 その1 (153~160は1:1.5、161~165は1:3)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
166	X2G15.5.4Hカツ	磨石類	磨石類	凝	116.0	80.0	53.0	414.9	
167	X2G15.14.4H7ン	磨石類	磨石類	安	128.0	102.0	28.0	802.3	
168	X2H15.8.4H7ン	磨石類	磨石類	凝	(85.0)	(70.0)	(65.0)	(471.7)	
169	X2H15.5.4Hカロ	磨石類	磨石類	砂	(92.0)	(45.0)	49.0	(304.0)	
170	X2I17.2.4Hカツ	不定形石器	綠片	綠片	100.0	36.0	13.0	73.9	側縁下部に剥離痕あり。敲打痕か?

第49図 44号住居址出土石器実測図 その2 (1:3)

(8) 45・47号住居址

調査の経過 遺構検出中に38号住居址の南側約2m付近と37・38号住居址の間にそれぞれ焼土が検出され、前者を45号住居址、後者を47号住居址とした(第50図)。

遺構 45号住居址:形状・規模・壁などはまったく不明である。焼土周辺にローム土が広がるが、硬化した床ではない。周辺に柱穴の候補は多く存在するが特定できない。

炉は地床炉と考えられる。70×50cmの不整形を呈し、約10cmの赤化したローム土が見られ、長期の使用が考えられる。

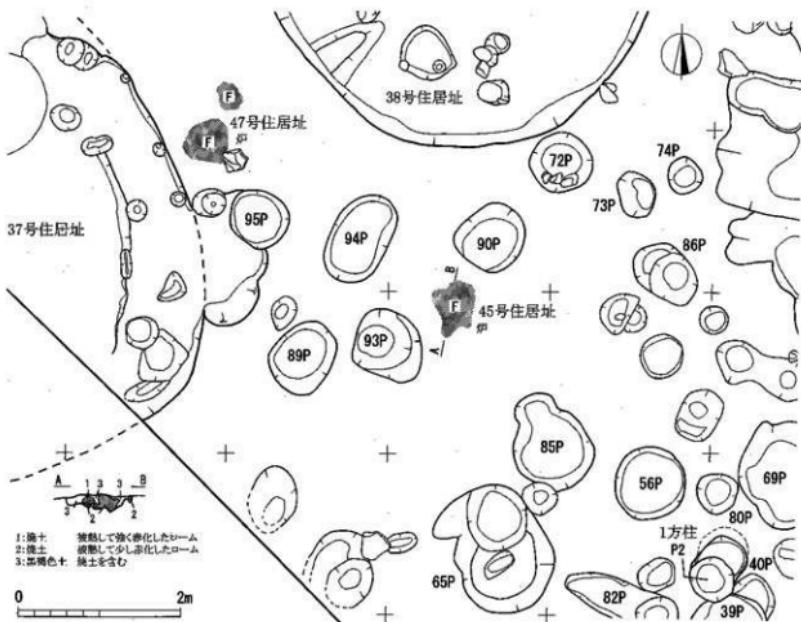
本址の時期は不明である。

47号住居址:形状・規模・壁・床などは不明である。焼土は2ヵ所あり、地山ロームが赤化していた。ここで火焚きされたことは確実である。

柱穴は周辺にある小堅穴及び小穴のうちのどれかと考えられるが判明しない。

焼土北東に30×25cmの石があり、炉石とも考えられる。焼土は石の北西に10×50cmの長方形と北東に38×30cmの不整長円形の広がりをもち、地山ロームが被熱して赤化していたが、度合いは弱く淡い色調であった。

石圍炉とすれば縄文時代中期中葉、地床炉とすれば縄文時代中期初頭以前と捉えられるが、判然としない。



第50図 45・47号住居址実測図 (1:60)

(9) 46号住居址

調査の経過 線路下区中央西端に検出された。遺構検出時に焼土と平坦な石を検出し、これを石囲炉の残存と考え 46号住居址とした。

炉は1号方形柱穴列P1に焼土が切られ、1方柱より古いことが判明している。周囲には多くの小窓穴や小穴があるが、壁は検出されなかった。

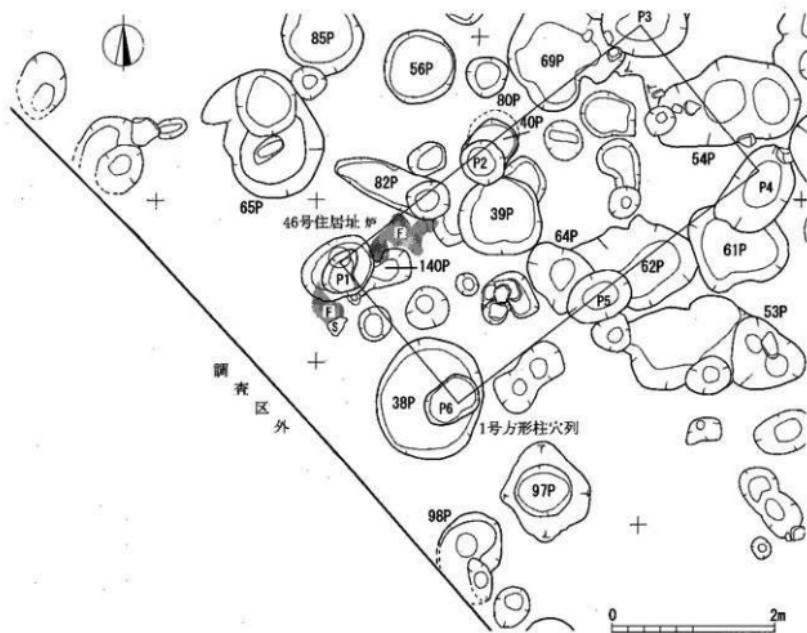
遺構 炉の発見のみで、そのほかは検出されていないため、形状、規模などは不明である。

炉の周辺の床は地山ローム層であり、硬化面は見つからなかった。やや締まったローム面は確認されたが、広がりは捉えられなかった(第51図)。

柱穴は周辺の小窓穴か小穴のうちのどれかが該当すると考えられるが、明確ではない。

炉は南東側に $25 \times 20\text{ cm}$ の鉄平石を敷き、その北西部に $50 \times 30\text{ cm}$ の勾玉状に焼土が広がる。また、炉の北東部に炉から離れて $95 \times 55\text{ cm}$ の不整形の焼土がある。この焼土が勾玉状に見えるのは、140Pと1方柱P1に切られているためである。本来は石囲炉であったと思われるが、ほかの炉石は抜かれてしまったのであろう。

遺物 本址覆土は未確認であり、遺物から時期を捉えることは難しい。炉の形態からは、縄文時代中期中葉と考えられよう。



第51図 46号住居址実測図 (1:60)

(10) 48号住居址

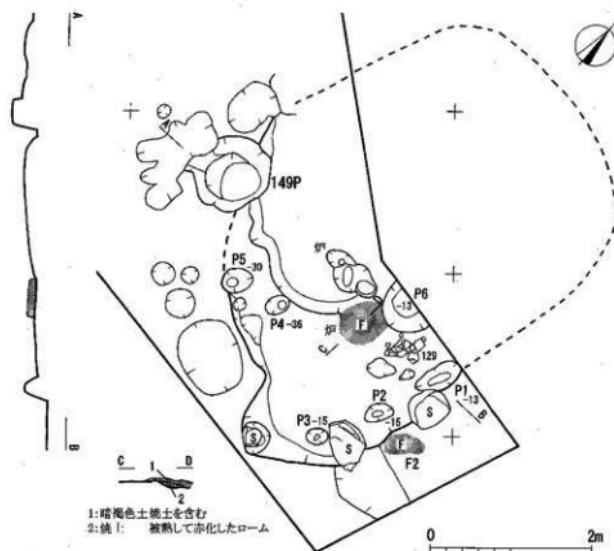
調査の経過 道上区に検出された住居址である。遺構検出段階では、暗褐色土面に黒褐色土の落ち込みをいくつか確認したが、そのほとんどが植栽による搅乱であった。さらに掘り下げてローム面で見たところ、暗褐色土の落ち込みが検出され、数基の小竪穴の集まりと考えられた。これらを掘り進めるうちに、ローム土の平坦面及び炉を検出するに至り、小竪穴群ではなく住居址と確認し48号住居址とした。炉の東側に一括土器が出土している(第53図129)。

遺構 全体が検出できていないが、推定 5.0×3.8 mの小判形ないし隅丸方形を呈する。長軸は南-北方向にあると考えられる。ローム層を掘り込み、東壁に最大残存高27cmを測る。なだらかな傾斜をもち、若干崩れていると思われる。床は硬化面が見られず、ローム土がそのまま床と考えられる。壁際にある小穴が壁柱穴と考えられ、32・33住と同様に、P4とP5がほかと比べ深いことから、主柱穴として存在した可能性がある。壁柱穴、主柱穴とともに大きさにバラつきはあるが、P1～P3が13～15cmの深さに対し、P4、P5が30～36cmとより深く、その用途に違いがあるのではないか(第52図)。

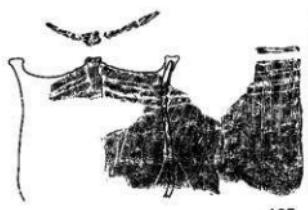
炉は住居址の中央から南東に寄ったところにあると思われ、58×48cmの不整椭円形に焼土が見られた。5cmほどの深さをもつ凹みとなり、ローム土を約5cm赤化していた。

西側隅で149Pと重複するが、遺構検出では149Pが48住を切り、149Pが新しい。

東壁上にF2があり、48住に切られた様子がないことから、F2が新しい。



第52図 48号住居址実測図 (1:60)

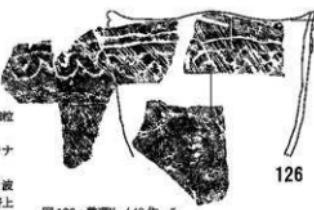


125

図 125：整理 No. / 48 住 - 7
遺物 No. / 32.17Y7.1 クロカブ
出土状態 / 包含層中に散在
時 期 / 開 / 前期初頭
高さ / (10.1 cm), (11.8 cm)
口径 / (2.8 cm)
胎 土 / 細砂少なく、石英・雲母の細粒
を含む
整形内外 / 凸凹がのこる。斜め方向のヘラナ
デ

文 標 / 口縁に 3 条の横溝平隕帶と波
頂部に角状の網隕帶。胎座上
と胎座中央まで網隕状条痕文
を施す。施文具は三本一起か。
口縁部は開張り方形を呈する
と思われる

備 考 / 器外面にスグが付着している



126

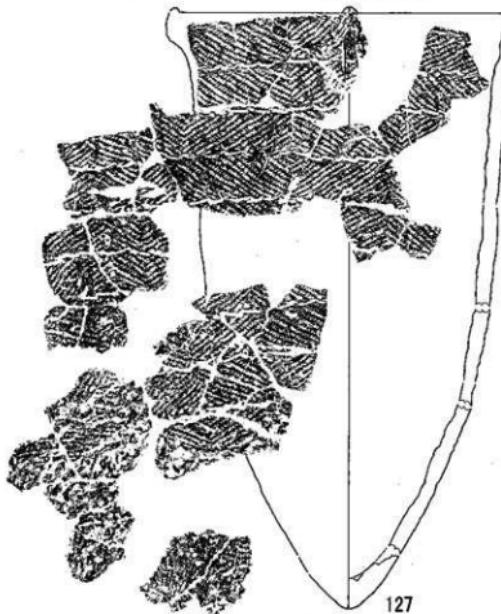
図 126：整理 No. / 48 住 - 5
遺物 No. / 32.17Y7.11.48HLP6
出土状態 / PE 内に散在
時 期 / 開 / 前期初頭
高さ / (11.3 cm), (12.0 cm) 口 径 / (16.4 cm)
胎 土 / 細砂少なく、石英・長石と雲母細粒
を多く含む

整形 内 / 指頭底をのこし、低いナデ

外 / 指頭底をのこし、低いナデ

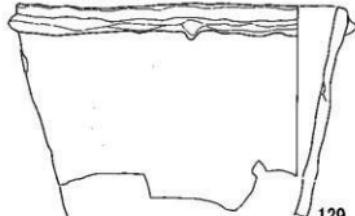
文 標 / 層半強密を付け、胎座上及びその
付近に網隕状条痕文を施す

備 考 / ポ部から胎座にかけて、炭化物、
スグが全面的に付着する



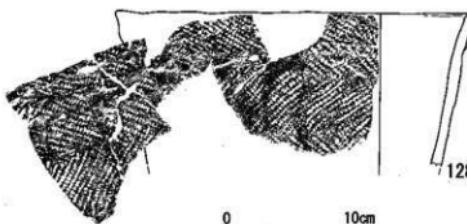
127

図 127：整理 No. / 48 住 - 6
遺物 No. / 32.17A7.4.48H1 プ
出土状態 / 破片散在
時 期 / 開 / 前期初頭
高さ / (49.0 cm) 口 径 / (28.1 cm)
胎 土 / 粗砂を含み、灰白色粒多い。石英を含む
整形 内 / 織地底でアバタ状
文 標 / 口縁に低い網隕帶。器面に LR と RL の結束した
原体を横位に施す。部分的に原体の上下を書き、
變形の構成を呈する



129

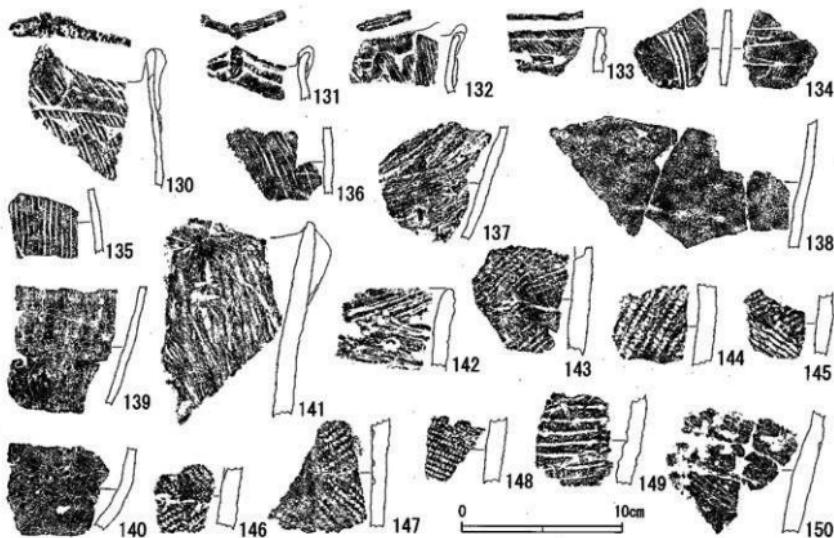
図 129：整理 No. / 48 住 - 1
遺物 No. / 32.17Y7.9.48H プ
出土状態 / 内面を上に横位。開き状につぶれる
時 期 / 開 / 前期初頭
高さ / (7.6 cm)
口径 / (27.1 cm)
胎 土 / 細砂少なく、石英をわずかに含む。磁性を多く含む
整形 内 / 指頭底のこるが、ヘラの横ナデと若干の縦ナデ
外 / 指頭底のこるが、ヘラ縦・横ナデ
文 標 / 断面三角及び口の横位胎座付す。ほかは無文



128

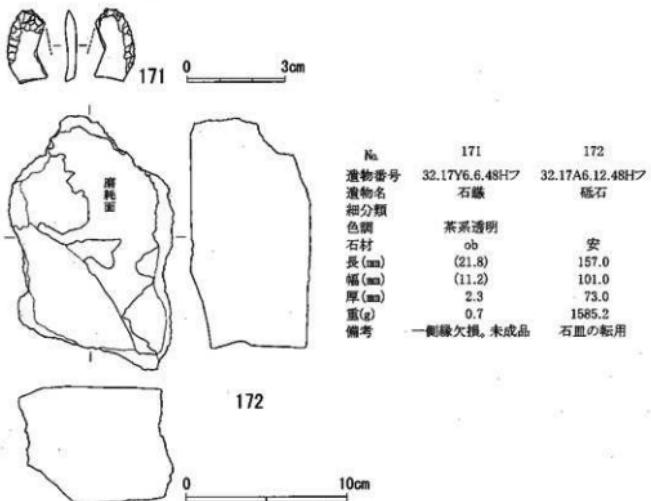
図 128：整理 No. / 48 住 - 8
遺物 No. / 32.17X7.1.48H プ
出土状態 / 破片散在
時 期 / 開 / 前期初頭
高さ / (12.6 cm)
口径 / (29.6 cm)
胎 土 / 細砂、灰白色粒多く、石英を含む。
織地はあまり多くない
整形 内 / 縦ナデ
文 標 / 口縁にクガ状の低い陥窓。胎座上及び器面に織文
LR を異方向に付し羽状を作出している。同一原
体による施文

第 53 図 48 号住居址出土土器実測図 (1:4)



No.	遺物番号	器形	部位	文様構成要素	内面形状	備考
130	32.17A6.10.48Hフ	深鉢	口縁～頸部	条痕文+貼付隆帯、口唇貝殻模縁文	指頭ナデ	表面スス付着、条痕文は貝殻条痕
131	32.17A7.4.48Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	口唇の条痕文は貝殻条痕
132	32.17A7.6.48Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	条痕文は板目
133	32.17V7.14.48Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	指頭ナデ	条痕文は貝殻?
134	32.17A7.6.48Hフ	深鉢	胴部	条痕文	ナデ	施文具不明、曲線文
135	32.17V7.14.48Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	貝殻条痕
136	32.17A7.4.48Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	施文具不明
137	32.17V7.13.48H.P2	深鉢	胴部	擦痕様の条痕文	ヘラナデ	内面炭化物付着
138	32.17A7.6.48Hフ	深鉢	胴部	無文	指頭ナデ	雲母微細片含む
139	32.17V7.8.48Hフ	深鉢	胴部	条痕文	指頭ナデ	微盾状条痕
140	32.17A7.6.48Hフ	深鉢	脚下部		指頭ナデ	
141	32.17A6.10.48Hフ	深鉢	口縁部	条痕文+貼付隆帯	ナデ	繊維含む、灰白色粒多量に含む
142	32.17V7.14.48Hフ	深鉢	口縁部	単軸輪条体(異方向)	ナデ	繊維、灰白色粒多量に含む
143	32.17A7.4.48Hフ	深鉢	胴部	織文(羽状)	ナデ	繊維少量含む
144	32.17V7.9.48Hフ	深鉢	胴部	織文(RL)	荒れて不明	繊維含む
145	32.17V7.8.48Hフ	深鉢	胴部	織文(羽状)	ナデ	繊維少量含む
146	32.17V7.8.48Hフ	深鉢	胴部	織文(羽状)	荒れて不明	繊維少量含む、結節羽状
147	32.17A6.9.48H.P5	深鉢	胴部	織文(羽状)	荒れて不明	繊維含む
148	32.17V7.11.48L.P6	深鉢	胴部	織文(羽状)	ナデ	繊維少量含む
149	32.17V7.8.48Hフ	深鉢	胴部	単軸輪条体	荒れて不明	繊維多量に含む
150	32.17V7.8.48Hフ	深鉢	胴部	無文	ナデ	繊維多量に含む

第 54 図 48 号住居址出土土器拓影図 (1:3)



第55図 48号住居址出土石器実測図 (171は1:1.5、172は1:3)

遺物 復原図化できた土器は5点ある(第53図125~129)。125、126は東海木島系土器であり波状線となり、125は小把手が波頂部に付けられる。頸部がくびれた深鉢で、頸部~口縁部に扁平隆帯を付け、櫛齒状条痕を施す。胴部中央付近まで施文し下部は無文である。127、128は含繊維土器で羽状繩文が付けられる。口縁部は縱隆帯(127)と若干の肥厚口縁(128)で、羽状繩文が施されている。原体は結節している。127は尖底部が無文である。129は無文の土器で繊維を多く含む。口縁部には断面三角形ないしはコ状の横位隆帯を付ける。

第54図の拓影図130~132は波状線で波頂部から垂下隆帯を付け、口縁部~頸部に扁平隆帯を付け、その上に条痕文を施している。口唇は貝殻腹縁文(130)、貝殻条痕(131)、条痕文(132、133)が付けられている。条痕文は櫛齒状施文具によるものと貝殻条痕があり、32・33住に比べ貝殻条痕の比率が高い。134は外面に条痕文が付けられているが、内面に横位の条痕がヘラで描かれている。整形痕からは不明である。137は擦痕状の条痕で神之木台式と考えられる土器片である。138~140は木島系土器の胴下半部と考えられ、無文である。

141~150は含繊維土器で、141は鼻状の突起が付けられ、櫛齒状条痕文と擦痕状の条痕がほぼ縦位に施される。142、149は擦糸文施文であるが、142はL+Rを一組にしている。そのほかはほとんどが羽状繩文であり、含繊維量に多少のバラつきが見られる。

石器は石鎌1、磨製石斧1、砥石1が出土している(第55図171・172)。そのほかに土器片錐が1点出土している。

遺物から、本址は縄文時代前期初頭に属すると考えられる。

2. 方形柱穴列と遺物

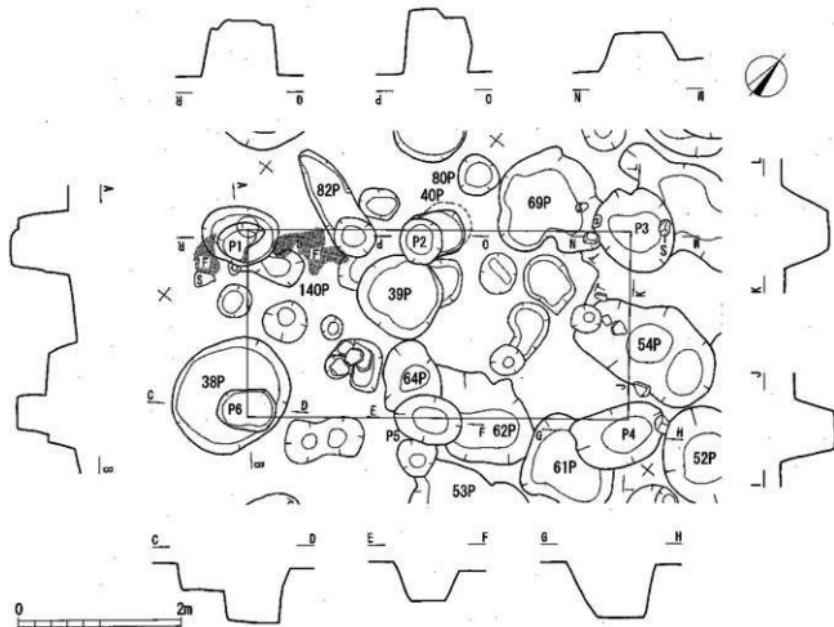
(1) 1号方形柱穴列

調査の経過 線路下区中央からやや南に寄ったところに位置する。遺構検出時にはそれぞれ小堅穴として掘り進めたが、後に大きさや深さなどに類似があり、かつ、配置を見たところ長方形に並ぶことから1号方形柱穴列とした。46号住居址と1方柱P1は重複する。本址が新しいことは46住で述べたとおりである。

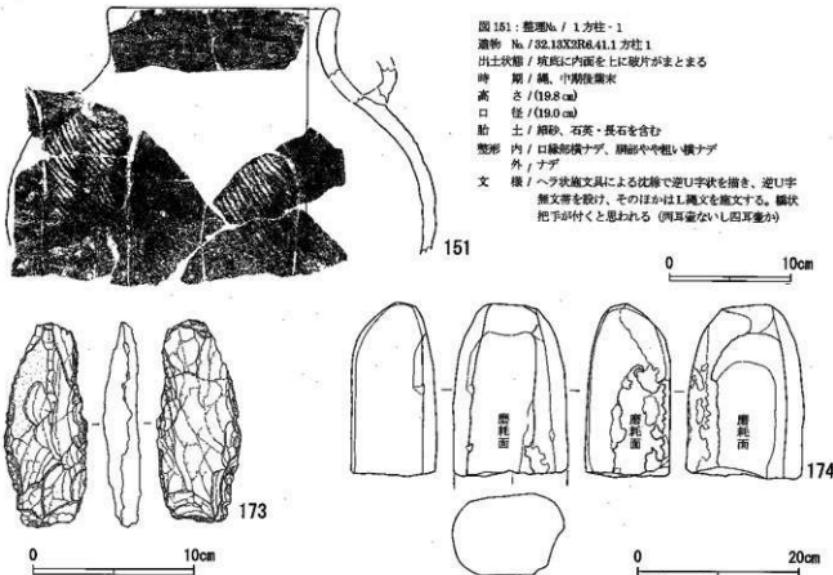
遺構 1方柱はP1～P6の6本と思われる。長軸はほぼ南西～北東にあり、長軸4.68×短軸2.6mを真芯で測るが、等距離ではない（真芯計測）（第56図）。

口径は74×50cmのP6から、111×92cmのP3まで違いはあるが、深さはどれも54～77cmと深い。前述のようにP1は46住炉を切り、P6は38Pを切って掘られている。

遺物 各柱穴覆土内の遺物は、すべて縄文時代後期前葉が最も新しい土器である。これはP1～P6とともに例外はない。第57図151は、P1の坑底に内面を上にして敷かれていた。柱の礎としたかは不明である。



第56図 1号方形柱穴列実測図 (1:60)



No.	遺物番号	遺物名	縁分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
173	X2R6.40.1方柱P1	打製石斧	I	ho	121.8	49.7	18.3	131.5	一側鋸大きく外湾する
174	X2Q6.19.38P-1方柱P6	砥石	砥石	安	(213.0)	(143.0)	(104.0)	5100.0	立石か。磨って整形している

第 57 図 1 号方形柱穴列出土遺物実測図 (土器 151 は 1:4、石器 173 は 1:3、174 は 1:6)

のことから、本址は縄文時代後期前葉の所産と考えられる。

本址に類似した方形柱穴列は、近年、茅野市を中心に多く発見され、塩之目尻遺跡（2006 茅野市教育委員会）では 29 基の方形柱穴列を検出している。それによると、方形柱穴列の所属時期を曾利 III～IV 式期～掘之内 I 式期の間に比定していくと、本址とも時期的には符合する。

さて、このような方形柱穴列は、いかなる構造物であったのか。諏訪郡においては、原村阿久遺跡の方形柱穴列を初現として、多くの類例が提示されている。現在、上屋構造が明確でない点で住居構造物としてよいものかは判断が難しい。今回も P1 では約 20 cm の柱痕を確認し、柱を立てたことは確実であろうと考えるが、果たして住居柱であったのかというとその根拠はない。今後のさらなる研究を待ちたい。

3. 小豎穴と遺物

小豎穴は合計 93 基が検出され、時期は一覧表のとおりである。各小豎穴は一覧表を参照願うとして、本項では黒耀石埋納の 46P とコハク出土の 58P、一括土器が出土した 69P、黒耀石出土の 132P 及び、黒耀石と一括土器出土の 138P を記述する（第 58 図）。

(1) 46P

線路下区東側端付近に検出された。北西部で 145P と切り合う。推定 48×43 cm の隅丸方形を呈し、深さ 21 cm を測り、断面はタライ状を呈する。46P 検出時から黒耀石が見られ、ほぼ坑底上まで黒耀石片が散在していた。30 点の原石及び剥片が出土した（写真図版 4）。埋土上部から坑底上までと、バラバラにある点で、埋納とは言い難いのかもしれないが、素材である原石が多い点に注目される。

(2) 58P

線路下区南隅付近で検出された。口径 91×70 cm、深さ 51 cm を測り、平面形は長梢円形、断面形は桶状を呈する。覆土は褐色土で、岡谷で言うところの「カツ 1」に比定できそうな土である。縄文時代中期後葉の土器片とともに、坑底直上の中央付近にコハク垂飾りが出土した。コハク垂飾りは、長さ 4.6 cm、幅 4.3 cm、厚さ 2.1 cm の正面方形を呈し、厚さ部分に短軸に沿って穿孔されている（第 59 図 175）。穿孔は両側から行われテープ状となる。穿孔内は若干ざらつき、穿孔回転痕は見られない。コハク出土は岡谷市内に 5 遺跡、諏訪郡内に 16 遺跡ある。この数は全国屈指であり、その在り方に注視される。

(3) 69P

線路下区中央付近に検出された小豎穴である。東側を 1 方柱 P3 に切られ、平面形状は不整円形を呈する。口径は推定 140×132 cm、深さ 27 cm を測り、断面タライ状の浅い小豎穴である。

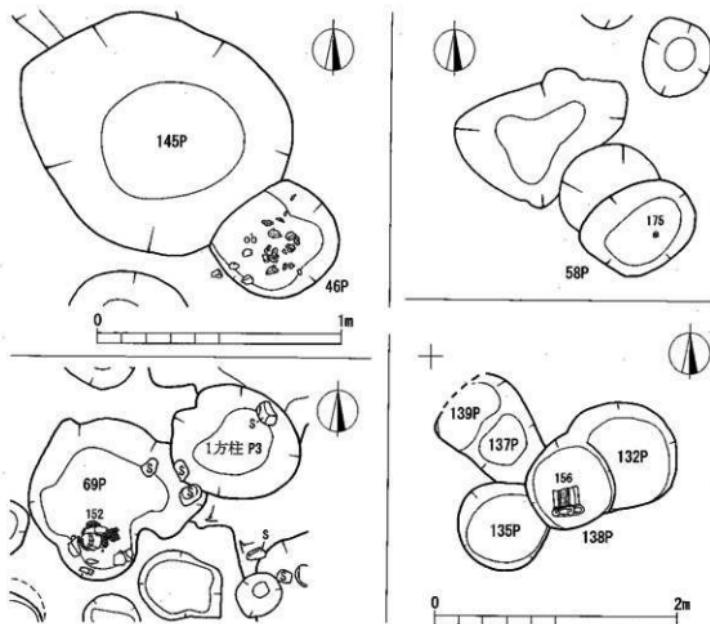
黒褐色土の覆土中に一括土器が出土した（第 60 図 152）。胴下部と底部が正位にあり、周辺に胴部破片が散在し、立位の底部下に口縁部破片が小豎穴壁に沿うようにあった。69P は焼土がなく炉とは考えられず、埋甕とも考えられない状況である。口縁部破片が底部下にあり、壊れた土器の口縁部付近の破片を壁際に立て、その内側に胴部へ底部を置いたとしか考えられない。

(4) 132P

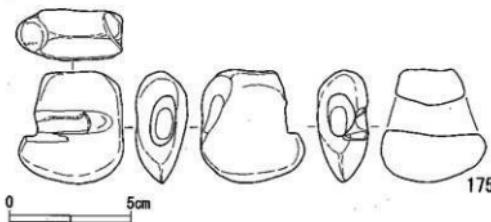
線路上区中央に位置する。138P、125P、137P、139P と複雑に重複し、群を形成する。

132P の覆土は上部暗褐色土、下部は褐色土であり、この褐色土は「カツ 1」に比定される。

暗褐色土中から黒耀石の出土が見られ、ブレイドテクニック型のコアが出土している（写真図版 4）。下部の褐色土中からも土器や黒耀石の出土があり、黒耀石コアについては埋納の可能性がある。口径推定 94×60 cm、深さ 76.2 cm を測り、出土土器は縄文時代後期前葉が最も新しい。



第58図 小堅穴 46・58・69・132P・138P 実測図 (46Pは1:20、そのほかは1:40)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
175	X2R11.10.58P	石製装身具	重飾	コハク	46.0	43.0	21.0	20.9	ほぼ完形。厚み部分に短軸方向で穿孔

第59図 小堅穴 58P 出土コハク実測図 (1:2)

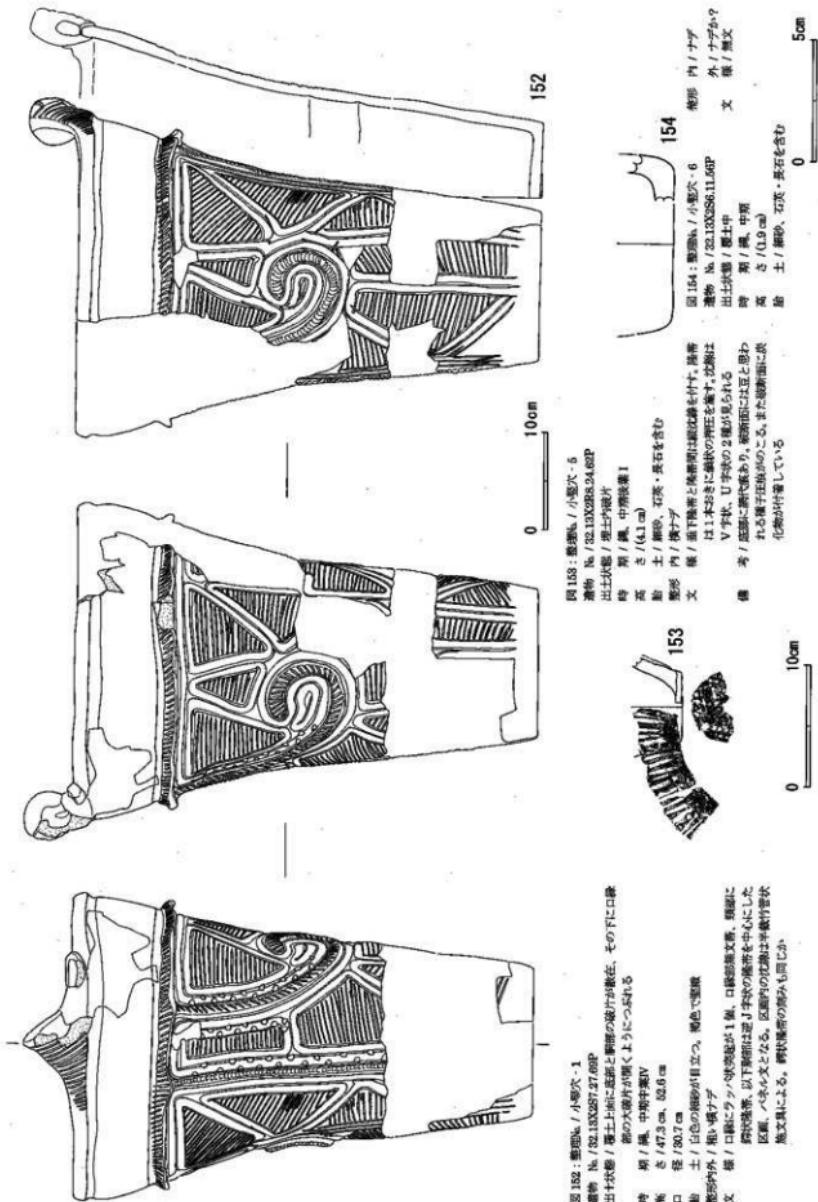


図 152：壺形瓶 / 小窓穴 - 1
標物 No. 152.150527.27.68P
出土状態 / 壺子上部に左耳と右耳の成形が残る。その下に口縁
部の大腹が開くようにつぶれる。
時 期 / 桶・中期・後期
高さ / 47.3 cm. 52.0 cm
径 / 30.7 cm.
口 縁 / 白色の漆が目立つ。緑色で壓紋
施文部外 / 裸い壺・ナマヅ
文 横 / 口縁にツバ付先端1例、口縁施文部、肩部に
斜め施文部、以下斜め施文部J字形の施文を示した。
区域、ハモル文となる。区域別の口縁は半斜めと管状
施文具による。斜め施文の痕も同じ。

図 153：壺形瓶 / 小窓穴 - 6
標物 No. 153.150526.11.61P
出土状態 / 壺子上部に左耳と右耳の成形が残る。その下に口縁
部の大腹が開くようにつぶれる。
時 期 / 桶・中期・後期
高さ / 47.3 cm. 52.0 cm
径 / 30.7 cm.
口 縁 / 白色の漆が目立つ。緑色で壓紋
施文部外 / 裸い壺・ナマヅ
文 横 / 口縁に断続的V字形の施文が見られる。
側面には豆・思わ
れら漆子状のものから、また斜め施文に於
ける漆が付着している。

図 154：壺形瓶 / 小窓穴 - 6
標物 No. 154.150526.11.61P
出土状態 / 壺子上部に左耳と右耳の成形が残る。その下に口縁
部の大腹が開くようにつぶれる。
時 期 / 桶・中期・後期
高さ / 47.3 cm. 52.0 cm
径 / 30.7 cm.
口 縁 / 白色の漆が目立つ。緑色で壓紋
施文部外 / 裸い壺・ナマヅ
文 横 / 口縁に断続的V字形の施文が見られる。
側面には豆・思わ
れら漆子状のものから、また斜め施文に於
ける漆が付着している。

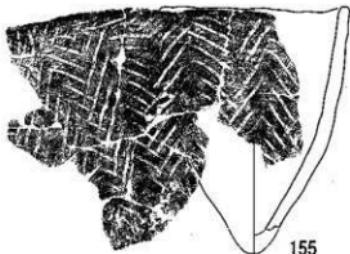


図 155 : 繩文 No. / 小堅穴 - 4

遺物 No. / 32.17A6.11.148P

出土状態 / 破片散在

時 期 / 初頭

高さ / (18.2 cm)

口径 / (15.6 cm)

胎 土 / 細砂、わずかに石英を含む。繊維は細く少ない

整形 内 / やや凸凹する。模及び斜のナデ

整形 外 / やや凸凹する。ナデ

文様 / 2とrの筋系を2本一组で軸絡条件に巻き、回転施文している。方向を換え施文することでへの字状を描出している

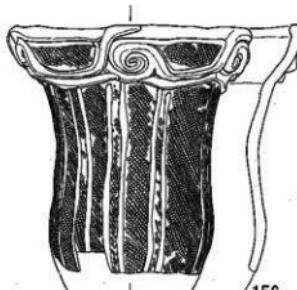


図 156 : 繩文 No. / 小堅穴 - 2

遺物 No. / 32.13X2D21.22.138P

出土状態 / 抗底に横位

時 期 / 初頭・中期後葉Ⅲ

高さ / (20.4 cm)

口径 / (19.6 cm)

胎 土 / 含有物少い

整形 内 / 手打

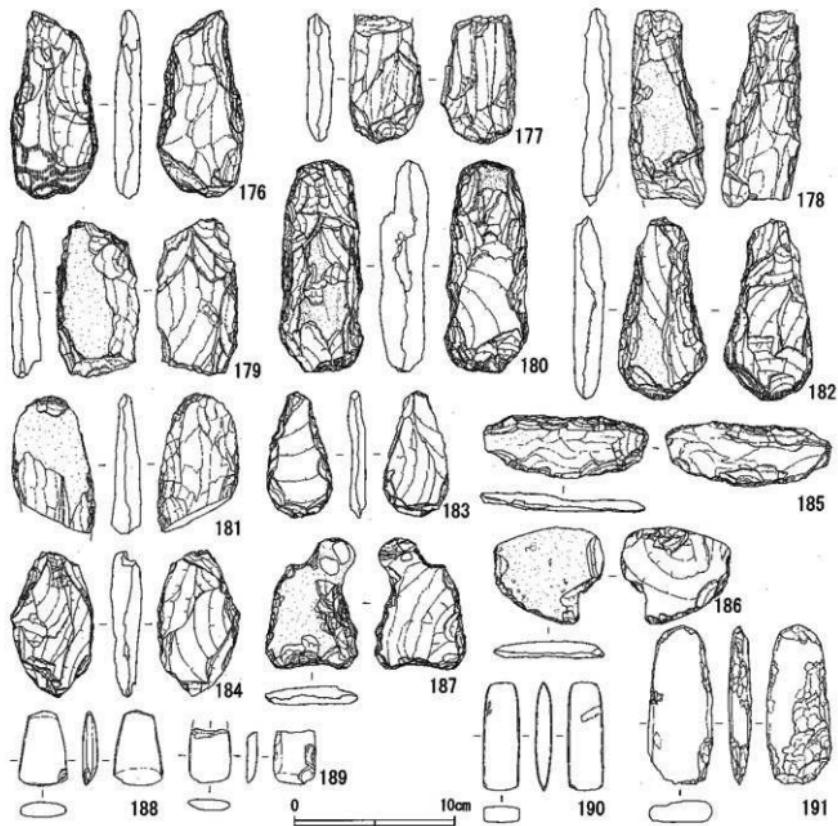
文様 / 口縁部5単位の区画で渦巻文を記す。頸部以下不均等に2本の垂下比線で分割、調文はRL

第 61 図 小堅穴出土土器実測図 その 2 (1:4)

(5) 138P

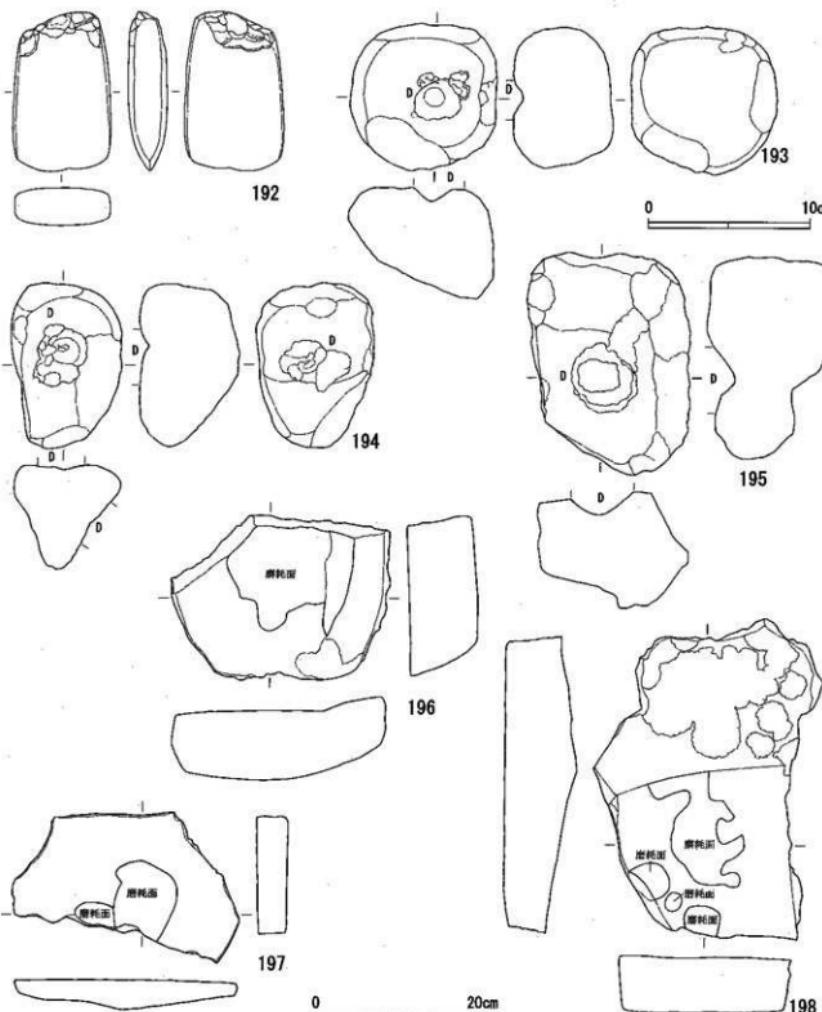
132P の西側に一部重複する。口径 72 × 70 cm、深さ 78 cm を測る。覆土は褐色土で、ローム土とごくわずかな色調の差しかない。138P の坑底やや上方に、一括土器が出土した（第 61 図 156）。底部を欠損した（わざと底部を壊して取ってしまったと考える）土器を横位に埋めている。加曾利 E 系の様相を呈し、縄文時代中期後葉 II ~ III 期のものである。

遺物から見ると 132P が新しく、138P が古いと考えられる。土器埋納の類例は市内にも多く、梨久保遺跡では縄文時代中期初頭期からみられる。土壙墓と考えられようか。



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
176	X2U10.15.55P	打製石斧	I 細片	練片	115.3	53.8	14.7	117.4	
177	X256.19.56P	打製石斧	I 細片	練片	(77.4)	43.5	13.3	(61.8)	頭部欠損
178	X2V9.35.76P	打製石斧	I 粘	粘	(120.7)	43.6	14.5	101.7	刃部一部欠損
179	X2U9.30.68P	打製石斧	I ho	ho	(93.2)	48.1	15.5	(87.4)	刃部欠損
180	X2S9.14.47P	打製石斧	I (IV) 角	角	129.5	51.4	28.2	251.1	両側縁下部に挟りあり
181	X2U4.29.95P	打製石斧	(I) 粘	粘	(83.6)	47.4	16.2	(63.0)	
182	X2U9.33.68P	打製石斧	II 角	角	111.1	53.7	17.1	126.0	
183	32.17A6.13.149P	打製石斧	III 細片	練片	77.5	39.5	10.5	33.2	
184	X256.25.56P	打製石斧	V 泥	泥	88.7	50.6	16.9	88.3	木葉形を呈す
185	X2S10.5.48P	横刃形石器	頁	頁	49.0	101.4	6.9	34.8	背部も調整して刃部あり
186	X2U8.21.77P	横刃形石器	頁	頁	59.6	(68.0)	8.6	(42.7)	刃部調整あり
187	X2S10.6.48P	石匙	SDorSC sh	sh	87.1	67.0	9.5	52.2	
188	X2U8.32.77P	磨製石斧	III 蛇	蛇	45.0	30.0	9.0	17.6	刃ごく一部欠け。側縁に定角作出している
189	32.17A6.14.149P	磨製石斧	II 蛇	蛇	(33.0)	26.0	(6.0)	(9.1)	
190	X2W8.19.81P	磨製石斧	II 線片	練片	66.0	12.0	9.0	29.0	両端に刃部あり。鋭い方が頭か?
191	X2S6.18.56P	磨製石斧	II 蛇	蛇	(97.0)	49.0	13.0	(71.0)	刃部欠損。使用のための欠損か?

第 62 図 小堅穴出土石器実測図 その 1 (1:3)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
192	X2D21.37.137P	磨製石斧	II	砂	98.0	60.0	23.0	(189.1)	頭部ごく一部欠損
193	X2U9.31.68P	磨石類	圓石	安	90.0	90.0	68.0	509.8	
194	X2S6.24.56P	磨石類	圓石	安	101.0	69.0	63.0	425.0	
195	X2R7.26.39P	磨石類	圓石	安	276.0	200.0	152.0	7450.0	口径80mm、深さ26mmの大きな圓石
196	X2U9.32.68P	石皿		安	(202.0)	(273.0)	(102.0)	(7200.0)	横半割れ。凹面平坦。磨面あり
197	X2S6.23.56P	台石		安	(186.0)	(279.0)	(39.0)	(2350.0)	横半割れ。縫なし。磨面若干あり
198	X2R7.24.39P	台石		安	(396.0)	(284.0)	(88.0)	(13600.0)	破片4分の1残? 凹面平坦

第63図 小型穴出土石器実測図 その2 (192~194は1:3、195~199は1:6)

4. その他の遺構と遺物

(1) 黒耀石埋納埋甕

線路下区、ロームマウンド2と3の間の裾部分に検出された。

遺構検出中に土器破断面が円弧状に検出され、周囲を精査したところ落ち込みを確認し、埋設土器であることが判明した。

この土器内の土を除去し始めたところ黒耀石が出土し、これをのこしてさらに掘り進めると、土器底面まで黒耀石が存在していた。これらの黒耀石は土器の内面に沿うようにあり、黒耀石の内側に空間があり、下部に重なっている状態ではなかった(第64図)。

土器埋設の掘り方は、北側部分が削られ全体を把握するには至っていない。埋設土器も上部大半が欠損していた。掘り方の残存部を見ると、口径 86×82 cmの平面不整おむすび形を呈し、深さ23cmを測り、断面形は中華なべ状となる。

土器は正位で埋設され、土圧により破断している。胴下部から底部までが残存している(第64図157)。

埋納されていた黒耀石は22点あり、8点の原石と剥片・チップが12点、加工痕のある黒耀石が2点ある(第65図119～第66図218)。加工痕跡のある210は両面から調整剥離が行われほぼ円形、もう1点の204は縦長形を呈し、長軸両端に打撃痕を有する。

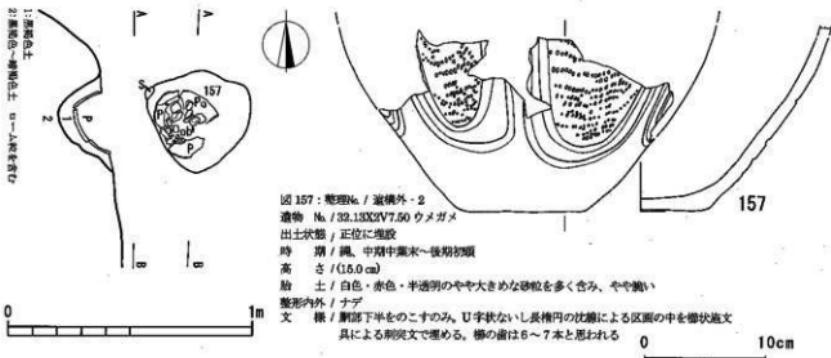
黒耀石の総重量は256.4g、最大は41.2gを測る原石である。原石、加工痕のあるもの、剥片、チップと齊一性はみられない。黒耀石個々のデータは一覧を参照されたい。

(2) ロームマウンド

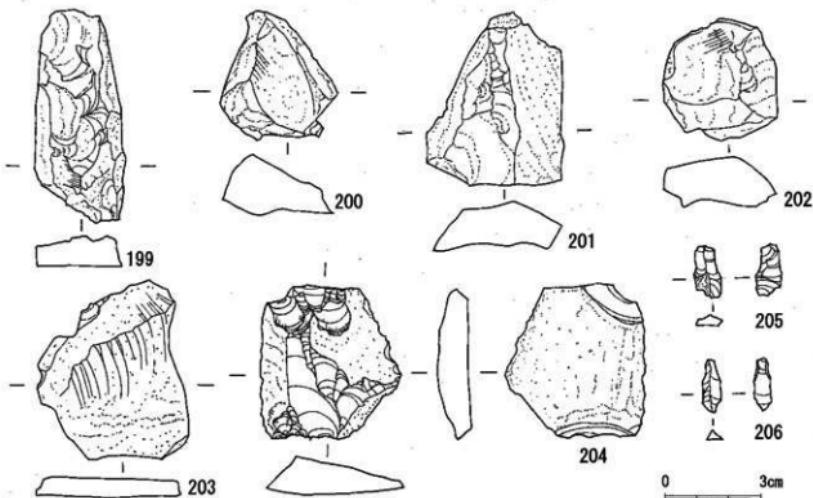
調査の経過 線路下区中央北寄り、38号住居址の南東側に位置する。遺構検出時には、黒褐色土中にローム土が3ヶ所に三角形に配され出現し、おおむね1.2～1.3mの不整形に見られた。ロームマウンド2・3には平石による敷石も少數のこっていた。当初は貼床かとも考えられたが、周囲に柱穴らしき穴が検出されず、また、炉などの施設もないことから、このロームをのこし黒褐色土を掘り下げることとした。ローム土またはローム混入土をのこして掘り下げたところ、ロームマウンド3の西側裾に黒耀石埋納土器が検出され、台状のマウンドとなった(第67図)。

ロームマウンドを掘り下げた下面は、大きな凹みと数基の小窓穴を検出している。

遺構 前項のとおり、径1.2～1.3mのローム土が三角形の位置にのこり、それぞれの間に黒褐色土で充満する。ロームマウンド平坦面はほとんどレベルの差はなく、ロームマウンド2・3には、長さ40cmまでの平石が7～8枚敷かれていた。当初住居址ではないかと考え諸施設を探ったが、検出されなかった。ロームマウンドを半蔵し層位を観察すると、風倒木に見られる土層状態ではないことも判明した。若干の差はあるが、ローム土、ローム混入土、黒色土などが整合的に重層し、風倒木に見られる不規則で入り組んだ層序を示していない。それぞれの土を下から積み上げたかのように重層していた。このことは自然ではなく、明らかに人為的にこのロームマウンドが構築されたことを示している。とすると、このマウンドの裾を切って構築された黒耀石埋納埋甕は本址に伴うか、または後世の所産と考えられる。

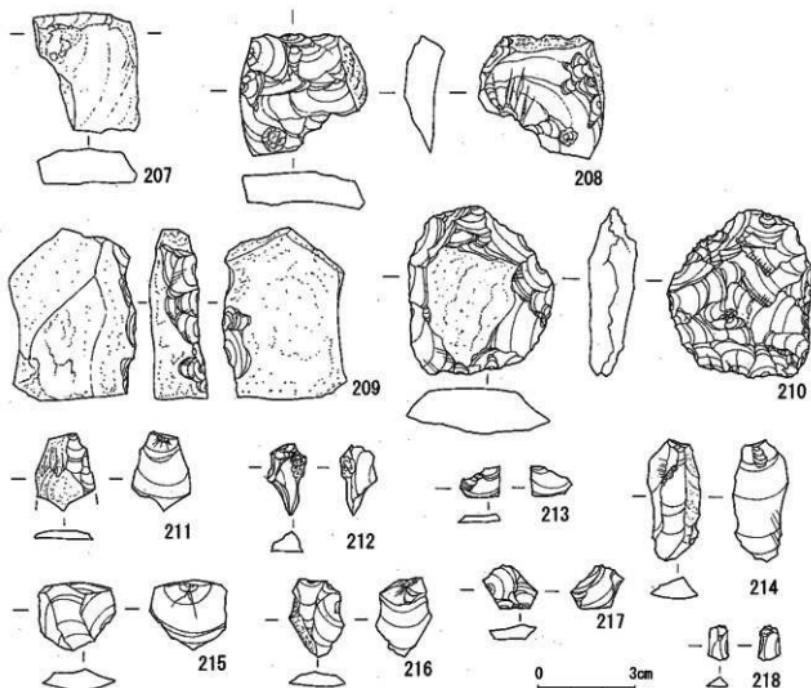


第 64 図 黒縄石埋納出土状態実測図 (1:20)、埋納実測図 (1:4)



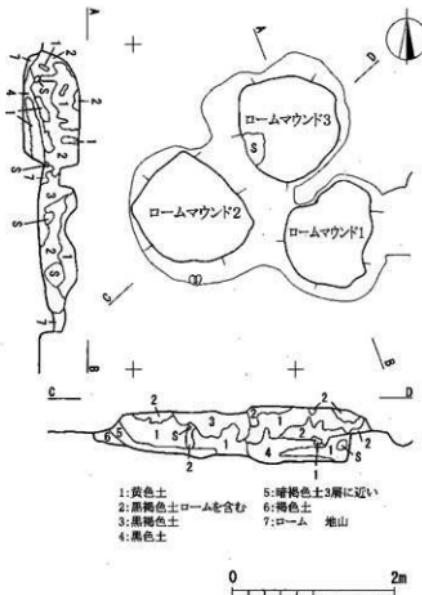
No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	色調	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備考
199	X2V7.379	内	原石	板状	ob	黒系透明	65.0	26.9	15.8	25.9
200	X2V7.387	内	原石	板状	ob	黒系透明	39.8	36.2	17.0	23.9
201	X2V7.419	内	原石	板状	ob	黒系透明	54.8	42.5	15.1	32.7
202	X2V7.439	内	原石	板状	ob	茶系透明	35.8	36.2	14.5	18.9
203	X2V7.499	内	原石	板状	ob	茶系透明	53.9	48.6	8.3	20.7
204	X2V7.459	内	両極		ob	黒系透明	46.5	43.0	11.0	21.7
205	X2V7.769	内	両極		ob	黒系透明	16.0	7.8	3.5	0.3
206	X2V7.779	内	両極		ob	茶系透明	16.0	5.1	3.6	0.2
										板状原石素材。両極石核 両極碎片 両極碎片

第 65 図 埋納黒縄石実測図 その 1 (1:1.5)



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	色調	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	備考
207	X2V7.39付内	不定形石器	⑧	ob	茶系透明	35.5	30.0	9.5	12.6	板状原石素材を用いて素材の先端をわずかに調整
208	X2V7.40付内	不定形石器	⑥	ob	茶系透明	36.3	37.2	11.0	16.2	
209	X2V7.42付内	不定形石器	⑥	ob	黒系透明	52.3	36.6	15.5	41.2	板状原石素材片面に平坦な自然面をのこす
210	X2V7.44付内	不定形石器	⑧	ob	黒系透明	50.2	47.2	14.8	31.6	
211	X2V7.46付内	剥片	-	ob	茶系透明	24.2	18.1	3.9	1.2	
212	X2V7.47付内	剥片	-	ob	茶系透明	22.0	11.5	4.9	1.0	
213	X2V7.48付内	剥片	-	ob	茶系透明	12.1	8.5	1.9	0.2	
214	X2V7.51付内	剥片	-	ob	黒系透明	36.5	16.0	8.1	3.4	
215	X2V7.73付内	剥片	-	ob	黒系透明	21.0	22.3	6.1	2.5	表面にざらつき感あり(栗地)
216	X2V7.74付内	剥片	-	ob	茶系透明	22.3	17.1	4.5	1.1	
217	X2V7.75付内	剥片	-	ob	茶系透明	15.5	12.6	4.0	0.7	
218	X2V7.78付内	剥片	-	ob	黒系透明	10.0	5.3	2.5	0.1	表面にざらつき感あり(栗地)

第 66 図 埋納黒耀石実測図 その 2 (1:1.5)



第67図 ロームマウンド実測図 (1:60)

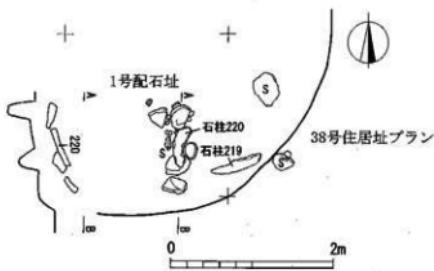
遺物 ロームマウンド構築土中の遺物は、縄文時代後期前葉の土器を最も新しい遺物としている。少なくとも本址構築時にはこれらの遺物が存在している。一方、黒褐色土埋納壙甌が縄文時代中期末～後期初頭と考えられることから、本址も同時期ないしは新しいと考えられる。

(3) 1号配石址

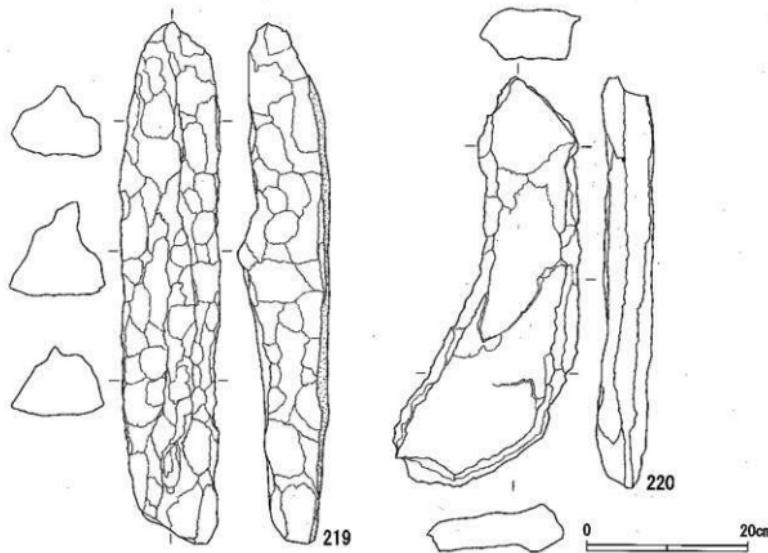
線路下区北側の38号住居址の南部分に重なって検出された。下り傾斜をもつて石が並び、これをこして掘り進めたところ、下に38住の落ち込みが判明した。この段階では本址は38住に伴うものかとも考えられたが、38住の覆土を掘り下げた状態で、これらの石が38住床面から10cm高く、また38住覆土上にあり38住の主柱穴に重なり、埋設土と同じ傾斜をもっていることなどから、38住には伴わない遺構であると考えた(第68図)。

本址は、長さ110×幅40cmの南北に長い規模をもつ。38住床面から北端で10cm、南側で40cmの高さで、30cmの比高差があり北に下り傾斜する。長さ30cmほどのやや四角形を呈する平石を平坦面を上に敷き並べ、その上に長さ約60cmの弓なりの石柱を乗せていた(第69図220)。

本址東側には、長さ約70cmのやはり弓なりの石柱があったが、本址に伴うものかどうかは判明しない(第69図219)。



第68図 1号配石址実測図 (1:60)



No.	遺物番号	遺物名	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(kg)	備考
219	X2V6.35.1ハイ	石柱	安	64.0	12.4	11.4	10.0	
220	X2V5.50.1ハイ	石柱	安	50.6	23.0	6.8	8.1	

第69図 1号配石址出土石器実測図 (1:6)

5. その他の遺物

小型土器

10 点の小型土器が出土した。住居址から出土したものについては各項に記載している。

住居址以外では、小豎穴 2 点、遺構外 4 点が出土し、62P 出土の小型土器（第 60 図 153）の破断面には種子圧痕が観察できた（写真図版 8）。

土製円板

24 点が出土し、そのうち 22 点を図化した（第 70 図 158～179）。住居址 7 点、小豎穴 1 点、遺構外 16 点と遺構外出土が最も多い。37 号住居址の 2 点（158、159）と 43 号住居址の 1 点（164）は、方形を呈する。

すべて土器破片を再利用し、周囲を打欠き成形し側縁を研磨して整形している。円板が打欠きの痕跡を部分的にこしているのに対し、方板は側縁をきれいに研磨している。

土製円板は各時代時期に出土するが、その用途は判明していない。またその大きさもまちまちで、齊一性がない。

土偶

脚部が 1 点、小穴から出土した（第 71 図 180）。足前半部を欠損している。沈線文を多用し、足首から踵に隆起が付けられ、上部破断面には径 2 mm の貫通していない縫孔がある。縄文時代中期中葉の土偶と思われる。

土器片錐

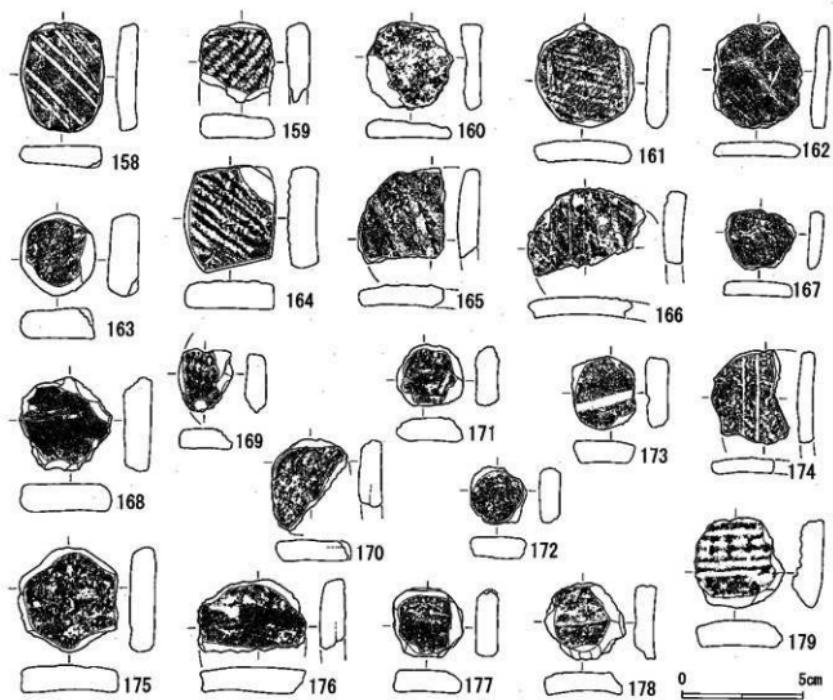
37 号住居址に 2 点、38 号住居址に 2 点、48 号住居址に 1 点、71P に 1 点、遺構外に 1 点が出土した（第 71 図 181～187）。

土器片錐を利用し、側縁を打欠き成形し、側縁を研磨しているものもある。大小があり、33～48.3 g を量る。土器片錐については、「花上寺遺跡」において分析を行い、形態と切り込み形状から分類を試みている（平成 8 年 3 月 岡谷市教育委員会刊）。それにしたがうと、形態は正方形 2、小判形 2、不整形 1、不明 2 となり、切り込みは I 類 1、III 類 2、VI 類 4 となる。特に 37 住の 2 点が III 類で、形状も同じ方形を呈していて特徴的である。

石錐

12 点のうち 2 点は素材剥片と素材であり、製品は 10 点である。そのうち 6 点を図化した（第 72 図 221～226）。ほとんどが刃錐形を呈し、長軸端部に擦り切りによる切目を作出している。44 号住居址出土の 221 は小石に擦り切りして切目を付け、ほかとは異質である。

出土地点は散在しているが、黒耀石埋納埋甕周辺にやまとまりをもつ。



0 5cm

No.	遺物番号	時期	分類	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	欠損状態	盤形	備考
158	XZS2.53.37H7	縄・中・中	頸部	49.2	34.1	8.1	16.9	完形	ていねいな磨り	やや細な平行沈線文。隅丸方形
159	XZS3.24.37H7	縄・前・初	頸部	(32.2)	30.2	10.0	(9.1)	下部 粗い、所々磨り	縄文か? 隅丸方形	
160	XZV5.70.38H7	縄	頸部	35.4	35.5	8.3	(10.0)	ほぼ完形 粗い磨り	表面削落	
161	XZV6.19.38H7	縄・中・後	頸部	43.1	40.2	8.1	15.9	完形	ややていねいな磨り	差下する沈線間に縄文LR
162	XZV6.24.38H7	縄	頸部	44.2	36.0	5.6	11.0	完形	ごく粗い磨り	切り出による短沈線文
163	XZV5.6.38H7	縄・中・中	頸部	33.3	31.1	12.4	(14.7)	右端・裏面下部 ていねいな磨り	大く深い沈線と太くうすい隆筋	
164	W303.32.43H7	縄・中	頸部	43.0	47.5	11.2	(24.8)	上部左端 ていねいな磨り	縄文。隅丸方形	
165	XZS2.32.65P	縄・中・後	頸部	(38.1)	(35.7)	8.0	(12.9)	4分の1が存在?	粗い磨り	太く深い字の字の沈線
166	XZ22.22.55P	縄	頸部	(34.4)	(48.8)	7.9	(14.1)	下部 ていねいに打ち欠き。粗い磨り	斜格子沈線	
167	XZT3.21H7	縄	頸部?	24.4	27.9	5.0	3.8	完形	磨り	無文
168	XZT3.35H7	縄・中・中	頸部	38.2	38.1	11.5	19.0	完形	打ち欠き痕。ごく粗い磨り	無文
169	XZV2.15H7	縄	頸部	(24.6)	(21.7)	(8.6)	(5.0)	大半、一部残存 わずかに磨り	粗文	
170	XZV2.17H7	縄・中	頸部	(37.9)	31.6	8.6	(9.0)	右下部 磨っているが凹凸のころ	微隆起隆筋。隅丸方形	
171	XZV7.58H7	縄・中・後	頸部	24.5	37.6	9.2	6.8	完形?	打ち欠き痕。わずかに磨り	差下する平行沈線
172	XZV7.58H7	縄	頸部	22.3	22.1	8.7	4.8	完形	打ち欠き痕。わずかに磨り	無文
173	XZV9.47H7	縄・中・後	頸部	29.0	26.1	9.0	7.8	完形	わずかに磨り	やや太い沈線
174	XZV10.3H7	縄・中・初	頸部	(38.1)	(26.8)	5.3	(7.6)	右・下部 わずかに磨り	地文調文。半截竹管による平行沈線	
175	XZW8.25H7	縄	頸部	42.9	40.3	10.2	21.2	完形	打ち欠き痕。わずかに磨り	無文。不整六角形
176	XZW8.26H7	縄	頸部	(28.7)	(44.9)	10.0	(15.1)	下部 打ち欠き痕。わずかに磨り	無文	
177	XZS5.18H7	縄	頸部	(26.4)	29.3	8.6	(8.9)	上部わずかに 打ち欠き痕。わずかに磨り	無文	
178	XZG6.18H7	縄・中・後	頸部	31.0	32.9	8.1	9.2	完形	打ち欠き痕	沈線
179	XZG6.35H7	縄・中・後	頸部	36.6	11.1	35.8	14.0	完形?	打ち欠き痕。わずかに磨り	半截竹管による平行沈線と押引き

第70図 土製円板実測図 (1:2)

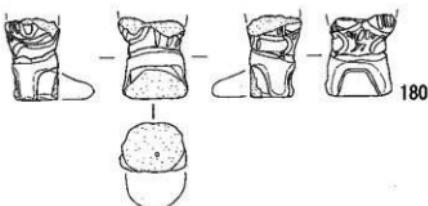


図 180：整理No. / 柱穴・小穴

遺物 No. / 32.13X2S8.13P1

出土状態 / P1 積土中

時期 / 桐、中期中葉

長さ / (2.2 cm)

幅 / (2.8 cm)

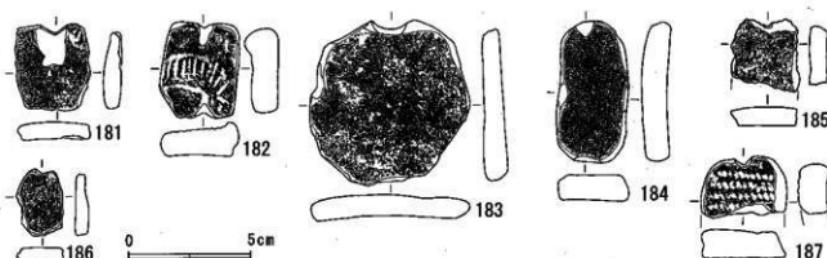
高さ / (3.8 cm)

胎形 / 土・縫隙を含む

形 / ナゲ

文

備考 / 足先部分が欠損する土偶の脚部と思われる。左右は不明。中心付近に穿孔されている。



No.	遺物番号	時期	分類	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	欠損状態	切目箇所	整形
181	32.13X2U2.47.37H7	縄	III	34.8	29.1	6.4	8.7	上部裏面	上	細い。ごく一部に磨き調整あり
182	32.13X2U2.55.37H7	縄・中・中	III	38.8	31.3	13.6	20.6	完形	上・下	全体にていねい。一部粗い
183	32.13X2W5.70.38H7	縄	IV	66.3	65.6	10.4	48.3	完形	上・左(?)	全体に粗い
184	32.13X2W6.26.38H7	縄	IV	57.2	29.6	10.3	25.0	完形	上・左・右	全体にていねいな面り。
185	32.17A7.8.48H7	縄・前・初	IV	(29.6)	26.7	6.8	(6.0)	下部	上・(下)	やや粗い部分あり
186	32.13X2U7.20.71P	縄	IV	26.6	18.9	5.3	3.3	完形	上	全体に粗い
187	32.13X2A24.20.29	縄	I	(29.3)	34.7	11.5	(12.4)	下部	上・(下)	割口のままか?

第 71 図 土偶・土器片鉢実測図 (1:2)

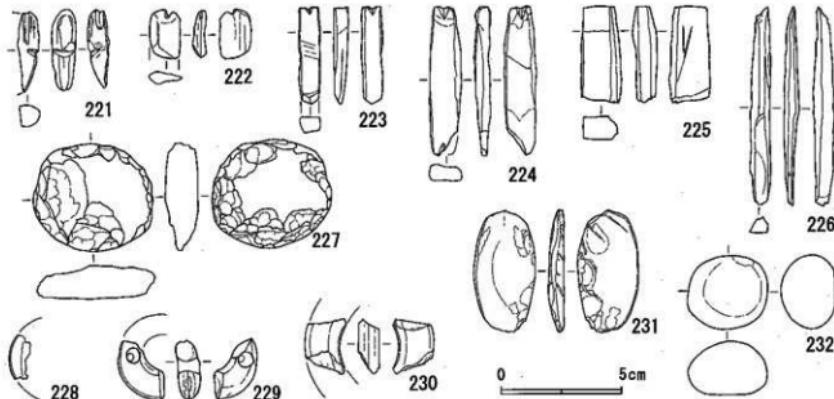
石製円板

2 点が出土し、そのうち 1 点を図化した（第 72 図 227）。227 は周縁を打欠き成形し、側縁を部分的に軽く研磨している。花上寺遺跡では 14 点出土したが、市内のほかの遺跡からの出土量はごくわずかである（「花上寺遺跡」平成 8 年 3 月 岡谷市教育委員会刊）。

用途は不明である。

石製装身具

4 点の石製装身具が出土した。そのうち 1 点は 58P から出土したコハク製の垂飾りである（第 59 図 175、第 III 章 3(2) 参照）。そのほかは滑石製の玦状耳飾りである（第 72 図 228～230）。38 号住居址に 2 点出土している（228、229）。229 は穿孔されている。



No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重(g)	完欠	切目数	切目幅(mm)				備考
											上	下	左	右	
221	X2G16.3.44H	石鍬	切目石鍬	頁	32.0	(9.0)	(10.0)	(3.2)	破半欠	(2)	(2.5)	-	2.2	-	擦り切りでなく細長の転石
222	X2V9.34.76P	石鍬	切目石鍬	雲片	(19.0)	(13.0)	(5.0)	(1.1)	剥離及び 下半欠	(1)	1.9	-	-	-	-
223	X2E21.10.132P	石鍬	切目石鍬	頁	(39.0)	9.0	6.0	(2.8)	下半欠	(1)	2.2	-	-	-	-
224	X2V8.19.81P	石鍬	切目石鍬	砾	61.0	13.0	7.0	(6.6)	下端欠	2	2.8	-	-	-	-
225	X2V7.35m2	石鍬	素材	砾	49.0	16.0	10.0	9.2	-	-	-	-	-	-	一側縁に擦り切り痕をこす
226	X2W8.23P1	石鍬	素材	粘	81.0	8.0	6.0	3.6	-	-	-	-	-	-	-
227	Z157	石製円板	砂	44.0	49.0	13.0	37.6	-	-	-	-	-	-	-	-
228	X2V5.36.38H	装身具	块状耳飾	滑石	(17.0)	(9.0)	(6.0)	(1.0)	-	-	-	-	-	-	端部をもつ。穿孔されている
229	X2V5.37.38H	装身具	块状耳飾	滑石	(24.0)	(18.0)	(9.0)	(3.2)	-	-	-	-	-	-	-
230	X2U6.15H	装身具	块状耳飾	滑石	(22.0)	(17.0)	(9.0)	(4.2)	-	-	-	-	-	-	-
231	X2X3.15.41H	石製品	砾	50.0	25.0	6.0	10.8	-	-	-	-	-	-	-	両側縁に磨滅痕、上下は 小さな打撃剝離があり 乳緑色で玉状。若干の磨滅 痕あり
232	X2T6.18H	石製品	玉石	玉髓	32.0	31.0	22.0	31.7	-	-	-	-	-	-	-

第 72 図 石製品実測図 (1:2)

その他

用途不明な石製品が 2 点出土した (第 72 図 231・232)。231 は石片を利用して、小判形に作出して側縁を研磨している。一面は自然面であるが、他面には研磨痕がある。232 は玉状の玉髓で、加工痕は見られない。本遺跡ではこの 1 点のみで、ほかに出土していない。

第IV章 平安時代の遺構と遺物

1. 住居址と遺物

(1) 35号住居址

調査の経過 線路下区の線路際に検出された住居址である。JR用地のため南側は未検出である。

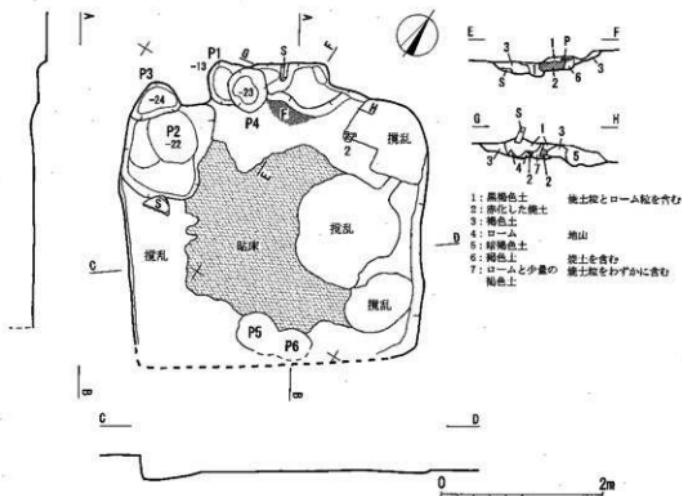
遺構検出段階でローム面に黒色土の落ち込みを検出し、35号住居址とした。覆土中の遺物は少なく、カマド周辺に数点の一括土器が出土した。

遺構 南壁は未検出であるが、東隅がわずかに判明した。規模は推定 3.7×3.6 m の隅丸方形で、長軸は N - 35° - W である(第73図)。

壁は褐色土からローム層を掘り込んで、比較的良好な状態であったが、耕作で若干脆くなっていた。線路際の西壁で残存高 29.6 cm を測る。わずかな傾斜をもつがほぼ垂直に近い。

床は西側及び東側では搅乱のため残存しない。カマド周辺では硬化面があり、中央付近ではタタキ締められたような硬化面が 2.0×2.3 m の不整形に確認できた。ローム土を用いた貼床であった。搅乱のほか、P5・P6 にも切られ、径 50 cm (P5) と 40 cm (P6) の円形に抜けていたことから、もともと P5・P6 の下にあった 99P に石を入れ、埋め戻して貼床をし、そこに、再びこの穴を掘るといったことが行われたと考えられる。本址に伴う柱穴の可能性がある。

住居内に検出された小穴は P1 ~ P6 があり、このうち P2 はカマド脇に見られる所謂灰捨て穴と思



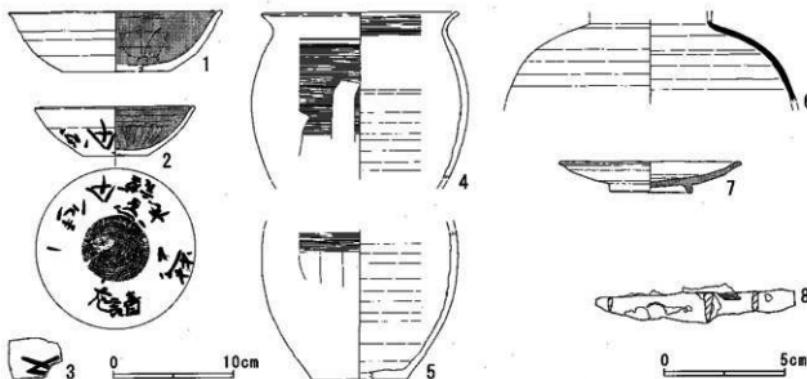
第73図 35号住居址実測図 (1:60)

われる。またP1、P4はカマドすぐ脇にあり柱穴とは考えにくい。柱穴と考えられるのはP3のみである。北隅に平石が重なっていることから、四隅に柱を建てたと考えられ、礎石と掘立柱の共用であろう。可能性としては、南壁際の貼床を切る小穴も柱穴かもしれない。

カマドは北壁中央やや東寄りにあり、残存幅1.3m、奥行き0.8mを測る。上部のほとんどは破壊されていたが、右に袖石が残存していた。石を芯とした粘土郭カマドと考えられる。火道は赤化が著しく、煙道の痕跡が認められ、煙道形成に土師壺大破片が使用された。支脚は出土していない。焚き口部は若干掘り凹められ、平石が1枚存在した。焚き口火床は赤化が弱い。

遺物 出土量は多くないが、土師器小型壺2、須恵器壺1、灰釉皿1、黒色土器坏3点が図化できた(第74図1~7)。4の小型壺は胴中央が張り、口縁部が短く外反する。胴上半にカキ目が施され、中央部にはタテハケナデが所々になされ、下半部は回転ヨコナデされている。1と2の黒色土器坏は無台で、胴部の張りは弱い。7の灰釉陶器皿は口唇が若干外反し、体部が少し内湾し、高台は角高台に近い。底部は回転ナデ調整が施され、施釉はハケ塗りにより上半に内外面とも塗布される。6の須恵器壺は肩部で全体像は判明しない。

2には外面に逆位の墨書きがあり、10文字ほどが全面に書かれている。文字の判別は難しいところだが、「今」「古」「吉留」などが読み取れ、「吉」の梵字らしき墨書きもある。これらは吉祥文字であり、神へ祈りを奉げたものであろう。このほかに小破片3点に墨書きが発見されているが、文字は不明である。



No.	遺物番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	備考
1	32.13X2O9.9.35Hフ	土師	黑色坏	(17.6)	(8.6)	5.0	細砂	
2	32.13X2P9.14.35Hフ	土師	黑色坏	13.2	5.4	4.0	細砂、石英少量	墨書き土器
3	32.13X2O9.21.35Hフ	土師	黑色坏	-	-	-		墨書き土器、体部、「又」か?
4	32.13X2P9.13.35Hフ	土師	小型壺	16.2	-	(13.7)	細砂、石英少量、雲母微量	
5	32.13X2P9.13.35Hフ	土師	小型壺	-	(7.8)	(12.2)	細砂、石英少量、雲母微量	
6	32.13X2P8.15.35Hフ	須恵	民窯壺	-	-	(6.9)	灰色で堅緻、白色小粒	
7	32.13X2P8.11.35Hフ	灰釉	皿	15.1	7.0	2.6	灰白色	
8	32.13X2N8.3.35Hフ	金属製品	刀子	(8.2)	1.2	0.8	0.3 0.2	茎の横部分に木質残存

第74図 35号住居址出土遺物実測図 (1:4、8は1:2)

上記以外に、鉄製の刀子が1点出土している(第74図8)。柄部端が欠損しているが刃長5cmほど
の品である。

これらから、本址は9世紀半ば頃の住居と考えられる。

(2) 36・41号住居址

調査の経過 線路下区北端に検出された住居址で、本址北側はすぐに大土手にかかり、まさに志
平扇状地の先端にあたる。

表土剥ぎ作業時にカマド袖石と焼土が検出され、住居址の存在が判明し36号住居址とした。遺構
検出の掘り下げをしていくなかで落ち込みは検出できなかつたが、西側に土師器甕がまとまって出土
し、掘り下げを進めるとカリカリとした床硬化面が確認された。カマド検出時においても住居の落
ち込みは検出できなかつた。明確な覆土は捉えられず、床面上からの遺物出土も少ない。

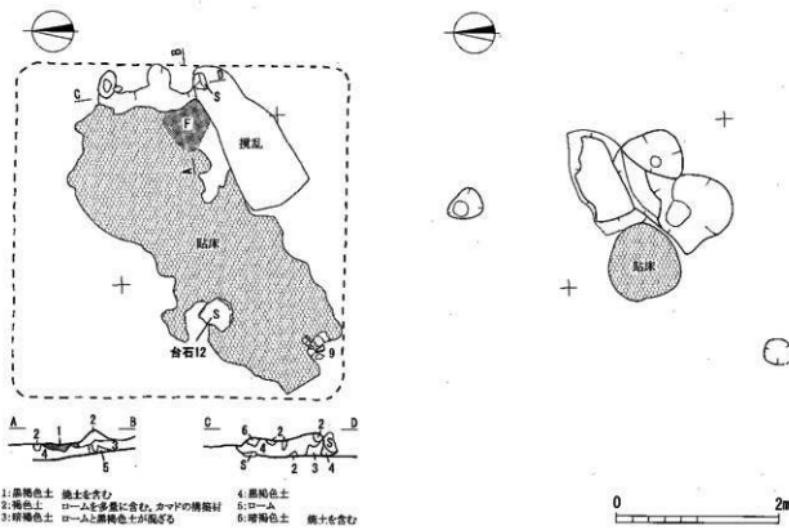
36住の床を剥ぎ下部を探ったところ、ローム層が部分的に壁状に残存し、西側に円形の硬化面が
確認され41号住居址とした(第75図)。

遺構 36号住居址: 落ち込みを確認できなかつたことから、平面形状は特定できないが、方
形ないし隅丸方形を呈すると考えられる。

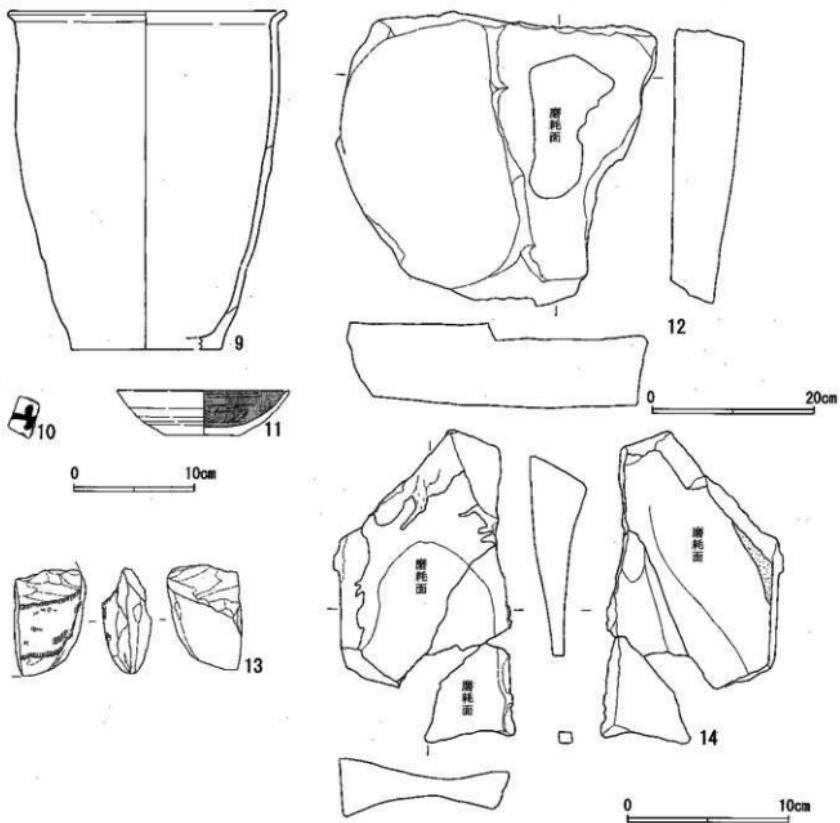
カマドの位置から、主軸は東西にある。

壁は確認できなかつた。

床はカリカリとした硬化面があり、ローム層及び白色の粘土を用いて貼床されていた。床の残存部



第75図 36・41号住居址実測図 (1:60)



No.	遺物番号	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	胎土	備考	
9	32.13X2W2.18.36Hフ	土師	小型壺	23.0	(11.5)	27.8	褐色でやや堅緻、細砂、石英、微細重母		
10	32.13X2W3.11.36Hフ	土師	壺	-	-	-		墨書き器、体部、「ナ」か?	
11	32.13X2X3.11.41Hフ	土師	黒色壺	(14.0)	(6.0)	(3.7)	細砂少		
No.	遺物番号	遺物名	細分類	石材	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	備考
12	32.13X2X2.11.36Hフ	台石	安	安	362.0	393.0	102.0	20000.0	平安(砥石)。表裏に磨耗面あり。
13	32.13X2Y3.13.41Hフ	磨石類	磨石	安	(44.1)	(64.5)	(38.7)	(100.9)	平安住のため石皿とは考えにくい 4分の1残か?
14	32.13X2Y3.5.41Hフ	砥石	砂	砂	(192.0)	(113.0)	(35.0)	(565.3)	表裏砥面。かなり凹む

第 76 図 36・41 号住居址出土遺物実測図 (9 ~ 11 は 1:4、12 は 1:6、13・14 は 1:3)

は北東—南西方向に長さ 4.3 m、幅 1.5 m で不整長方形を呈する。

柱穴は検出されなかった。また、礎石らしき石も未発見である。

カマドは東壁のほぼ中央に位置すると思われる。かなり破壊され、左袖石と構築材がのこる。推定規模は幅約 1.3 m、奥行き 1.0 m である。半截してみると、焚口に若干の焼土が見られたが、火道には焼土がなかった。袖石はロームや黒褐色土で包まれ、カマドが構築されていた。

41 号住居址：36 住中央付近の貼床下に径 90 cm の円形に貼床を検出した。住居の規模などは不明である。この貼床の東側に台形柱状にロームがのこり壁状を呈するが、本址の壁かどうかは明確ではない。かえって Y-3 グリッド P1 などから北側に別の住居を想定できるかもしれない。41 住貼床下には浅い団状の穴があったが、特記する事項はない。

遺物 36 号住居址：図化できたのは土師器小型甕 1 点である（第 76 図 9）。この甕はやや不整形であり、外面にカキ目などの調整痕跡が見られない。出土量は少ないものの、黒色土器壺とロクロ土師器破片が多く、灰釉陶器瓶破片が 1 点伴出する。

また、残存した床の西側には 12.4 × 40 cm ほどの平石が出土した。平坦面に使用痕跡があることから、台石と考えられる（第 76 図 12）。

41 号住居址：図化できた土器は黒色土器壺 1 点である（第 76 図 11）。石器は磨石 1 点、砥石 1 点があり、砥石は表裏ともによく使い込まれている（第 76 図 13・14）。

以上のことから、36 住は 9 世紀後半から 10 世紀頃と考えられ、平安時代前期の住居址であり、35 住と時期差がほとんどないと考える。41 住は平安時代の住居址であろう。

まとめ

III・IV 章に今回の調査によって発見された遺構を中心に記述し、出土遺物などに言及してきた。本項では志平沢扇状地の長い歴史の一端に触れてみたい。

志平沢扇状地は「いい所」である。ここに人の足跡がみられるのは、押型文といわれる文様をもつた土器があることから、縄文時代早期にさかのぼる。その頃は、インディアンハウスのような簡単な住居を作り、移動生活をしていたのだろう。暖かさが増した前期初頭に、長期に居住する人々が現れた。道上区に発見された住居址は、地面を掘り込んでしっかりとした家を造っている。ここには豊かな森と川があり、そこから得られる食料は大いに生活を潤したのであろう。使われた土器を見ると、関東と東海の土器が一緒にある。東海地方から天竜川をさかのぼる人々と、関東から山坂を越えやって来た人々がこの地で出会ったのかもしれない。天竜川は、実はもっと古くから人々の往来があり、諏訪の特産品「黒耀石」を求めてはるばるやって来たのではないか。諏訪湖盆地にはあちこちにその痕跡がある。志平沢扇状地が大いに栄えるのは縄文時代中期であり、それも、川辺に暮らしている。対岸の広畑遺跡が山裾にあるのとは対照的である。温暖な気候のなか、争いもなく平和に暮らしていたのだろう。寒冷化した後期になるとムラは小さくなり、やがて人々はいなくなる。再びこの地に足跡を刻むのは、弥生時代後期と平安時代である。水田で稻作が行われ、天竜川を利用した水運で栄えたのではないか。

志平沢扇状地は狭いところだが、様々な時代に利用された価値のある「いい所」なのである。

付 表

住居址一覧表

※住居の大きさを示す測定値は、主軸とこれに直交する横軸の値。()内は推定値

住居No.	区	平面形(推定)	主軸または長軸	横幅(cm)	炉	時期	備考
32	道上	隅丸方形	南北・北西	5.66×4.06	地床炉	調・前・初	33住と重複。33住古<32住新
33	道上	不整隅丸方形	東・西	(4.6)×3.8	地床炉	調・前・初	32住と重複
35	線路下	隅丸方形	N=35°-W	3.8×(3.7)	カマド	平安	99Pと重複。99Pで<35住新
36	線路下	(長方形)	(東・西)	—	カマド	平安	41住上に転床している
37	線路下	解説式隅丸方形	N=26°-W	(5.8×5.2)	石畳炉	調・中・中	北で39住と重複。39住を切る。39住古<37住新
38	線路下	円形	南北・北西	径4.9	石畳炉	調・中・中	37住に切られる。39住古<37住新
39	線路下	—	—	—	石畳炉	調・中・中	37住に切られる。39住古<37住新
40	線路下	(円形)	—	—	地床炉?	—	—
41	線路下	—	—	—	—	平安	36住地床下に41住地床がある
42	線路上	(隅丸方形)	(南北・北西)	(5.8×5.8)	石畳炉	調・中・中	東側で42住に切られる。42住古<43住新
43	線路上	不整圓形	南北・北東	5.0×4.4	石畳炉	調・中・中末	西側で42住を切る。42住古<43住新
44	線路上	住戸:(隅丸方形)	南北・北東	住戸(7.0×6.0)	—	調・後・前	敷石住戸
		敷石:(併縫形)	—	敷石(5.4×4.0)	—	—	—
45	線路下	—	—	—	地床炉	調	—
46	線路下	—	—	—	石畳炉	(調・中・中)	1号方形柱穴列P1に切られている 1号方形柱穴列新>46住古
47	線路下	—	—	—	(石畳炉)	(調・中・中)	37-38住に切られている。南側の46住とは不明だが 伊形から45住古<47住新か
48	道上	(隅丸方形)	—	(2.0)×4.4	地床炉	調・前・初	—

1号方形柱穴列一覧表

※口径・底径は長軸・短軸

柱穴No.	区	グリッド	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備考
P1	線路下	X2R-5-6	94×72	76×58	63	140Pを切る。上面に轟あり
P2	線路下	X2S-6-7	58×52	36×32	77	40Pと重複
P3	線路下	X2S-T-7-8	103×95	61×46	56	69Pと重複
P4	線路下	X2S-R-8-9	114×73	63×42	68	61P重複。上面に轟あり
P5	線路下	X2R-7	85×60	44×29	51	64Pを切る
P6	線路下	X2Q-6	72×51	62×42	71	38Pと重複

小堅穴一覧表

※口径・底径は長軸・短軸。()の数値は既存値

小堅穴No.	グリッド	平面形	断面形	口径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)	備考
37P	1T-1	長椭円形	中華輪状	(150)×(54)	96×29	27	—
38P	X3Q-R-6	隅丸形	タライ状	148×134	128×113	34	上面に轟あり。1号柱76と重複
39P	X2R-E-6-7	隅丸方形	タライ状	102×(96)	82×80	29	上面に轟あり。1号柱22と重複
40P	X2S-6-7	(隅円形)	楕状	54×(29)	30×(23)	70	1号柱P2に切られる。39Pと重複
41P	X3Q-R-11	方形	タライ状	76×64	54×48	21	—
42P	X2R-11-12	—	タライ状	97×(64)	(32)×30	—	小穴一つあり。146Pと重複 口径54×48、底径26×16、深さ36
43P	X2R-9-10	ダムマ形	タライ状	123×76	25×23	26	—
				18×16	—	—	—
				21×19	—	—	—
44P	X2S-11	長椭円形	タライ状	119×81	34×20	32	わざかに謫土あり。平石あり
45P	X2U-10,T-10-11	—	—	—	—	—	—
46P	X2T-10	隅丸方形	タライ状	48×(43)	(37)×35	21	ob謫土。145Pと重複
47P	X2S-T-9	不整長椭円形	タライ状	242×140	118×48	29	小穴三つあり 口径43×40、底径17×17、深さ24 口径65×53、底径34×29、深さ41 口径64×50、底径23×19、深さ41
48P	X2S-9-10	長椭円形	タライ状	104×63	69×39	25	—
49P	X2S-T-10-11	不整長椭円形	タライ状	(195)×103	48×39	35	口径(102)×100、底径48×39、深さ35の穴あり
50P	X2S-10-11	長椭円形	タライ状	100×59	52×42	12	—
51P	X2O-I-7	—	タライ状	85×(67)	(53)×50	23	—
52P	X2S-9	椭円形	タライ状	123×106	61×61	38	—
53P	X2Q-R-7-8	不整長椭円形	タライ状	267×121	126×79	31	小穴二つあり 口径56×45、底径21×21、深さ30 口径47×44、底径20×15、深さ43
54P	X2S-6	不整椭円形	タライ状	175×110	55×47	22	X2S8P1と重複
				57×40	22	—	—
55P	X2U-I-10	—	—	—	—	—	—
56P	X2S-T-6	円形	円筒状	99×87	81×72	100	コハク製織物出土
58P	X3Q-R-10-11	長椭円形	楕状	91×70	67×42	51	—
59P	X2U-V-10	—	—	—	—	—	61Pと重複
61P	X2R-8	(隅丸形)	タライ状	110×103	85×72	23	1方柱P4
62P	X2S-7-8	(不整椭円形)	タライ状	(153)×117	72×48	39	1方柱P5と重複
64P	X2S-7	(不整椭円形)	タライ状	(67)×65	35×39	30	1方柱P6に切られる
65P	X2S-5-6	不整長椭円形	タライ状	161×119	62×56	47	謫土あり
				92×(77)	42	—	—
66P	X2T-8	(隅円形)	楕状	69×(86)	(46)×35	37	TTPと重複

小量穴%	グリッド	平面形	断面形	口径(cm)	底深(cm)	深さ(cm)	備考
67P	X2V-9	円形	タライ状	75×75	59×29	28	76Pと重複
68P	X2T-U-9	長楕円形 (不規円形)	タライ状	183×147	101×89	42	87Pと重複
69P	X2S-T-7	タライ状	132×(136)	92×88	27	1方柱P3と重複。一括土器出土	
70P	X2T-U-7-B	タライ状	127×—	—	7	小穴一つあり。71P, 75Pと重複 口径80×72, 底径52×38, 深さ46	
71P	X2U-7	—	—	77×39	—	70-71Pと重複	
72P	X2U-5-E	円形	桶状	73×72	45×43	40	
73P	X2U-6	楕円形	タライ状	59×46	40×22	22	
74P	X2U-6	円形	桶状	43×42	28×23	24	
75P	X2U-7-S	—	—	43×36	24	70-71Pと重複	
76P	X2V-9	不整椭円形	タライ状	100×(77)	(33)×(28)	20	三つの小穴の集まり。67Pと重複 口径40×38, 底径19×18, 深さ36 口径38×34, 底径14×13, 深さ39 口径60×37, 底径21×20, 深さ24
77P	X2T-U-8	(不整長椭円形) 不整ダルマ形	タライ状	(165)×131	(143)×(72)	25	
79P	X2T-U-8	タライ状	桶状	98×67	44×34	54	
80P	X2S-6-T	円形	タライ状	51×50	33×29	17	
81P	X2V-W-5	円形	タライ状	94×90	60×55	25	小穴一つあり 口径31×26, 底径14×13, 深さ23
82P	X2R-S-6	長楕円形	タライ状	148×60	29×26	42	
83P	X2V-O-6	長楕円形	タライ状	93×(51)	47×(29)	31	X2W-P1と重複
85P	X2S-T-5-S	ダルマ形	タライ状	125×94	99×78	60	X2SSP1と重複
86P	X2T-U-6	長楕円形	タライ状	87×61	32×29	34	北側にテラスをもつ
87P	X2L-9	円形	桶状	84×(66)	38×26	47	68Pと重複
89P	X2T-4	楕円形	タライ状	92×75	68×52	32	
90P	X2U-5	楕円形	桶状	84×76	68×55	80	
91P	X2U-V-8-9	不整椭円形	桶状	135×107	66×58	57	98×88-66×58-67と(68×34)-48×(30)-37 のテラスの集まり。北に小穴二つあり 底に平石を敷いている
92P	X2W-6-T	円形	タライ状	114×106	72×62	16	
93P	X2T-4-5	楕丸方形	桶状	86×80	41×39	48	
94P	X2U-4-5	長椭円形	タライ状	116×72	97×56	33	
95P	X2U-4	椭円形	タライ状	74×67	62×56	26	
96P	X2X-5-6	長椭円形	タライ状	141×(88)	84×87	28	
97P	X2O-7	椭円形	桶状	71×69	62×47	82	
98P	X2P-Q-6-7	ダルマ形	タライ状	119×78	(72)×(60)	34	X2P6P1と重複
99P	X2N-O-9	(椭円形)	桶状	115×(62)	113×(62)	106	
108P	X2O-H-16	椭円形	桶状	78×65	40×40	71	
109P	X2I-17	椭円形	鉢状	64×(46)	28×18	33	110Pと重複
110P	X2I-16-17	不整椭円形	桶状	70×64	46×40	57	109Pと重複
111P	W2T-25	楕丸九角形	タライ状	76×76	57×54	31	
112P	W2Y-24,X2A-24	椭円形	タライ状	126×112	82×66	28	
113P	X2C-24	椭円形	鉢状	68×63	32×24	29	
114P	X2B-23-24	不整長方形	タライ状	73×60	50×36	27	
116P	X2A-24	不規形	タライ状	136×(106)	91×(60)	34	127Pと重複 中央に68×47-45×30-37の穴と 南北に68×(37)-58×(28)-26のテラスと 北側に96×(60)-79×(51)-24のアラスが集まつたもの
117P	X2A-1	ダルマ形	タライ状	145×92	45×30	37	
118P	X2A-25	不整椭円形	タライ状	89×83	54×45	42	120Pと重複
119P	X2B-C-25	ダルマ形	タライ状	160×(120)	60×60	19	114×(78)-60×60-19と (84)×(60)-66×—-23の穴の集合
120P	X2A-25	(長椭円形)	タライ状	92×(62)	75×(42)	15	118Pと重複
122P	X2B-25,X3B-1	ダルマ形	桶状	84×72	45×37	46	55×44-45×37-46と 西に72×34-57×24-20のテラスをもつ
123P	X2A-B-19	長椭円形	タライ状	60×46	44×38	27	
124P	X2E-23	椭円形	—	66×62	22×17	43	北にテラスをもつ
125P	X2B-24-25	不整椭円形	タライ状	100×88	70×60	31	
126P	X2H-24-25	—	タライ状	—	—	35	127P, 128Pと重複
127P	X2A-B-24	不整ダルマ形	皿状	150×142	112×66	20	115P, 126Pと重複
128P	X2B-25	不整椭円形	タライ状	120×97	94×82	56	120Pと重複
130P	X2B-24	不整円形	円筒状	82×76	68×36	93	
131P	X2C-21-22	不整圓形	タライ状	79×73	45×40	36	
132P	X2D-21	円形	桶状	94×(60)	78×(51)	76	ob大塊。138Pと重複
133P	X2A-9-20	不整椭円形	鉢状	100×99	24×12	47	
134P	X2D-E-22	不整椭円形	タライ状	80×64	40×40	35	
135P	X2D-21	円形	桶状	76×(74)	(62)×56	51	137P, 138Pと重複
136P	X2E-23-24	長椭円形	タライ状	(70)×58	(48)×28	20	
137P	X2D-21	—	鉢状	58×—	42×33	42	135P, 136Pと重複
138P	X2D-21	円形	円筒状	72×70	64×62	78	上部埋納。132P, 135P, 137Pと重複
139P	X2D-21	—	鉢状	70×(40)	60×35	49	137Pと重複
140P	X2H-6	不整長椭円形	桶状	(68)×31	(34)×24	30	1方柱P1に切られる
142P	X2V-7	三角形	桶状	92×74	69×58	56	ロームマウンドと重複
143P	X2V-7	椭円形	タライ状	83×(50)	37×(34)	23	144P, ロームマウンドと重複
144P	X2V-7	(椭円形)	タライ状	64×(54)	52×(48)	30	145P, ロームマウンドと重複
145P	X2T-U-10	円形	タライ状	105×96	59×47	24	46Pと重複
146P	X2R-S-11	椭円形	タライ状	93×75	45×44	43	42Pと重複
149P	A-6	不整円形	タライ状	98×87	54×46	29	48件と重複。48往り新しい

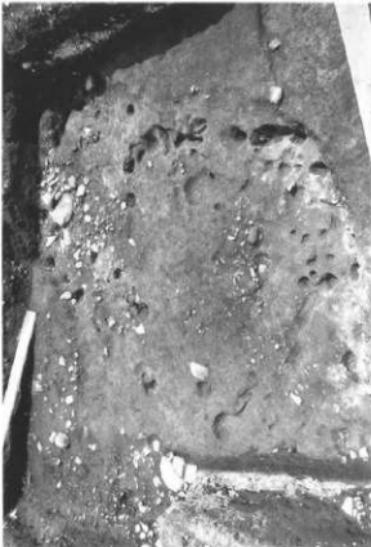
図版 1



道上区1 トレンチ西壁セクション



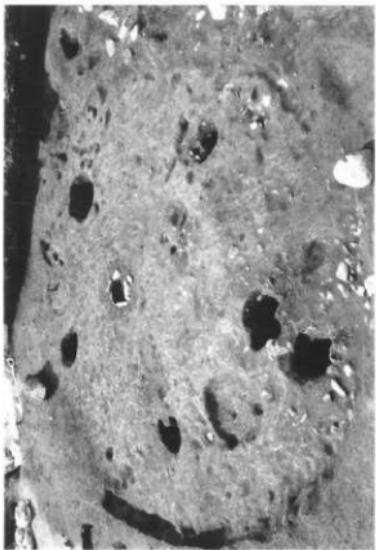
37号住居址



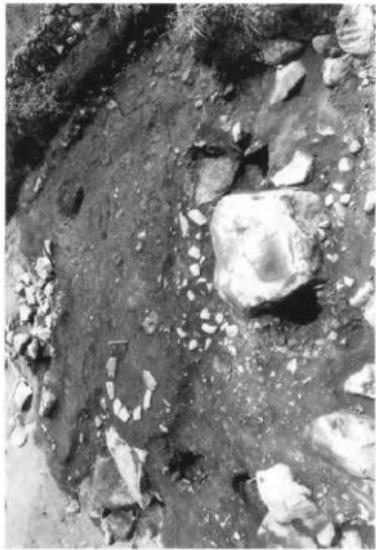
32・33号住居址

37号住居址土器出土地

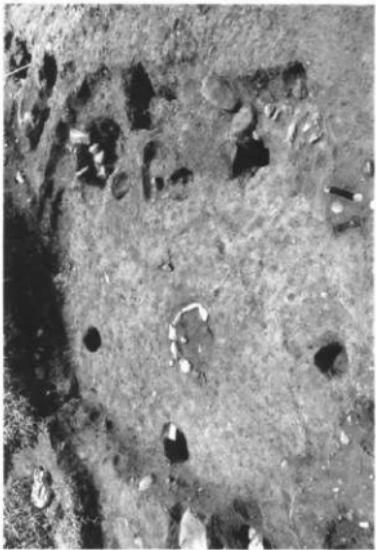
图版 2



38号住居址



42号住居址



43号住居址

42号住居址炉

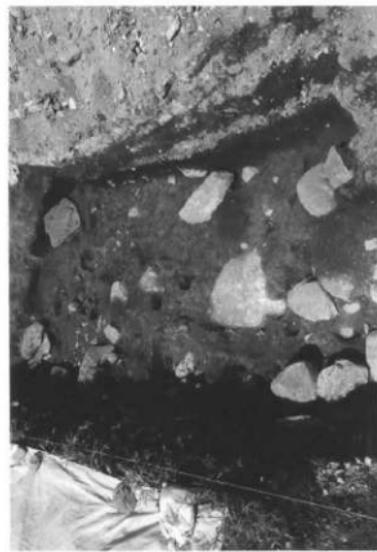
图版 3



44号住居址砾石



46号小壁穴黑耀石出土状态



48号住居址

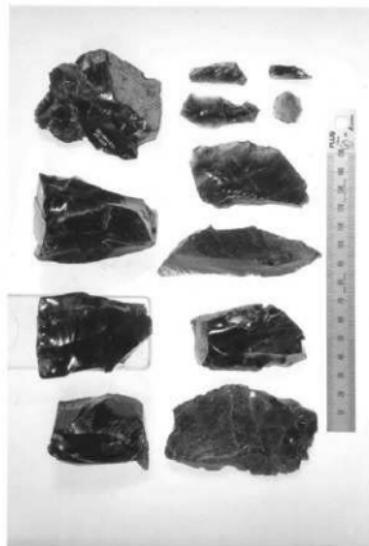
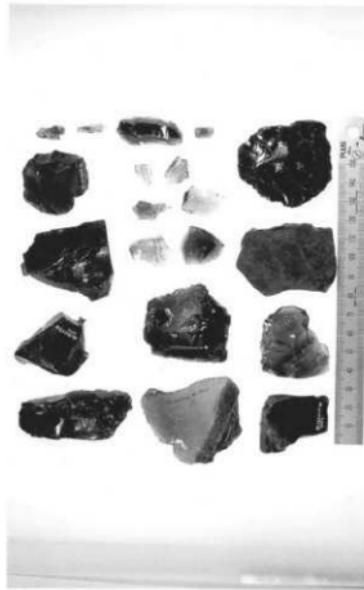


46号小壁穴出土黑耀石

図版 4



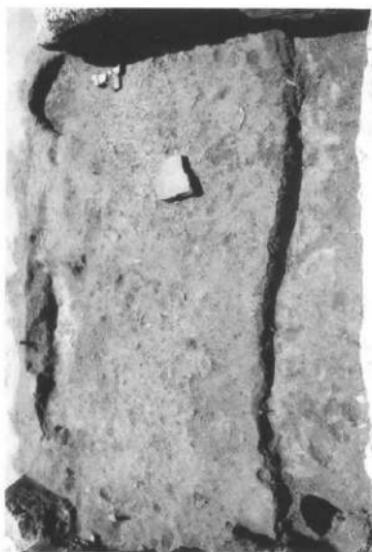
132・138号小堅穴



图版 5



35号住居址



36号住居址



1号方形柱穴列



1号配石址

図版 6



図版 7



43 住 118



43 住 116



43 住 119



43 住 121



48 住 129



48 住 128



69P 152



138P 156



149P 155



発泡した石鐵とスクレイパー（石鐵 32 住・スクレイパー包含層）

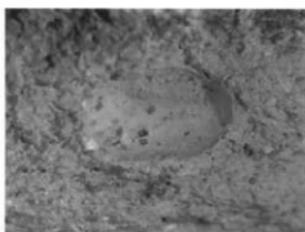
付章 志平遺跡出土の土器についての種子圧痕



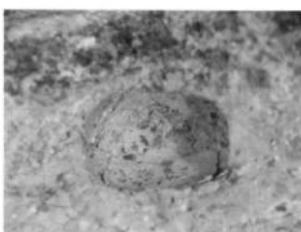
圧痕のある土器（縄文時代中期後葉）
32. 13X2R8. 24. 62P



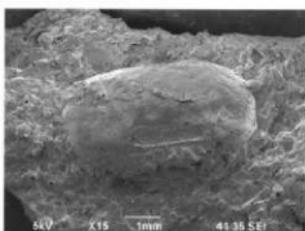
破断面にある圧痕



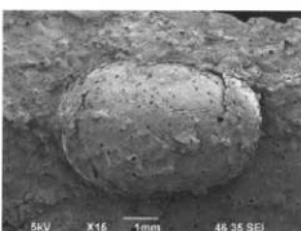
破断面についての圧痕（拡大）



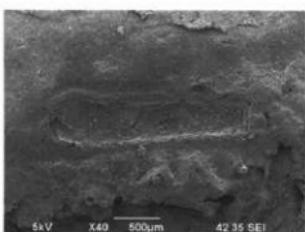
破断面についての圧痕（拡大）



レプリカ電子顕微鏡写真



レプリカ電子顕微鏡写真



レプリカ「へそ」拡大写真

※明治大学大久保忠和考古学振興基金奨励研究

「中部高地における縄文時代植物質食料利用の研究」
の成果による

※電子顕微鏡写真は熊本大学埋蔵文化財調査室

小畠弘己博士に依頼し提供を受けた

報告書抄録

ふりがな	しひら						
書名	志平遺跡						
副書名	国補志平川砂防激甚災害対策特別緊急事業に伴う志平遺跡発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名	郷土の文化財						
シリーズ番号	30						
編著者名	長野県岡谷市教育委員会						
編集機関	長野県岡谷市教育委員会						
所在地	〒394-8510 長野県岡谷市幸町8-1 TEL0266-23-4811						
発行年月日	西暦 2010年3月10日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所収遺跡名	コード 市町村	北緯 度分秒	東経 度分秒	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
し 志 平	長野県 岡谷市 川岸	20204	32 36° 2' 50"	138° 1' 49"	20080512～ 20080905 20090804～ 20090819	1214.7	志平川砂防 激甚災害対策 特別緊急工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
し 志 平	集落	縄文時代	縄文時代住居址 12棟 平安時代住居址 3棟 方形柱穴列 1棟 小窓穴 93基	縄文時代土器図化点数 58 縄文時代石器図化点数 226 コハク製垂飾 1			
要約	長野県岡谷市川岸の志平遺跡について、平成20・21年度に実施した発掘調査の本報告書である						

郷土の文化財 30

SHIBIRA SITE

志平遺跡

発行日 平成 22 年 3 月 10 日

発行 岡谷市教育委員会

〒394-8510 長野県岡谷市幸町 8-1

TEL 0266(23)4811

生涯学習課分室埋蔵文化財整理室

〒394-0028 長野県岡谷市本町 4-1-39

TEL 0266(23)4811 (内)1239

印刷 マルモ印刷株式会社

〒394-0027 長野県岡谷市中央町 1-7-13

TEL 0266(21)1100

編集 みやび企画

